
永遠ノ園

幼ぬこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠ノ園

【Zコード】

Z3850G

【作者名】

幼ゐこみ

【あらすじ】

永遠の園とされるリボス。そこへ足を踏み入れた者は、一度と帰れないと言つ。雄の赤狼 ドール のリボルトは、狩りの最中に闇に呑まれ、その異世界へと辿り着いてしまう。其処は、争いのない平和の国だつた。リボスの狼の群れに入り、何の疑いもなく安息の中で暮らしていた彼だが、白い大山猫 リンクス の女に出会つた頃、楽園の影が見え隠れし始めた。

序章（前書き）

書かれた限り更新してこれます。よろしくお願いします。

序章

序章

緑があつた。

深い深い緑だつた。

緑は大地にもあり、時に田にもある。
辺りは緑に包まれていたのだ。

深く、濃厚な緑。

その緑の奥に、動く者があつた。

その動く者を、見つめる者があつた。

見つめる者は、赤い毛で覆われた狼ドール達だつた。ドール達は
ゆっくりと緑の中に散り、動く者との距離を縮めていく。ふと、動
く者が止まつた。

ドール達も止まつた。一頭一頭が、互いの息を確認する。

その時、風が吹いた。気まぐれな風が、吹き去つていつた。幾ら
かの草が攫われ、また幾らかの気配も攫われていく。

動く者が倒れた。風に押される様に、倒れ、そのままの勢いで駆
けていく。

ドール達が立ち上がつた。動く者を追いかけ、追いかけ、追いか
け続ける。

動く者は逃げた。逃げて、逃げて、逃げ続ける。

互いに風になり、互いに風を産み、走り去つていく。

だが、ドール達は止まつた。本能的に、ただ直感的に、彼らは止
まつた。動く者が、睨むようにドール達を見つめ、そのまま進んで
いく。

其処は、闇だつた。無限に広がる闇だつた。動く者の姿が、その
闇に飲まれていく。

ドール達はそれを見送っていた。何も言わず、ただじっと、動く者の背を見送った。

ただ一頭、唸つている者があった。

その者は、動かぬ仲間たちに痺れを切らし、走りだした。慌てて仲間たちが彼を止めようとする。

だが、彼は耳を貸さずに、動く者を追いかけていった。

何の戸惑いもなく、何の躊躇いもなく、闇へと飛び込んでいった。ドール達の目から、彼の背が消えていく。

闇はしんと静まり返り、ドール達の前に広がっていた。やがて、ドール達の止まっていた時間が蘇り始めた。

一声、一声、呴いた後、一番小柄なドールが、絶叫した。

「リボルト！」

その声は、凍っていたドール達を完全に溶かしたけれども、当のリボルトには届かず、闇に吸い込まれていった。闇はその声を吸い込み切ると、ドール達の目の前で激しく萎んでいき、やがて、跡形もなく、消えた。

一章 永遠の園（一）

第一部

一章

永遠の園（一）

その昔、陸の果てには永遠の園があった。その園はリポスと呼ばれ、その余りの美しさに、ある神に大層気に入られ、不滅の地として施しを受けたと言われている。

最も、それを言っている者達の中で、リポスを見た。もしくは、行つたという者はいなかつた。何故ならば、其処に足を踏み入れた者は、二度と帰りたくなるからだ。帰らなくていいと思う程の、至福を与えるからだ。

だからこそ多くの人間達は、リポスを探して旅に出たのだ。時には私財を投げ打つてまで、リポスに執着する人間もいた。彼らがリポスに辿り着けたかどうか、知る者はいない。辿り着いたのか、はたまた志し半ばで死んでしまったのか、知る者はいなかつた。だが、いなだけ、リポスは新たな挑戦者を生み出すのだ。

そんな人間達を、野の獣達は嘲笑つた。如何にも人間らしい世間知らずの戯言である、と。だが、そんな野の獣達の中できえも、リポスを信じる者と信じない者とでは半々だつた。そして、人間達のように、リポスを望む者が存在している事も、また事実だつた。

リポスは、望む者全てが辿りつける場所ではない。

人間達と違い、野の獣達はそれを知つていた。だからこそ、望めども、旅立たない者が多いのだ。態々自身の命を冒してまで、リポスに行こうとも思わなかつた。

だが皮肉な事に旅立つ人間達よりも、そうした野を懸命に生きる

獣達の方が、偶然にもリポスに足を踏み入れる事が多かつたのだ。
彼らが望むにしろ、望まないにしろ。

兎も角、赤狼ドールのリボルトは、その偶々足を踏み入れた獣の一人だつた。

リボルトは茫然とした。目の前に広がっているのは、何処までも長閑な平原。先ほどまで追っていた雌鹿は、リボルトの事など忘れたかのように、平原を見渡している。リボルトもまた、彼女の事を今瞬間忘れていた。

リボルトは雌鹿を再び目に映し、咄嗟に身構えた。雌鹿がふとこちらを見やる。リボルトはその目を見つめた。見つめながら身構え続け、だが、彼は首を傾げた。

何故、身構えているんだ？

彼は疑問を覚えた。先ほどまで、腹が減つて仕方なかつた。仲間と共に雌鹿を見つけ、その意外な程の俊足にたじろぎつつも、甘美な肉を求めて雌鹿を追い続けた。それなのに、如何したことか。

雌鹿は戸惑いを隠せない様子で、リボルトと周りの景色とを見比べていた。

狩るならば絶好の機会だ。絶好の機会である筈なのだ。それなのに、如何したことか。

何で、狩るのだろう？

リボルトは自身に訊ねた。狩る理由がなくなる程、空腹を感じないのだ。腹が減つていないのでならば、あの雌鹿を狩る理由もない。リボルトは座り込んだ。そして、雌鹿と同じく、彼も辺りを見渡す。一体此処は、何だろうか。

「リポス……リポスなの？」

ふと声がした。リボルトは目を這わせた。雌鹿が言つたようだ。彼女は戸惑いつつも、リボルトに目を合わせた。

「リポスのかしら……？」

そう訊ねられ、リボルトも困ったように首を傾げた。雌鹿はリボルトに近づいてきた。リボルトは奇妙な感覚に陥つたが、じつと彼

女を待つた。

「絶対そう」

雌鹿が言った。リボルトは苦笑する。「いやって獲物となる生き物が自分に歩み寄ってくる事など、そういう無い。きっと此処は彼女の言ひとおり、リポスなのだろう。そう彼は思った。それならば、と彼は思い、雌鹿に訊ねてみる事にした。

「あんた、名前は？」

雌鹿はリボルトに目を向けると、くすくすと笑いだした。リボルトは無表情に待つた。彼女は一頬り笑い続けると、答えた。
「狼に名を訊ねられるなんて初めてだわ。きっとこれはリポスなのね」

「それで？ 名は？」

リボルトは尾をぱたりとひと振りし、訊ねた。

雌鹿は目を細め、リボルトに言った。

「プレティ。自分から名乗るなんて事、狼はしないの？」

「しないね」

リボルトは目を細めて言った。

「少なくとも、明らかに順位が上の者にしかしない」

「ふうん」

雌鹿のプレティは、やや呆れたように言った。

リボルトは不思議だった。普段なら会話する前に襲いかかるか追い払うような鹿と、気安く喋れる自分がいるのだ。それも名前まで聞いて。これこそが、ここがリポスであるという証拠とでもいうのだろうか。

「プレティか」

リボルトは言った。

「似合つた名だな」

「どういう意味？」

プレティがやや怒ったように訊ねてきた為、リボルトはきょとんとして言った。

「ただそう思つただけだが？」

尾を一旦振り、リボルトは軽く目を閉じた。

「俺はリボルト。見ての通りドールの冴えない男さ」

「ああ、執拗そうな名だわ。貴方にぴったり」

「それはどうも」

リボルトはくすりと笑んだ。プレティがどんなに悪態を吐いても、リボルトは気にならなかつた。寧ろ、皮肉交じりのコーモアとして解する事が出来たのだ。不思議だつた。若しも、少し前のリボルトだったら、今すぐにでもこの雌鹿に飛び掛かつて、その腹に真っ先に喰らいついていた筈なのに、全くそんな気にならない。

「ともかく」と、プレティは言つた。彼女は周りを見渡しながら、小さく溜め息を吐いてから、リボルトに言つた。

「これからどうしようかしら。此処がリポスだとして、私達はどうすればいいの？」

「さあね」

「ともかく、此処に居ても仕方ない。少し様子を見に行かないと」

「ああ、そうだね」

リボルトは適当に返事をし、欠伸を漏らした。思えば、このプレティを追つていた所為で、寝ていない。何と足の速い、タフな鹿だろつ。今更ながらに、リボルトは思った。

「ちょっと」

プレティが言つた。

「貴方、他人事の様に相槌打つてゐるけど、そつはいかないわよ。私と一緒に来なさい」

リボルトは面白くない顔をした。出来れば此処で休んでから行きたい。行くならば、勝手に行つて欲しいと思つた。だが、そう思いつつも、ここが一体何物かをきちんと理解すべきだと考えなおしたリボルトは、「分かつた、分かつた」と立ち上がつた。

「よし、行つてみようじゃないか。プレティ。何だか妙だが、一緒に行つてみよう」

そう言って、リボルトとフレティは平原を歩きだした。踏み込む地面は柔らかく、足を撫ぜていく草も、妙に暖かかった。空の青も不思議な色合いを留め、吹く風も仄かに香っている。少し前までいた世界と何も変わらない。だが、何かが違う。何が違うのだろう。リボルトは考えながら、フレティと歩いた。

歩く内に、自分たち以外の動く生き物が目に入りだした。飛ぶ鳥や虫、または草の間で遊ぶ兎達。

「あの兎に訊いてみようかしら」

フレティが言い、駆けて行つた。リボルトもすぐに追つたが、やはりフレティの足には追いつかなかつた。彼女は真っ先に遊んでいる兎達に話しかけ、何やら会話している。リボルトは急いでその場所へと近寄つて行つた。ふと、兎の一羽がリボルトを振り返り、リボルトは遠慮で止まつたが、兎は何事もなかつたかのように目線を逸らし、再びフレティを見上げた。

「つまり、ここがリポスで間違いないの？」
フレティが言った。

兎達は頷き合い、フレティに答える。

「そうだよ。ここが永遠の園」「ずっと遊んで暮らせる永遠の園だよ」「お姉さんたちは選ばれたんだね。ここですと幸せに暮らせる権利があるの」「良かつたね」

リボルトは兎達を見た。どの兎達も、リボルトを見ても恐れの一つすら浮かべない。それどころか、彼らはリボルトにも話しかけてきた。

「小父ちゃんみたいな狼も、他にも居るんだよ
「あつち、今日はあつちで見かけたの」
「何人かいるんだよ」

無邪気に説明してくる兎達に、リボルトは目を細めた。無垢な子ども達。この兎達は、まだ純粋な子どもだった。親は一緒なのだろうか。子ども達だけでここへ来たのだろうか。もしそうならば、きっと悲しんでいることだろう。

リボルトはそう思つたが、ふと、今まで他でもない自分が、このいつた仔兔を情け容赦無しに親から奪つ者であつた事に気付き、失笑した。

やはり変だ。ここがリポスだからだらうか。

リボルトが再び首を傾げていると、ふとプレティがこちらを見た。
「リボルト。私、ちょっと森に行つてみるわ」

「森？」

リボルトが訊ねると、兎達が跳ねながら教えてきた。

「森には鹿がいるの」「このお姉さんみたいな鹿がね」「いっぱいだよ！」

兎達の声を背後に、プレティは耳を動かした。

「私、行つてくるわ。リボルト、貴方も此処の狼に会つてみたら如何？」

プレティはそう言つと、呆氣なく去つてしまつた。リボルトは戸惑つた。だいたい、此処へ来るよう誘つたのはプレティだ。それなのに、彼女はリボルトを振り返りもせずに、行つてしまつたのだ。困惑の内に佇んでいると、兎達が不思議そうに覗いてきた。

風を感じながら、だが、リボルトはプレティの去る背を見つめていた。獲物として見ていたのとは違う目で、友を見送る様な眼で、見つめていた。

その時、ふと兎の一羽が言つた。

「他の狼達はあっちだよ？」

「氣を利かせたつもりなのか、その兎は小さな手で方向を示していた。

リボルトは苦笑し、その方向を見やつた。其処は、禿山へと続く森林だつた。プレティの去つた方向とは逆の、森林。

「とても広い所なんだねえ、ここは」

リボルトが言つと、兎達は自分の事を褒められたかのように笑つた。

「でしょう？　すゞいでしょう？　ここはずつと広がつてゐんだよ

！」

リボルトは小さく頷き、兎達に言った。

「あっちにいるんだね。有難う」

そして、ゆっくりと、その場所へと歩んでいく。

兎達は暫しリボルトを見送っていたが、やがて、再び、遊び始めた。

一章 永遠の園（一）

永遠の園（一）

リボルトは平原を走りながら、ふと疑問を感じた。

空を舞う鳥。草叢を飛ぶ虫。所々居座る獣たち。その誰もが、リボルトに取つて違和感を拭えない者であった。

何がおかしいんだ？

リボルトは考えながら走つた。しかし、よく分からなかつた。兎も角、何かが異質だ。そう考えかけ、リボルトはふつと笑んだ。当たり前だ。ここはリポスなのだ。永遠の園であるリポスなのだ。外界の野蛮な雰囲気を一切持たない場所なのだ。其処に住む獣がリボルトの知らない印象に包まれている等、当然ではないか。

リボルトは考えなおし、兎達の示した場所へと進む事だけに専念した。禿山を後ろに携える森林。否、森林を侍らす禿山か。
どちらでもいい。

其処に狼がいるのならば、挨拶ぐらいはして置こうではないか。そう思いつつ、走る。だが、それも、後付けの理由だ。結局のところ、リボルトは何故自分がこうも一生懸命走っているのか、分からぬのだ。

リボルトはふと空を見上げてみた。

日が真上に登り、辺りを一層明るくしていた。

暗闇から突如此処へ來たリボルトは、最初、このリポスには時がないのだと思った。だが、違うようだ。日は、リボルトとプレティがここへ來た時よりも、動いている。今より確實に傾き始めるのだ。昼と夜がある。其処は、外界と変わらないらしい。ただ、外界との時空は歪み、ずれているという事は確かだつた。

ふと、リボルトは立ち止まつた。森林の入口に付いたのだ。ただ

一人で駆け抜ける時間は、仲間と駆け抜ける時間と違い、早くも遅くも感じた。一体どちらだろうか。ふと、リボルトは疑問に思った。仲間と駆け抜ける時間と違うのは確かだ。だが、それが遅いのか、早いのか、全く分からぬ。

まあ、分かつた所で如何という訳でもない。

リボルトは一人納得し、森林に足を踏み入れた。不意に、まるで自分の周りの空間が歪むような不自然な感覚に浸る。リボルトは一瞬怯み、立ち止まつた。不自然な感覚も、動きを止めた。

何だ、これ。

リボルトは考えつつ、もう一歩踏み出し、様子を見た。風が赤い体毛を撫ぜていく。リボルトは気を取り直し、森林を突き進んでいった。見た目は外界と変わらない。リボルトがドールの仲間達と駆けまわっていた場所と変わらない。だが、何かが違う。雰囲気か、匂いか、色か、何か。リボルトはこれを、余所特有の違和感だと思う事で、自分を納得させた。きっと、見知らぬ土地だからこそ、不安に思うのだ。

ざわざわとした空氣の振動が、リボルトの耳に沁み込んでくる。森林の音楽。リボルトの耳に慣れた森林の音楽だ。だが、それも、少し違つた。何が違うのだろうか。何かが足りないような気がする。リボルトは考えた。考えに考えた。だが、何が足りないかは分からぬまま、森林を更に進んでいった。今のところ、リボルトの話しが相手になる様な者は見当たらない。さつきから虫ばかりだ。住む世界の違う者ばかりがいる。

本当にいるのだろうか。

誰でもいいから現れないだろうか。リボルトはそう思い始めた。だが、そんな願いも虚しく、狼はおろか、栗鼠や兔さえもいない。これならばプレティについて行けばよかつただろうか。リボルトは幾度かそう思つたが、その度に鹿の群れに囮まれて肩を竦める惨めな自分を想像し、やはり止めておいて良かつたと安堵していた。

「それにしても、誰もいない」

遂にリボルトは独り言を放つた。返事をしてくれるような者は居ないだろうけれども。

「いるよ

いた。

リボルトは振り返った。振り返り、すぐに大きく溜め息を吐いた。そして、自分の鼻が病気なのではと心配までしたのだった。リボルトのすぐ後ろに、タヌキがいたのだ。一人きりで、振り返るリボルトに平然と視線をやつている。何時から居たのだろうか。

「兄さん、見慣れない人だね」

タヌキが言った。

「何時から此処にいるんだい？」

「さつきだ」

リボルトは短く答えた。

タヌキは短く「ほう」と声を漏らすと、動きだした。ふっくらした身体が、振動で揺れている。タヌキは期待を裏切らずにのつそりと駆け寄つてくると、リボルトの匂いを嗅いだ。リボルトはやや緊張し、身を竦めた。

「何でタヌキに怯えているんだ、俺は。
すぐに自分に呆れた。

タヌキはリボルトを見上げ、口を開いた。
「ほうほう。兄さんはドールってやつかい？」

リボルトはやや呆れてタヌキを見やつた。赤狼ドールと言えば、その名を聞くだけで被食者の背筋まで凍らせてしまう程の猛獸だ。その姿を一目見ただけで彼らは一目散に逃げてしまう。リボルトはそれを誇りに思つていた。無論、仲間達もそうだ。時に、虎や熊などとも戦いながら、生き抜く事もあつた というのに、タヌキは冗談を言つてゐる訳ではないらしい。本当に一目で分からなかつたのだろうか。否、きっと、確認の為に言つたのだろう。此処がリボルトだからタヌキとてそのような事を言つたのだ。

そう思いリボルトは、溜め息混じりにタヌキに言つた。

「見て分かるだろ？ その通りだ」

タヌキは真丸の目をリボルトに向けると、苦笑を浮かべて言った。
「いやはや失礼。何せ、あつしの育った地域じやドール所か狼自身
もいなくてですねえ。知つても、噂や昔話や伝説ぐらいもの
で」

リボルトは驚いた。狼のいない地方があるなんて知らなかつたの
だ。

「犬ならよく見かるんだが、やつぱし違うんだな、と此処へ来て理
解しましたよ。丁度この森林の先にも狼がいるんでさあ」

「ああ、さつき兎の子ども達に聞いた。会つてみようと思つて……」

タヌキは「ほう」と無表情に尾を振つた。

「それはいいでしような。彼らはあの禿山を駆けるのが好きらしい
ですぜ？ 夜な夜な遠吠えなんかが聞こえますわ」

「あの禿山ねえ」

リボルトは前を見やつた。木々の間から、禿山は見える。淡い灰色
に染められ、空に浮きだされるように佇むそれは、人間が見たら
絵のようだと思うだろ？ リボルトにとつては、非現実的にしか映
らないのだが。

「そうそう」とタヌキは付けくわえた。

「此処にいる狼は、兄さんの様なドールではありませんぜ」

リボルトはふと首を傾げ、タヌキを見やつた。

タヌキは続けた。

「ドールの御方が来たのは初めてかも知れませんな。まあ、あつし
のリポスの全土を回つたわけじやないので確かじやありませんがね

え」

「此処にいる狼は何人なんだ？」

「ええ、確かに五人だつたと」

リボルトは鼻で息を吐き、口を閉じる。五人も狼がいるのに一人
もドールがないなど、リボルトには想像もつかなかつた。リボル
トの居た地域は、狼と言えばドールだとつてもいいほど、ドール

が沢山いたのだ。

「そいつらがドールじゃなけりや、何なんだ？」

「まあ、会つてみりや分かりまつせ。兎も角あつしは、兄さんのような綺麗な赤毛の狼は初めて見ました」

ぴんと来なかつたが、タヌキの世辞は些か嬉しかつた。

リボルトは何も言わず歩み出した。タヌキも何気なくついて來いた。

ふと、その静けさの中で、リボルトは思案に入る。ドールではない狼達。リボルトの中に、リポスに来て最初の好奇心が生まれた。何せ、ドールの中で、当たり前のドールとして生活していたリボルトは、赤い毛並みが珍しい等という事は初めてだつたのだ。寧ろ、違う毛並みの方が珍しいとも思う。兎も角、自分とは何か違うその狼達と、何か話してみたかった。その期待は、リボルトの足を自然と動かしていく。

無言の中でも歩く内に、リボルトはふとタヌキの存在を忘れていた事に気付き、ふと辺りを見渡した。そして、一瞬だけ驚愕した。
増えている。

タヌキの隣に、クズリがいる。小さな熊にも似たその生き物は、さも当然であるかのように、振り返つたリボルトをじっと見つめていた。

タヌキがリボルトの表情を見て、濁し笑いをした。

「ああ、こいつですかい？　あつしの友人でさあ。気にしないでやつて下さいな」

リボルトは何も言わず、向きなおつた。

気にしなくていいなら、気にしないよつにしよう。

リボルトは再び興味を狼達へと向け、歩きだした。森林は何処までも静かで、それでいて、あのざわざわとした音楽が耳に沁み込んでくる。其処から不快感は生じず、ただ奇妙な心地よさだけがリボルトの体を包み込んできた。その感覚に浸りながら進むリボルトは、再びタヌキや、さつき現れたクズリの存在を忘れて進みだした。

森林の光が薄れてきた。木々の間から見える空が赤く染まっている。夜が来ようとしているのだろう。リボルトはふと立ち止まり、赤く染まっていく空を見上げた。其処で、視界にタヌキとクズリが入り、彼らの存在を思い出した。

ん？

リボルトは空から目を外した。美しいけれども明日も見られるだろう夕焼けよりも、もっと気になる光景が視界に映ったからだ。タヌキとクズリを見つめ、リボルトは呆気に取られる。

増えている。

仲よく並ぶタヌキとクズリの間に、アライグマがいた。何の違和感も無しに、其処にいる。クズリと同じように、唐突に現っていた。タヌキが再びリボルトの表情に気付き、さつきのクズリの時と同じような顔で言った。

「あ、こいつも友人です」

「何で付いてくるんだ？」

氣味を悪くしたリボルトは、思いきってタヌキに訊ねてみた。すると、タヌキはくすくす笑い、答えた。

「そりや、兄さんが気になるからですって。兄さんは気にしないで下せえ」

そうすることにした。

リボルトはタヌキとクズリとアライグマとを従えるかの様に、先へ先へと進んだ。刹那的な夕焼けが終わりを迎へ、今まで影に隠れていた月が、辺りを照らし始めた。と、その時、リボルトの耳に、親しみを感じる声が聞こえた。

狼の咆哮。人間が聞けば物悲しいその旋律は、リボルトにとっては楽しげな歌声だった。

リボルトは走った。一刻も早く、彼らに会いたい。会つて話したい。その思いに駆られ、どんどんと走っていく。その間、後ろについてくる気配が多くなった事を薄々感じていたが、タヌキに一度言わされたように、気にしなかつた。

やがて、長い森林が終わりを迎えた。

リボルトの目に、禿山への入口が見え始める。

其処へ来た時に、ふとリボルトは振り返った。

誰もいなかつた。

目を凝らせば、森林の終わり口で、背を向ける無数の獣たちの姿が見える。リボルトへの興味も逸れたらしい。それにしても、沢山の獣だ。タヌキに会うまでは一人も会わなかつた事が信じられないくらいだつた。

リボルトは目を逸らし、禿山を見上げた。

この何処かに狼達はいる。

その時、再び遠吠えが聞こえた。場所を告げる声。まるで、リボルトを呼んでいるかのような内容。

リボルトは禿山の地を踏んだ。

途端に、目眩を覚えた。森林に入り込んだ時と同じ違和感。だが、風が彼の毛並みを整えると、すぐに消えた。

何なのだろう、これは。

リボルトは立ち止まって振り返る。毛並みを整えていつた風は、遠くへと消えていった。

遠吠えが聞こえる。リボルトは耳にその音を入れ、再び走りだした。

一章 永遠の園（II）

永遠の園（II）

禿山の地も、柔らかかった。リボルトの足を引き込むかのよつて、禿山の大地は足跡を作っている。

リボルトはしかし、気にしなかつた。兎も角、前へ。兎も角、声のする方向へ。リボルトは走った。匂いのする方向へ。リボルトは走った。

月が昇り、輝いている。その光は禿山を照らし、禿山を光の山へと転生させているかのようだつた。薄明るい暗闇。何処かあべこべなその中で、リボルトは走った。匂いを追つて、声を追つて。

この先にいる。

また、遠吠えが聞こえた。

その時、リボルトは、足跡を見付けた。リボルトの足よりも、大きい物もある。小さい物もある。それらはリボルトの前を横切り、道でない道を真っ直ぐと進んでいる。

リボルトはそれを辿つた。

この先なのだ。

そう信じ、走り続けた。

匂いは濃くなつていく。やはり、この先だ。狼の遠吠えが聞こえる。不思議な遠吠えが聞こえる。やはり、此処にいるのはドールではない。

近づけば、近づくほど、リボルトには分かつた。
違う種族の遠吠え。複数の遠吠え。

禿山はどんどんと足場を悪くしていった。まるで、リボルトが彼らに会う事を阻んでいるかのように。新参者のリボルトに、嫌がらせをしてくるかのように。

リボルトは立ち止まつた。禿山の頂上が見えてきた。そして、リボルトは目を奪われた。満月。今宵は満月だったのか。満月が、禿山の頂上からリボルトを見下ろしている。神々しいまでの輝きが、リボルトを包み込む。安樂の中。その中にいるような感覚に包まれ、リボルトは息を漏らした。

だが、リボルトは首を傾げた。外界とは歪んでいるのだろうか。昨日までいた世界を考えて、今、満月を見ているのは、不自然な事だつた。そういえば、昼間共にいたタヌキは、リボルトとは違う地域からやってきたと言つていた。

不思議な所だ。

リボルトは一人思つた。リポスだから。そう納得する程には、リボルトはまだリポスに馴染んでいなかつた。全てが不思議で、全てが異質だつた。

ふと、満月を見つめる。禿山の頂上に生えるように光つてゐる満月。その真ん中に、影がある。一頭の、影。リボルトは目を奪われた。漆黒の狼の影。その蒼い双眸が、真っ直ぐリボルトを見つめている。リボルトは息を飲んで、その狼に近づいた。

狼は、じつとリボルトを待つてゐる。近づけば、近づくほど、狼の姿ははつきりしてきた。影ではない。実際に真っ黒なのだ。息も吐けぬほど、美しい黒の狼。その目は何処までも蒼く、何処までも澄んでいる。漆黒の狼はリボルトを見つめ、目を細めた。

「リボルト」

リボルトは固まつた。

「面白い名だ」

漆黒の狼は真つ赤な口を開いた。

くつくつと漆黒の狼が笑つた時、リボルトの周りを取り巻くように、気配が漂い始めた。驚いて見渡したリボルトの目に、四頭の狼の影が見えた。それぞれの色、それぞれの大きさで、リボルトを見つめている。黄色い狼、灰色の狼達、そして、真っ白な狼。どの狼も、美しかつた。

リボルトはふと漆黒の狼を見つめた。

「何故、名前を？」

漆黒の狼は目を細め、リボルトをじっと見つめた。

「我が名はシェイド。この禿山の夜の王」

シェイド。リボルトは咳きながら、漆黒の狼を見つめた。美しい黒の狼の目を見つめた。

「お前が来る事は知っていた。リボルト。我が群れで安息の元に暮らすがいい」

シェイドと名乗る狼が言うと、他の狼たちが寄つて来た。リボルトより遙かに大きい者もいれば、小さい者もいる。五頭しかいないはずなのに、その特徴は、被る者がいない。真っ先にリボルトに触れたのは、真っ白な狼だった。

「貴方、見かけない顔をしているわ」

真っ白な狼が言った。淡い色の目を細め、くすりと笑う。その色は、シェイドとは真逆の輝きを放ち、月の光そのものの様だった。「リボルトって言つて。面白い名だわ」

「貴女は？」

リボルトが恐る恐る問つと、真っ白な狼はくすりと笑いながら答えた。

「ブレイズ」

そう名乗った彼女が下がると、他の狼達もリボルトへと近寄り、匂いを嗅ぎ始めた。リボルトもその三頭を見分ける。黄色い色のやけに小さな狼。灰色のやや大きな狼。そして、中位の濃灰色の狼。ふと、最後の狼をリボルトは見つめた。

「犬の匂いがする」

思わず口に出してしまった為、リボルトは身を竦めた。濃灰色の狼はやや顔を顰め、溜め息を吐いた。そしてリボルトをちらりと睨みつける。

「ああ、犬の血が混じつているよ。悪いかね？」

気の強い娘の声だつた。

リボルトは慌てて首を振り、彼女を窺つた。

「氣を悪くさせてすまない。ただ、不思議に思つただけなんだ」
犬の血の混じった彼女は、暫しリボルトの表情を窺つていたが、やはり嫌みを含ませたような溜め息を吐いた。リボルトは困り果てた。本当に不思議だつたのだ。何せ、リボルトの周りに、犬の血を混ぜた者などいなかつたものだから。

印象を悪くしてしまつた。

リボルトは少し落胆した。

「赦してやれよ、ジユナイ」

笑み混じりに言つたのは、灰色のやや大きい狼だつた。

「悪氣があつたわけじゃないんだし」

ジユナイと呼ばれた彼女は、でも、と灰色の大狼を見つめたが、その目に押されて再び息を吐いた。

「分かつたよ、ダステイ」

ダステイと呼ばれた大狼は、苦笑交じりにリボルトを見つめ、言った。

「そう言つわけだから、そう氣を落とすな」

「有難うございます」

リボルトが頭を下げるど、ダステイは不思議そうな顔でリボルトを窺つた。

「ほお？ ドールの一族はもつと怖い者だと思つていたよ」

リボルトは驚いてダステイを見やつた。ダステイは如何見てもドールではない。リボルトも見た事のないような狼。それも、漆黒のシェイドや、純白のブレイズ、そして犬の血の混じるジユナイとも違う一族の様だつた。それは、ダステイだけではなく、傍にいる小さな黄色い狼も同じだつた。

「貴方達は何と言つ一族なのですか？ ドールは他にはいないと
うのは？」

「氣を使わなくていい」

ダステイは一言放ち、ふつと笑んだ。

「俺達に種属名はない。ただの狼だ」

「でも、貴方は？」

「ダステイで良い」

低く言われ、リボルトは言いなす。「ダステイは？ それに」と、黄色い狼に目を移した。黄色い狼はふとリボルトを見上げ、慌てたように言った。

「キイと言つ」

少年の様な声だった。

リボルトは頷き、言つた。

「ダステイや、キイは？」

ジュナイが面白くなさそうな一瞥をやつた。

「新入りの癖にしつこいねえ」

「ジュナイ」

そう咎めたのは、離れた場所から見つめているブレイズだった。

彼女はシェイドの傍から、リボルト達を見つめている。

ブレイズに咎められ、ジュナイは肩を竦めた。

「冗談ですよ。からかっただけ」

ジュナイはそう言つと、リボルトに言つた。

「確かに、ダステイやキイは、あたしらとは少し違う。確か、二人とも、少し変わった所から來ていたような……ねえ？」

ジュナイが見つめると、ダステイは頷いた。

「俺はコヨーテ族。キイはジャッカル族らしい。外界で会つ事はなかつただろうな」

「コヨーテ？」

リボルトは眉を寄せた。

「聞いた事もないな。ジャッカル族は聞いた事はあるけれど

「そりだらうねえ」

キイが言つた。

「俺だって、ドールなんて聞いたことないし、コヨーテも知らなかつたもの。俺が知ってる狼は、ジャッカル族カリカオン族くらいさ」

「ふうん」とリボルトはキイを見やつた。きっと、住んでいる場所が違つたのだろう。リボルトの住む辺りにも、遭遇こそしなかつたものの、噂から、ジャッカル族の存在は確かにあつた。あちらもドール族の事をよく知つてゐるらしい。キイは違うジャッカル族なかもしれない。リボルトはそう思い、つくづく興味深く感じた。昼間会つたタヌキも、ドールの存在をよく知らなかつた。世界は思つてゐるよりも、広いらしい。そして、その広い世界は、同じようにこの永遠の園へと続いてゐるのだろうか。

「ふん」とジュナイが息を吐き、リボルト達に言つた。

「種族なんてどうでもいいだろ? 今宵は満月なんだ。早く駆け回ろうぜ」

座り込んでいたシェイドが立ち上がつた。蒼い目を細め、大きく身を震わせた。

「ジュナイの言つとおりだ。行こう。満月奥へ。新たな仲間を祝して

シェイドが月に向かつて吠えた。心の奥底まで沁み込む、その咆哮。闇夜の霸者宣しく響き渡るその声。

仲間たちが続いて吠えた。それぞれの、声。ドールとは違う声だつた。そして、外界で聞く、狼の声とも違つた。恐ろしさと残酷さを兼ね揃えたあの声ではなかつた。

それは、不思議な程に、神秘的な声。

夜に相応しい、神聖な声。

シェイドが走りだした。夜の風となつて。黒い風となつて。

ブレイズがそれに続く。シェイドとは真逆の真つ白な風となつて。

その二色の風に見惚れていると、ふとジュナイがリボルトを振り返つた。

「行こう。案内してあげる」

夜の禿山の中で、走りだす狼達に、リボルトは続いた。

一章 狼の風（一）

二章

狼の風（一）

今夜も狼達は駆けていく。その行く先は、月奥。その名は月の満ち欠けにより、若干変わる。群れに入つたばかりに、シェイドが言つていた満月奥とはこの事だつた。だが、群れに入つて暫く経つても、リボルトにはこの月奥が理解出来なかつた。他の狼達が理解しているのか確認する事も、何処か憚られた。

リボルトは月を仰いだ。白い月の満ち欠けは、外界と変わりない。違うのは、きっと、その時間の流れ。外界とずれている、時間の流れのみだ。

今宵は、半月。下弦の半月。リポス風に言えば、半月奥。もしくは、下弦奥に行く夜なのだろうか。そう言えば、外界では、どのようないい月なのだろうか。そもそも、リボルトが此処へ来て、何夜経つているのか。

リボルトは半月を見て考え、ふと止めた。

そんな事が分かつたと言つて、如何なるというのか。

今の彼にはこの世界を生きる道はない。この世界は美しい。そして、とても居心地がいい。何故ここへ辿り着いたのか。何がここへ引き寄せたのか。リボルトには分からぬ。だが、幸せに満ちたこの世界で、リボルトは何の疑問も抱かなかつた。

それは、群れの仲間も同じだつた。

彼らは皆、外界から来た。此処にいる生き物の殆どが、外界から来たらしい。この地に生える草花や木々も、外界からの風に釣られてやってきたと言われているらしい。

誰がそれを言つたのか、リボルトは訊ねた。

すると、群れの者達は眉を寄せ、互いに見合わせたのだった。

「あたしはシェイドから聞いた気がする」

そう言つたのは、ジユナイだった。彼女はちらりとシェイドを見やり、首を傾げる。

「違つたかな？」

シェイドは低く唸り、溜め息を吐いた。蒼い目が闇夜に照り返つている。その目は穏やかだが、リボルトは少し怖かった。

シェイドがふっと目を細め、ジユナイに言つた。

「ああ、そうだったな。お前が来た日に教えたかも知れない。だが、それは、俺ではなくてブレイズだったと思うが？」

蒼い目がブレイズを見つめる。リボルトもブレイズを見つめた。闇夜の中で、ブレイズは、白く輝いていた。まるで月の化身かのようだ、その姿。

ブレイズは窺うようにシェイドを見やると、首を傾げた。

「覚えていないわ。何せ、昔の事ですもの」

ブレイズが言つた。

「でも、知つてはいる。此処には神がいる。リポスの守護神がいるのよ。神は此処に住む全ての者を見守り、リポスの平安を守り続けている、とね」

だが、ブレイズのこの話も、誰が言い出したのか分からなかつた。狼達は話し合つた。きっと群れ以外の誰かが話したのだろう。そういう可能性も持ち出された。しかし、誰が言つたのか、誰も思い出せなかつた。そういうものなのだ、と言つたのは、ゴードーのダステイだった。

「此処では搖ぎ無い安息の毎日が訪れる。住む者は皆、死を感じず、永遠の時を生きていく。外界から来たばかりのお前には奇妙に思つかもしれない。だが、直に慣れてくるさ」

リボルトは鼻で息を吐いた。

そういうものなのか。

そう心に問いつつも、溜め息が漏れる。そう思うしかないのだ。

此処を出る方法など無いのだろう。それに、此処を出よう等とも思わない。思はない以上、飽く迄も在るが故に、この世界を受け止めるしかないのだ。

「そう難しく考えないでいいよ」

ジユナイが言った。

「それよりも、今宵の半月。下弦奥は何処なんだい？」

ジユナイの問いに、座っていたシェイドが立ち上がった。

「湖。山に向ひの湖だ」

「へえ」と皿を丸くしたのは、ジャッカルのキイだった。彼は尾を軽く払うように振ると、軽い身のこなしで立ちあがり、シェイドに訊ねた。

「湖つてのは、鹿達の領域じゃないの？ 勝手に行つてもいいのかしら？」

そのあどけない声に、ジユナイが少し皿を細めた。

シェイドは皆を立たせ、キイに答えた。

「別に鹿の物じゃない。あの湖は、他のあらゆる生き物が立ち寄る場所だ」

「でも……」と言いかけたキイだが、そのまま口籠り、頷いた。シェイドはその様子を見つめると、大きく咆哮した。出掛けの合図。リボルト達は一斉に駆けだした。

白に下弦の月に照らされる禿山の道を、狼達は駆けていく。毎夜のように、毎夜と同じく、彼らは駆けていく。時折立ち止まり、月に向かつて咆哮する。黒と白の風と化したシェイドとブレイズを追いかがら、リボルトは咆哮の余韻を味わった。月の光を味わった。美しい空気が狼達を包み込んでいく。美しい匂いが狼達を包み込んでいく。

リボルトはその世界に酔いながら、一色の風を追つた。仲間達と共に。風となつて。

この喜びは狼にしか分からぬ。この楽しみは狼にしか分からぬ

い。

空腹もなく、狩りへの欲求もなく、ただあるのは衝動。山を駆けまわる、衝動。月に吠える衝動。仲間達と風になる衝動。この世界は、美しかつた。

狼達の衝動を静かに受け止めるほど、美しかつた。
何故此処に居るのか。如何して此処に来たのか。

リボルトはその疑問を捨て始めた。
考えるだけ、無粹だ。リボスはこんなに美しいのに、それに泥を塗つている気がした。

そして、また、リボルトは咆哮する。

月に向かつて。

リボルトを包み込む、リボスに向かつて。

ふと、リボルトは月の傍に、違う光を見たよつた気がした。

「あれは……」

その光はリボルトの足を留めさせ、リボルトの眼を口元に打ち付ける。七色の光に見えた。鳥の様な、光に見えた。

「どうしたんだい？」

ジユナイが振り返つた。

「皆、行っちゃうよ？」

リボルトは我に返つた。

はつとジユナイを見つめ、空を示した。

「今、鳥が……」

「鳥？」

ジユナイは不思議そうな顔でリボルトを見つめる。

その時、咆哮が響いた。シェイドの声。呼んでいる。

地を蹴るジユナイに釣られて、リボルトは再び走りだした。

走りながらふと振り返るリボルトの目には、もう光の影も形も映らなかつた。

「あの鳥は？」

独りリボルトは呟いた。

だが、すぐに走る事に専念する。ショイド達が待っている。遅れているリボルトとジュナイを待つている。

夜はすでに半分過ぎているのだ。

美しいその時間が、すでに半分過ぎているのだ。

リボルトは光の事を頭の奥へと仕舞い込んだ。

何であれ、俺には関係ないことなのだから。

「やっぱり鹿がいるねえ」

ジュナイが言った。

リボルトは走りながら、ふとジュナイの見やる方向に目を合わせた。

リボルトとジュナイの走る山道。その横は緩やかな崖となつていて、そして、その奥に、森林に包まれる湖が薄らと見えた。湖には、幾らかの蠢く影がある。

「あれが、鹿達？」

リボルトは首を傾げた。

ジュナイがふと振り返り、怪訝そうに言った。

「何だい、見えないのかい？」

「見えるのか？」

リボルトが逆に訊ねると、ジュナイはけらけらと笑った。

「狼の血が濃い癖に、あんなのも見えないなんてねえ」

小暮迦にされ、リボルトは少し苛立つた。だが、それよりも、ジュナイがあの影を鹿だと断言する事に訝しんだ。

「本当に鹿か？ 何か違う生き物じゃないのか？」

「ふふん。あの湖は鹿の大好きな場所だからねえ……と言つか、何処から如何見ても鹿だよ。それ以外の何者でもない。あんた、よくそれで外界で暮らしてたんだねえ。ドールってのはそんなものなかい？」

ジュナイの言い様に、いよいよ我慢ならなくなつた頃、やつとシェイドに追いついた。

シェイドは何も言わず、緩やかな崖を降りはじめた。それにブレ

イズが続くと、リボルト達も降り始める。

ほどなくして、木々が囲む森林へと入り込む。

月光の飾る木々の間を通り過ぎ、狼達は真っ直ぐ湖へと向かう。

シェイドやブレイズ、そして仲間達を頼りに、リボルトも走り続けた。

寒くもない。暑くもない。

不思議なその大地を、リボルトは走り続けた。

毎夜のように。

月奥へと向かう。

今宵は、下弦奥へ。

下弦奥の、湖へ。

木々が誘つていくのだ。

狼達を。

風になつた狼達を。

シェイドが大きく咆哮した。

一章 狼の風（一）

狼の風（一）

湖は確かに幻想的だった。月の光に照らされて、所々反射している。その輝きは遠くからも確認でき、リボルトの田に焼き付けられていた。

「やはりな、鹿共がうようやくいる」

そう言つたのは、ジャッカルのキイ。リボルトのすぐ横で走り続けるキイだった。

「ここには鹿が多いのか？」

リボルトが問うと、キイはその円らな瞳をちらりと向け、くすりと笑んだ。あどけなさの多く残された笑み。まだ子供もらじしたの十分残された表情。

「まあ、俺達よか多いのは確か！」

キイはそう言つと、リボルトの先へと飛び出して行つた。

湖に着く。

遠くから見えていた輝きと、蠢く影がはつきりとしてきた。

鹿……。

リボルトはその影を見つめた。その動きを見てもうずうずしないのは、単に腹が減つていらないからというわけでもなさそうだ。

鹿達は辿り着いたリボルト達を次々に振り返つたが、何の驚愕も無しに目線を外していく。彼らは彼らで、狼に対する恐怖心等は無くなつてしまつたらしい。それぞれがそれぞれの思つままに座り込み、湖の輝きを体に宿している。

リボルトは息を飲んだ。

この湖こそ、鹿の為に存在するといつ事が良く分かつた。鹿の取り囲む風景はとても美しく、神秘的で、リボルトの田に深く焼き付くのだ。

きっと、彼らはリポスの湖の神に仕えているのだろう。リボルトが一人そう思つてゐると、声を掛けられた。

「リボルト？」

女の声。狼仲間の声ではなかつた。

リボルトは、はつとして見渡す。鹿と目が合つた。一頭の雌鹿。

「プレティ……」

其處にはプレティがいた。共にここへ足を踏み入れたあの雌鹿。リボルトがこの地に足を踏み入れる切つ掛けとなつた、あの雌鹿。だが、リボルトは其れつきり、プレティに声を掛けられなくなつた。美しい。信じられないほど、美しい。全ての輝きは、プレティの為にあるのかと思うほど、美しかつた。その美しさは、他の鹿達とは明らかに違う。プレティを取り巻いている雰囲気そのものが、違うのだ。

狩ろうとしていた時。共にこの地を歩んだ時には思わなかつた。リボルトはだが、息を飲んで、プレティの姿をまじまじと見つめる。

濃紺に包まれた景色の中で、プレティの赤い体毛を鮮やかに着飾らせるかの様に、光の粒が漂つてゐる。その幻想的な光の中で、プレティの体は淡く輝いて見えた。

こんなに神秘的な鹿を見たことがない。

「よかつた。狼の仲間に会えたのね」

プレティが言つた。

微かに微笑む姿そのものが、幻想的だつた。

「リボルト？ どうしたの？」

プレティに問いかかれ、リボルトは我に返つた。

「あ、ああ。プレティ、久しづりだ。君も仲間に会えたようであつたよ」

乾いた笑いを洩らしながら、リボルトは如何にか切り返した。

プレティは不思議そうに、しかし、小さく微笑むとシェイドを見つめて言つた。

「今宵の下弦奥はこちらのですね？」狼の方

「ああ、悪いが邪魔をする。そなたに迷惑をかけよつとは思わん。

どうか気にせんてくれ」

「そつは參りませんわ」

ブレティは言つた。

「狼の方は山の使い。相応の持て成しをせねば、と我らが王も常々」
ブレティはその瞳を横へと向け、傍に座り込む鹿の群れへと声を
かけた。

「ねえ。ベイスン」

ブレティの呼びかけに、むくりと起き上がる者があつた。
リボルトはまた目を奪われた。

それは、見た事もない程神々しい牡鹿だつた。大木の枝の様な角、
石の様な蹄、ふさふさと生えている胸毛、そして何よりも、大きく
開かれた澄んだ瞳。

ただの鹿ではない。

そう思わせるような牡鹿だつた。

ベイスンと呼ばれた彼は狼達を見据えると、穏やかな声でショイ
ドに言つた。

「ショイド。久々だ」

ショイドがやや目を細める。

ベイスンは軽く地面を搔き、続けた。

「そなたら狼がここへ來たのは喜ばしき事だ。どうりで湖の輝きが
常じごとでないはず。歓迎しよう。心行くまで堪能するがよい」

「礼を言つ。光榮な事だ」

ショイドは短く言い、ブレイズを連れて湖へと寄つていつた。
気づけば、他の狼達も各自の好きなようにしている。

リボルトはやや戸惑いつつも、水を飲もうと湖へと寄ろうとした。
腹が減らないのは確かだが、渴きは来る。あれだけ走った後だから
か、リボルトの喉はからからだった。

だがいざ湖へ向かおうとした時、ベイスンに見つめられている

事に気付いた。

リボルトが振り向くと、ベイストンは耳を動かし、じつとリボルトを見つめ続けた。

「なにか？」

リボルトが問うと、ベイストンは口を開いた。

「そなた、来たばかりのドールか？」

リボルトはベイストンを向き座り込んだ。

そして「ええ」と頷き、空かさずに付け加える。

「其処にいるプレティと同じ時に来ました」

ベイストンの耳が微かに動いた。ちらりとプレティを見つめ、再びリボルトを見やる。リボルトとプレティは一瞬だけ目を合わせた。「成程。彼女を追つて来たか。喰うつもりだったわけか。しかし、そなたが狙わなければ、プレティが此処へたどり着けなかつたのも、また事実」

ベイストンはそう言ひて、背を向けた。

「ゆるりと過ごされよ、若き狼」

ベイストンの後を追い、プレティも下がる。リボルトはその二人を暫し見つめると、静かに湖へと向かつた。

ゆっくりと屈み、水を飲む。

不思議な味がした。ここに来て以来飲んでいる水よりも、些か甘いような気がする。

「おい、リボルト」

声をかけられ、リボルトは顔を上げた。

気づけば、隣にジュナイがいた。にやにやと笑いながら、ジュナイは頸でプレティのいる方向を示す。

「あの綺麗な姉ちゃん、お前の知り合いか？」

まるで少年の様な声で、彼女は言つた。

「鹿の王様もはらはらしていたじゃねえか、え？」

リボルトは溜め息を吐き、水を飲み続けた。

ジュナイはその横に屈み、リボルトに囁くように言つた。

「なあ、ちょっと出ないか？ 退屈でさ」

リボルトは水面から口を離し、ジユナイトを見つめた。

「いいのか？ 勝手に抜け出しても」

「夜明けまでに帰ればお咎めなしわ」

けらけら笑うジユナイトを見つめ、リボルトは暫し考えた。仄暖かい風。心地よい匂い。甘い水の貯まるこの場所。

リボルトは鼻で笑い、答えた。

「一人で行けよ」

「な、なんだよ！」ヒジユナイトは押し殺した声でリボルトに噛みついた。尾をばたばたと振り、不満そうな顔でリボルトを見つめる。「か弱い女の子一人で夜道を歩かせる気かい？」

「キイやダスティを誘えればいいだろ？？」

ジユナイトは呆れたように「キイやダスティ！」と繰り返し、リボルトに言った。

「キイが用心棒になるわけがないだろ？ こっちが保護者じゃないかい。それに、ダスティだつて？ あんな奴から守つてもうつためにあんたを誘つてるんじゃないか！」

「おい、俺の話をしてないか？」

少し離れた場所からダスティが声をかけてきた。

ジユナイトは呆れ顔のまま「してないさ」と答えると、リボルトを見つめた。

「なあ、頼むよ」

リボルトは息を吐き、考える。

このリポスでジユナイトが心配するような荒くれ者が存在するのだろうか。そもそも、そんな危険を冒してまで群れを離れる必要があるのだろうか。

そうは思ったのだが、ジユナイトは喰い下がらない。

とうとうリボルトは頷いた。

「わかった。だが、少しだけだぞ？」

「有難う」

ジュナイは本当に嬉しそうに笑つた。

その笑みを見ると、リボルトも何故か嬉しくなった。

何だ、俺。

すぐに覚めたのだが。

兎も角、ジュナイに導かれるままに、リボルトは歩きだした。明らかに群れから離れるような進み方だったといつのに、一番咎めてくる筈のショイドやブレイズは何も言わなかつた。ダステイやキイに至つては、気付いていないようだ。

夜明けまでに帰ればいいだろうしな。

そう思いつつ、リボルトはジュナイに続いて歩いた。

一章 狼の風（三）

狼の風（三）

辺りは冷え冷えとしていた。

この地へやつてきて、初めて感じる寒さかも知れない。
だが、リボルトは思う。

それは、決して外界と同じ寒さではなく、無意識のうちに生まれ
ては去つていく風のみの生む冷たさだった。

やはり此処は違う。

リボルトは思いながら、ジュナイに続いた。

彼女が何処へ行きたいのか、リボルトにはよく分からぬ。だが、
彼女曰く、「たまには群れを離れたリフレッシュも必要だ」との事
なので、リボルトは黙つて彼女に続いた。

下弦の月が傾いている。

あどどのくらいで夜明けなのか。

リボルトはそればかりを考えていた。

ジュナイはと言つと、リボルトが居ても居なくとも同じなのでは
ないかと思う程に、勝手氣ままに進んでいた。だが、リボルトがわ
ざとその場で止まってみたり、違う道へと行こうとする、目敏く
気付き、文句を言つ。

彼女の背には田でも付いているのかと疑う程に、リボルトの行動
を呼んで振り返るのだ。

リボルトはだんだん疲れてきた。
黙つてついて行くのが辛い。
何よりも、居た堪れない。

「なあ、ジュナイ」

彼は遂に声をかけた。

「何処へ向かってる?」

リボルトの問いに、ジュナイトはちらりと振り返り、眉を微かに寄せた。その仕草は少年らしく、ジュナイトが娘である事を忘れてしまった。

「うん、実は……」

そう喋り出すジュナイトに、リボルトは少し驚いた。話せるような目的があつたとは思わなかつたのだ。ただふらふらと歩いているだけかと思っていた。

ジュナイトは顎で森林の先を示した。

禿山へと続く道。

リボルト達が先ほど降りてきた所だ。

「あつちに、不思議な洞窟があるんだ」

ジュナイトは言った。

首を傾げ、尾を軽く振り、彼女は一言ずつ噛み締めるように言つた。

「一度行つてみたくて……でも、一人ではちょっと……ね」

リボルトは怪訝に思った。

それならば、どうして湖で誘つた時に言わなかつたのだろう。

その問いに、ジュナイトは素直に答えた。

「その洞窟の話をすると、シェイドが不機嫌になるんだよ。何でだから教えてくれないんだけれど、その話はやめろつて。だから、あたし、どうしても気になつてねえ」

「ふうん」とリボルトは呟き、ジュナイトの示した方向を見やつた。そう離れていないように思つ。あの場所まで行つて、帰つてくるのに時間もかかるないだろう。

「分かった。ついて行くよ」
「よかつた」とジュナイトは息を吐く。「怖がつて帰つちゃつたらどうしようかと思つた」

その言葉に、リボルトは些か傷ついた。

「俺がそんなに臆病に見えるのか?」

「だつて、暗黙のルールをやたら守つてゐるんだもん」「ジユナイはそう言つと、駆けだした。

リボルトが行く氣を表した所為だらう。その足取りは軽い。リボルトは少し溜め息を吐き、その後を追つた。

ジユナイを追つてゐる間、リボルトは考えていた。

ここに来てからの日々。そして、ここに来る前の日々。一体今が何時で、この地へ来てどのくらい経つてゐるのだろうか。

思い出せない。

だが、思い出す意味などあるのか。

「ねえ

ジユナイが声をかけた。

リボルトが見やると、ジユナイは前足で前方を示していた。

「すぐ其処なの」

ジユナイの言つてゐる意を悟り、リボルトは走つた。

駆けだしてすぐ、リボルトはそれに気付く。

禿山の一角。其処は絶壁となつていて、縁に包まれた砂色の絶壁。所々苔が生えているのか、色が違う。そして、その足元。つまり、リボルトの前にて、絶壁はひび割れており、隙間ができる。ジユナイやリボルトは勿論、ダステイやシェイドのような大柄な者でも樂々入れるだらう、そんな隙間だった。

「これが洞窟？」

ジユナイは頷き、黙つて歩み出した。リボルトは暫し戸惑つたが、溜め息を吐き、その後を追つ。

中は其処まで暗くなつた。何処からなのか、光が入つていてるらしい。こそそとした話し声が聞こえる辺り、鼠か留守を預かつてゐる蝙蝠でもいるのだろう。もしくは、虫だらうか。流石にリボルトでも、虫の聲を聞く能力は身に付けていなかつた。彼らとリボルト達との間には、少なからずの壁があるので。

リボルトはふと耳を傾けた。

ひたひたと音がする。水の音らしい。音楽を奏でるかの様なその

音。不気味だが、美しくも感じられるその音に、リボルトはやや心を奪われた。

「何だろ？、この匂い」

その時、ジュナイが言った。

リボルトは我に返り、自身の鼻を澄ました。

この場に不釣り合いと思われる匂いがする。森林でするのならともかく、こんな場所でこんな匂いがするものなのだろうか。

リボルトはやや首を傾げ、ジュナイに言った。

「猫のような匂いだな」

「ような、じゃなくて本当に猫じゃないかい？」

ジュナイがちらりと振り返った。

リボルトは考えた。蝙蝠がいる。鼠がいる。それならば、猫がいるのも分かる。だが、それは少なくとも外界での話だ。ここは、リボス。誰も腹を空かせず、誰も獲物を求めない場所なのだ。猫がいるのだとしたら、如何してこのような場所にいるのだろうか。すぐ其処に森があるのに、如何してこのような場所にいるのだろうか。

「誰かな？」

声がした。

リボルトもジュナイも飛び上がりそうになつた。

匂いの持ち主はすぐ傍にいたらしい。

全く気付かなかつた。よく見てみれば、暗闇の中で火の玉の様な光が見えた。如何してこの光に気付かなかつたのだろう。気持ちを落ち着かせると、その者が間違いなく匂いの持ち主である猫だと分かつた。猫と言つても、山猫だつた。大きな山猫だつた。リボルトは眉を顰めた。このような山猫は見たことがない。何と言つ種族なのだろう。

「あ、あんた……」

ジュナイが言葉を取り戻して山猫に声をかけた。

「あんた、大山猫だね？ 大山猫リンクスだね？」

「そう言つ貴女はジュナイだね？」

大山猫リンクスが目を細めて言つた。

ジュナイは息を詰まらせた。再び喋る機能を封じられてしまったらしい。その様子から、彼女とのリンクスが知り合いと言つわけでもなさそうだ、とリボルトは思つた。

リンクスはリボルトへと目をやつた。

「そして、貴方はリボルト」

リボルトも身を竦めた。願つてもいなかつたのに、ジュナイの感覚がリアルに体験できてしまった。

「二人とも心を奪われ、野性を失つた、哀れな狼だね」

リンクスは目を細めたまま、くすりと笑つて言った。

ジュナイがぴくりと耳を動かした。やや不満そうにリンクスを見つめているが、その表情からは、恐れが隠し切れていなかつた。

「どういう意味だ？」

ジュナイが声を震わせて訊ねた。

リボルトは静かにそのリンクスを見つめる。

リンクスが言った。

「私はビアレス。リンクスのビアレス。このリポスの隙間でリポスを見守つている。貴方達、群れを離れてきたね？　もう直夜が明ける。悪い事は言わない。そろそろ帰りなさい」

深く響く女性の声。ビアレスと名乗つたリンクスが耳を倒した。その耳の先には細長い触角の様な毛が生えている。ビアレスが笑むと、その姿が段々と霧に包まれていった。

「待つて」

ジュナイが尾を立てた。慌ててビアレスに駆け寄つていく。だが、ジュナイが一步足を踏み出した途端、世界が大きく揺れた。

この感じ……。

前に体験した感覚だった。

「待つて、ねえ！」

ジュナイの声が聞こえる。やや小柄の彼女の姿が、リボルトの目には歪んで見えた。犬の匂いの混じるジュナイの匂いが、掠れてい

く。

「ジユナイ、こつちへ！」

リボルトが叫んだ時、歪みが治まつた。ジユナイが尾を垂らし、振り返る。

其処は、禿山の麓だつた。

辺りは何事もなかつた様に、しんと静まり返つていた。

三章

大山猫（一）

下弦奥のあの夜。夜明けぎりぎりに帰つてきたリボルトとジュナイは、お咎めなしだつた。というよりも、シェイドもブレイズも何処か無関心といった感じで、小言の一つでも貰うだろうと予想していたリボルトは、少し拍子抜けした。

キイもいなかつた事に気付かなかつたらしい。

ただ、ダステイだけが意味有り気に、にやにや笑いながらリボルトとジュナイを眺めていたので、リボルトはつい好意的でない視線をダステイに返してしまつた。だが、ダステイは憤慨するどころか益々にやにやするばかりで、何の効果もなかつた。

ジュナイはジュナイで、あの夜見たリンクスのビアレスの話に一切触れず、心成しかリボルトを避けているような気がする。そのお陰で、ダステイの好奇の目線が更に隔心の無いものへと近づいていつたが、二日、三日も経てば、もうどうにでもなれ、という気持ちがリボルトを包み込んだ。今に至つては、当たり前の感覚だつた。

だが、リボルトはあの夜から、妙に禿山の麓が気になつた。ジュナイに連れられていつた、あの洞窟が気になつた。リンクスの鋭い眼光が目に焼き付いていた。

何故だろう。

彼女の姿を見た瞬間、彼女の声を聞いた瞬間、リボルトの内部が揺さぶられたのだ。気付かないままに失つていた何かに気付いたようだ。それを求めているような。そんな気がするのだ。そして、それは、掛け替えのないものだつたような気もする。

だが、一体、何だというのだ。

リボルトは知りたかった。

この虚無的な感覚が一体何なのかを。

一体全体、自分は何を無くしてしまったのかを。

「心と野生……」

リボルトは呟いた。

ビアレスが微笑みながら言つた、その言葉。

「心を奪われ、野性を失つた……」

どういう事なのだろう。それらがリボルトにとつて、掛け替えのないものだったのだろうか。ここまで引きずる様な、何かだったのだろうか。

リボルトは知りたかったのだ。

そして新月奥に着いた今宵。

再びリボルトは群れを離れた。

如何しても気になつたから。如何しても確認したかったから。

リボルトは、森林を駆けた。

新月奥は禿山の中腹だった。其処に辿り着いたシェイドは、暗闇の中をゆつたりとブレイズと共に過ごす。ダステイ達も各自の好きなように寛いでいるなかで、リボルトはそつと抜けた。一気に山を駆けおり、滑り込むように木々の包む大地へと降り立つ。明から様な群れ抜けだつたのに、シェイド達はやはり、何も言わなかつたまるで、全く気付いていない事を裝つてゐるかのように。

ふと、走りながら、リボルトは振り返つた。

闇に包まれる森林を搔い潜りながら、リボルトは後方の一点を覗く。

「いるんだろう?」

声をかけた。

「ジュナイ」

暫しの静寂の後、忍び笑いの様な声が漏れた。ジュナイの声で間違いないだろう。匂いもしてきた。

「『名答。案外、鼻良くなつたんじゃない?』

「おい、莫迦にするなよ。幾ら俺だつて、こんな近くの匂い分かるや」

「

リボルトは呆れてジュナイの影を見やり、それで、と溜め息を吐いた。

「それで、ついて来たつてことは、俺に用か?」

「自惚れんな」

ジュナイは飛び跳ねるようにリボルトに追いつき、にやけ顔で小突いてきた。少年の様な無邪氣さに、リボルトも思わず笑みが漏れた。

「まあ、ついて来たつてのは間違いじゃないけどね。あたし一人じや抜けなかつたさ。あんた、言つとくけどね、そう頻繁に群れ抜けしない方がいいぜ? シエイドやダステイは気にするような奴じやないけど、ブレイズやキイが気にするんでね。特に、キイなんかは神経質極まりなくてね、そういう年頃なのか」

「おい、キイは君と歳変わんないだろ?」

「失礼だね」

ジュナイは眉を顰め、リボルトを見上げた。

「あたしやこう見えて、キイより一歳上だよ。キイとあたしの一歳じや相当な差さ」

「俺にとつちや、どつちもお子様だけね」

呟いた瞬間、再び小突かれた。というか、これは、突進だろうか。

小声のつもりだったが、ジュナイは地獄耳らしい。

「あんただつて、あたしと変わんない癖に」

リボルトは薄らと笑みを浮かべ、前方を見やつた。

新月の夜。

辺りはいつもましても暗い。特に、森林と禿山の境は寂れていた。

夜行性の獣一人でもいれば違うのに、そうリボルトは思つた。

「あと少しだつたよな?」

リボルトの問いに、ジュナイは空かざす肯いた。

「ああ、もう少ししたら、開けた場所に出る。その傍だよ」「ジユナイ、君は俺についてきたんだよな？」

「あん？」

リボルトはジユナイを見やつた。

狼犬のジユナイはリボルトよりも一回り小さい。ジャッカルであるキイよりはずっと大きいが、平均的な狼からすると、小さいのだろうか。そんな予想をしたが、リボルトは考えなおした。そう言えば、彼自身、ドール以外の狼をあまり知らない。彼が基準にしているのは、飽く迄、シェイド、ブレイズ、ダステイ。同じ女であるブレイズとジユナイを比べると、ジユナイの方が小さかつたものの、単にブレイズが大柄なのかも知れない。きっとその中に必ずしも、狼犬だから、という理由は含まれないだろう。

ジユナイが不思議そうな目でリボルトを見つめている。

リボルトは少し、独りで焦り、独りで落ち着いて、質問を続けた。

「もしかして、君もビアレスが気になるのかい？」

ジユナイはじっとリボルトを見つめ、首を傾げた。

「それ以外、理由はないだろう？」

呆気なく言われ、リボルトは苦笑した。

「そうだ。確かに。

「そういや」

リボルトは照れ隠しに質問を変えた。

「君、ビアレスに会った時に、リンクスって言つたけど、あれは何？」

「大山猫」

ジユナイは呆れたように一言述べる。そして、ふつと笑んで付け加えた。

「そうだなあ、あたしの故郷では、神様の使いだったような気がする。否、神様って言うよりも、もっと具体的な？ 光を操るような幻獣だったか？」

「猫つて、例え山猫でも、もう少し柔な奴かと思つてたが……」

「だから、大山猫だつてば。うーん、リボルトつて結構無知だね」ざつくりと刺され、リボルトは少なからずショックだつた。

「それとも、あんたの育つた所じや、山猫なんていなかつたの？」

「まさか。いたよ。虎とか」

「馬鹿だね、あんた」とジュナイはけらけらと笑い飛ばしてリボルトを見上げた。なかなか肝に障る事をしてくれる。と思ったが、確かに笑われるようなことがもしれない。

「あんた、虎と住み分けしてて、なんでリンクスぐらいにビビつてんのさ。虎とかと比べたらあんなの家猫じやないか」

「家猫？」

反射的に問い合わせると、ジュナイはわざとらしく溜め息を吐いた。リボルトは考え、ふと思いついた。

そう言えば、珍しい犬の知り合いが出来た事があった。人家の近くで、なかなか会つのは厳しかつたが、不思議と話があつたため、度々会いに行つていたのだ。当初はリボルトに警戒していたその犬だつた。名前はコリーだつただろうか？　が、リボルトが人間の物に手を出すほど困つていないと知ると、次第に気を許していつた。

そんな彼がある日漏らしていたのだ。

最近、家猫どもが鼠捕りではない物に夢中になつて主人が困つてゐる。

リボルトは不思議だつた。

犬はよく人間と共にいるのを見かける。耳に入つてくる犬の声から読み取れる中には、何処に人間の忠義などもあつた上、繫がれている犬も偶に見かけたからだ。

だが、猫は違つた。

彼らは夜な夜な近所に住む同胞と集まつていたのを何度も見たことがあるが、其処から漏れるのは、人間への不満や要望ばかり。決して、彼らは飼われているのではなく、利害一致で一緒に住んでいるだけという間柄だと、その時はつきりと知つた。

つまり猫は、犬とは違つ。

だから、今、ジュナイに聞いた家猫といふ言葉が、しつくりこなかつただけなのだ。

なぜ、一緒に住んでいるだけの彼等を家猫といふのだろう。

家猫。人間の家に住む猫。

同居する猫という意味か？

そんな事を少し考えていた。

「あんた、家猫も知らないのかい？」

「あ、いや、思い出した。ただ猫と家猫の違いを考えてただけだ」リボルトが言うと、ジュナイはぽかんとした顔で、リボルトを見上げてきた。

何かまた、彼女を呆れされる様な事を言つたのだろうか。リボルトが少し戸惑つていると、ジュナイが言った。

「あんた、面白い奴だね」

くすりと笑つて見つめてくるジュナイに、リボルトは呆気に取られた。

ふと、森の道が開けた事に、一人は気付いた。

三章 大山猫（一）

大山猫（二）

禿山の麓の裂け目がある。

若しかしたら無いかもしない。そう思つていたリボルトは、妙に安堵した。

あの夜、ビアレスにあつた夜、不思議な体験をした。ビアレスが微笑んだ瞬間。その姿が霧に包まれた瞬間。世界が揺らぐような奇妙な体験をした。

そして、その体験は以前にもしている。

そうだ。

リボルトは思い出した。

世界が揺らぐ体感。それは、初めてこの土地に来た時、何度も何度も感じた。今でこそ慣れてしまつた為か、あまり感じないのだが、平原から森林へ、森林から禿山へと渡るときなどに、ぐらりと世界が揺らぐような感覚を覚えたものだつた。あの山猫が笑つた時、その薄らいでいた感覚が、どつと押し寄せてくるように、リボルトを襲つたのだ。

あいつは何者なのだろう。

禿山の裂け目を覗き込み、リボルトは考えた。

そもそも、今もこの中にいるのだろうか。

否、それよりも、ビアレスという者は、本当に存在したのだろうか。

「なあ、入つてみようぜ？」

ジュナイが言つた。

リボルトはぎこちなく頷き、身を屈めて裂け目へと潜り込んだ。

あの夜見たのと同じ景色。

あの夜嗅いだのと同じ匂い。

だが、包み込む霧囲気は、あの夜と違つ。如何違つのか。

そう問われて答えられるほど、リボルトは冷静ではなかつた。だが違う事だけは確かだ。それは若しかしたら、ここに踏み込むリボルトとジユナイの心持の所為なのかもしれない。

「誰だい？」

声がした。

誰の声か、そう考える迄もない。

一度会つたきりなのに、リボルトは確信もつてその声に答えた。

「俺です。リボルトです」

「……と、ジユナイ」

空かさずジユナイが付け加えた。

その時、暗闇に目が光つた。段々と細められ、リボルトとジユナイの姿をじつくつと見やる。そして、ふつと緩められた瞬間、その輪郭がはつきりとしてきた。

まるで、魔術でも使うかの様に、大山猫は現れた。

「貴方達、やはりまた来たか。姿を晒したのは良くない事だつたかもしれないね」

霧に様に現れたビアレスが微笑みながら言った。

その染み透るような女の声に、ジユナイが微かに震えるのが分かつた。

まるで、ではない、きっとこの猫は、本当に魔術師なのだ。

そのような神聖さがビアレスにはあつた。ジユナイもリボルトも、怖れ慄いてしまう程の、神聖な霧囲気が彼女を取り巻いていた。

「また来たからには、何か目的があるのだろう?」

ビアレスに問われ、リボルトは身を竦めた。

目的。

そう言えば、目的とは何だつただろう。

理由。

そう言えば、理由とは何だつただろう。

リボルトはジユナイをちらりと見やつた。その様子からして、彼女もリボルトと同じらしい。二人は返答できず、ただ戸惑いながらビアレスを見つめた。

ビアレスは呆れ気味に息を吐くと、静かにその短い尾を揺らした。「つまり、ただ何となく此処へ来たのだね」

そう言って、ビアレスはリボルトとジユナイを見比べた。違う。理由はあった。目的はあった。思い出せない。

リボルトはじっとビアレスを見つめた。

「赤狼ドールに、狼犬……」

ビアレスは呟くように言い、彼女は耳を微かに動かす。

「偉大な獣達は尽くこのリポスの虜だね。全てを忘れ、永遠に、永遠に、心を奪われ、野性を無くし、永遠に、永遠に、繰り返しの毎日を過ごす。終わりのない人生を送るのだよ」

「どういう意味だ？」

リボルトが問うと、ビアレスは不敵に笑った。その笑みはまさに、高台から犬を馬鹿にしたように目を細める猫の笑みだった。だが、不思議と歯向かう気持ちは起きた。

ビアレスは髪をぴんと伸ばすと、静かに譯んじた。

「嗚呼、麗しの園リポス

その者、その地を踏みしめし時 その永遠の理を得るだろう
虚偽に着飾られしその者は 無知のままに平安に眠る
その真意を見抜くことなく

心奪われ生きていく 野生奪われ生きていく
やがて、その者氣付く時來ても 既にもづきかりし頃合い
全ては永遠の園の土の中
全ては永遠の園の闇の中」

しんと静まり返る。

水を伝うような音のみが、響いていた。

歌うような、咳くような声で告げられたその言葉は、リボルトの体に染み込んだ。

それと同時に、何故だか途轍もなく恐ろしい、緊張感の様なものがリボルトの体の芯から湧いてきた。

何故だろう、知らない方が良かつたような歌を聞いてしまった気がする。

ジユナイもまた、同じようだった。

彼女は大きく目を見開き、じつとビアレスを見つめている。

ビアレスは短い尾を軽く振ると、再び目を細め、呆然とするリボルトとビアレスを見つめた。まるで、その反応を楽しんでいるかのように、ビアレスは微笑んでいた。

「貴方達はあるで、冒険者よ」

ふと、ビアレスが語り出した。

「与えられた永遠に縛られる事無く、私を見つけた。私を見つけて、心と野生を思い出し掛けている。だがそれは、あまりよくは無いこと。幸せを考えるのならば、今すぐお帰り。一度と私に会つてはいけない」

ビアレスの目線が鋭くなる。

だが、リボルトは動けなかつた。

野生。心。

それらは何かとても大切なものだつたような気がする。限られているけれども、掛け替えのない命の中で、大切なものだつたような気がする。

全てが偽り。

リボルトの中に、その考えが過つた。

この美しさの全てが、偽りなのかもしない。

だが、それは、考えるだけで恐ろしい事だつた。

偽りの中で永遠に生き続け、偽りの中で永遠に幸福に包まれる。では、実際のリボルトは何処にいるのだろう。実際のリボルトは、何処で如何なつているのだろう。

全てはリポスの闇の中。

「リボルト……」

ジュナイが窺つてきた。その目は躊躇いを隠せずにいる。帰りたい。

だが、帰れない。

「一つ聞いてもいいか？」

リボルトはビアレスに訊ねた。

ビアレスは前足を組み、その上に顎を乗せた。

「何なりと」

細められるその目に吸い込まれそうだった。

リボルトは勇気を振り絞り、ビアレスに問いかけた。

「貴女の言う事で、何か分からぬものがある。だが、それは、とても大切な事の様な気がするし、捨てて置けるようにも思えないんだ」

ビアレスはくすりと笑った。

まるで全てを見通しているかのよう、その目を細める。

「それで、何かしら？」

リボルトはちらりとジュナイに目をやつた。見上げてくる目線からは表情が読み取れないが、恐らくその気持ちはリボルトと同じだろつ。

「野性と心のことだ」

ビアレスは予想通りという気持ちを目に宿し、リボルトを見つめた。暗闇の中で、新月の夜だと言うのに現れている不自然な光が弱まっていく。その目だけが、爛々と輝いている。

「野性と心の何が訊きたいの？」

「すべて」

空かさず答えたのは、ジュナイだった。

リボルトはやや安堵する。やはり、ジュナイもリボルトと同じ感覚の中にいるらしい。

ビアレスはくつくつと笑い、静かに言った。

「知りたければ、己の力で知る努力をすることだ。そうすればきっと、七色の光が貴方達を導くだろうね」

ビアレスの目が静かに閉じられた。

リボルトはふと身を屈めた。

来る。

あの感覚。

予想通りに包みこむ。

世界の揺らぎ。

来る。

リボルトとジュナイは身を寄せ、その揺らぎを耐えた。

そして、全てが過ぎ去ったその時。

リボルトは閉じかけていた目を開いた。

二人はやはり、隙間の外にいた。

リボルトは、はっと空を見上げた。

闇夜は次第に薄らいでいた。

二章 大山猫（三）

大山猫（三）

知りたければ、知る努力をしろ。

ビアレスに再びあつたあの夜から随分と日が過ぎた。リボルトは何處か虚無の拭えない日常を過ごしていた。

シェイドに導かれ、美しいリポスの中を駆け巡る毎日。食えは全く来ない。ただ、たまに渴きがくるのみの毎日。そして、その渴きを癒す湖や川の水、時には雨水。どれも違う味でしたが、不味い事は決してなかつた。

また、冷風、日射、雨天などの悪天候はあれども、それが不快をもたらしはすれども、決して誰か、か弱い命に関わるまでもなかつた。

端麗で完璧な幸せを含む永遠の園リポス。

だが、リボルトは妙に解せなかつた。

ジュナイはどうなのだろう、と度々彼女の様子を窺う。彼女の表情を読み取ることは出来なかつた。毎夜、毎夜、奥を望む禿山の狼王シェイドとその伴侶ブレイズの号令に、彼女はいつも通り、否、いつも以上に素直に従つてゐる。

その姿が、リボルトは不思議だつた。

彼女は彼女で、今の幸せを守りたいのだろうか。疑いたくはないのだろうか。

リボルトは戸惑いつつも、毎夜、毎夜、シェイド達と共に、その日の奥へと駆け廻つた。確かに、幸福はある。解放感はある。だが、何かが違う。懸命に外で生きていた時とは、何かが違うような気がする。

野性と、心。

何だつただろう。

その大きさとは。

ビアレスは語ってくれないだろう。

あの後から、度々リボルトはビアレスの元へとソリソリ向かっている。だが、彼女は何にも答えない。答えようともしない。余りにしつこいと、彼女は光の霧の向こうへと消えてしまう。ビアレスからはもう何も得られないようだ。

リボルトは毎回、尾を垂らして返った。

その度に、ついて来なかつたジユナイがそつと目線をやる。何か聞きたそうな、知りたそうな、目線。だが、リボルトは気付かないふりをした。ジユナイもまた、リボルトには何も問わなかつた。

野性と、心。

本当に、何だつただろう。

リボルトは空を仰いだ。昨日は満月だつた。リボルトがここリボスへと来てから、一ヶ月程経つたと言つ事だらうか。今宵は既望奥へと向かう夜。何時ものよつて、シェイドの告げる場所へと向かう。既望奥は、禿山の麓らしい。

麓……。

リボルトは妙にどきりとした。

まさか、ビアレスの潜むあの裂け目付近ではなかろうか。

そう思つたのだが、シェイドの誘つた場所は、ビアレスの潜む場所とは反対側の麓だつた。その為、リボルトは心から安堵した。

「なあに溜め息吐いてんの、ドールちゃん」

思わず漏れた溜め息に、空かさずダステイが突つかかつて來た。熟れ過ぎた果実でも食したのか、妙に上機嫌だ。取りあえず、前足を頭から退かして欲しい。そう願うリボルトを知つてか知らずか、ダステイはぽんと軽くリボルトの頭を叩き、囁くように絡む。

「最近抜け駆けが多いじゃない。何、女でも見つけたの？」

「ダステイには関係ないことさ」

「余所余所しいねえ、いいじゃない、ちょっとくらい教えてくれた

つて

やはり変な物を喰つたのだろう。それとも、猫族にとつてのマタタビのような物でも嗅いだのだろうか。何処となく、ダステイはリボスの享樂を知り尽くしていそうだ。リボルトは息を吐き、ダステイの前足を退けた。

「ジユナイとの付き合いは止めたの？　え？」

ダステイは相変わらずの上機嫌で、リボルトの肩を叩く。この声が少し離れた位置で寝転んでいるジユナイに聞こえていない事を祈るばかりだ。

聞こえていいだらうけれども。

「そう言う事じゃないよ。放つておいてくれ」

リボルトはうんざりと言つたが、ダステイは離れなかつた。ここでブレイズが一声かけてくれれば、すんなりと解放されるような気がするのだが、どうだらう。リボルトは当てもなく問い合わせみた。

「なになに？　ジユナイと上手くいってないんだ？　お前、女心分かつてなさそudsもんなあ？」

ダステイに言われたくない……様な気がした。少なくとも、そんな事言われる筋合ひはないはずだ。そうリボルトは思ったものの、妙にジユナイが気にかかつた。そう言えば、如何して彼女は一緒にビアレスの所に行かないのだろう。如何して、何も聞こうとしないのだろう。彼女はいつも、リボルトを見つめつづけ、直ぐに田を逸らしてしまう。まるで、関わりたくないようだ。

「ジユナイも男みたいだけよ。きつちり女の心も持つてるんだぜ？」
「氣をつけてやらにや」

「ジユナイはジユナイだろ」

「ほつら分かつてない。会つてひと円の癖に、全て分かつたような顔しやがつて」

ダステイは忍び笑いをしながらリボルトの背中をばしばしと叩く。とても痛い。ゴヨーテとは、こんなにも力の強い生き物なのだろう

か。リボルトは顔を歪めながら、ダステイを見上げた。

「おらおら、白状しろよ、誰と会つてんだ、え？」

ダステイに甘噛みされるのを払いのけ、リボルトはふと彼に訊ねてみようかと考えた。野性と心。ダステイならば何か知っているかもしぬない。彼はリボルトよりも遙か前から此処にいるんだと言つていた。彼ならば、何か感じているかもしれない。このリポスについて。

「ダステイ……」

リボルトは口を開いた。

「野性と心つて知つてる？」

何気なさを装つて訊ねたのだが、ダステイにどつては思いもよらない言葉だったのか、急に眼付きを変えた。失笑し、出していた舌を引っ込め、軽く前足を組んでリボルトを窺う。

「知つてるの？」

リボルトの問いに、ダステイは鼻先をぴくりと動かした。
「何處で聞いた？」

そう問われ、リボルトは戸惑つた。ビアレスの事を言うのが、妙に躊躇われた。ダステイに打ち明けてもいいものか。否か。少なくとも、シェイドに知られてはいけないと思っていた。ジュナイが以前、シェイドがあの隙間の話をする機嫌を悪くすると黙っていた所から、シェイドはビアレスを知つてゐる可能性もあるのだ。そうなれば、彼の伴侶でもあるブレイズにも知られる訳にはいかない。彼女からシェイドに漏れる可能性は、極めて高い。キイはと言うと、この一ヶ月で彼がどれだけ群れの規律を重んじるのががよく分かつた。相当真面目な少年だ。きっと、真面目にシェイドに報告するだろう。

では、ダステイはどうなのだろう。

ダステイはリボルトの迷いを見通しているのか、不敵に微笑んだ。

「そういうや、前にジユナイが頻りに言つていてることがある」
なかなか語りださないリボルトに、ダステイは言った。

「禿山の麓……こここの反対側に不思議な裂け目があつて、その中がすごく気になつてしまふがいいから行つてもいいかつてね。そしたら、いつもは放任主義なシェイドが、目の色を変えてジュナイを叱つたんだ。まるで、軽い男と付き合つた娘を叱る父親みたいにね」
お前のことか、と言いそうになつたが、リボルトは口を噤み、じつとダステイを見つめた。ダステイはにやりと笑みを浮かべ、軽く咳払いをした。

「それが不思議な事に、ジュナイの奴、全く言わなくなつたんだよな。あんなに気にしていたのに。変だよねえ」

にやりと笑むダステイを横目に、リボルトは溜め息を吐き、ちらりとダステイを睨んだ。ダステイはくすくすと笑うと、目を逸らして咳くように言つた。

「野性と心か。前にも同じ事を聞いた奴がいたな

「え？」

リボルトは耳を立てた。そんな者がいたのか。やはり、リボルトのようにビアレスに会つた者なのだろうか。

「それは、狼？」

「否、違うね」

ダステイは首を振り、禿山の麓に広がる森林の奥を見やつた。この間行つた湖があるのとは反対側の森林。リボルトが初めて来た時に通り抜けた其処。

「マーラという獣がいてね

ダステイが言った。

「名前じゃねえぞ。種属名だ。名前は忘れちまつたが、足の細い小母さんだったかな。俺が暇潰しに平原を散歩していたら声をかけられて、聞かれたのさ。『野性と心の行き先はどちらですか?』ってね。正直意味が分からなかつたんだが、そう言えども、森の小鳥たちが歌つているのを思い出してね。ほら、リボルト、お前も聞き覚えがないか?『歌えぬ力ナリヤ春の朝 音の心は何處へやら 探しに行くぞと飛び立つた 空掛かる虹を日指して飛び立つた』なんか、

「こんなの歌つてるだらう? それを思いだし、『さつと虹が導いてくれるでしょう』って適当な事を言つたんだよなあ」

「酷いな」

リボルトは心底そう思つた。森林の向ひの平原。限りなく広いその場所で、適當な事を言われて当てもなく彷徨わされるとは、考えただけでも疲れ切つてしまつ。

「知らないって正直に言えばいいのに」

「いやいや、お前もあの小母さんに問われれば分かるさ。知らないなんて言わせねえような眼つきだったんだから」

「そんな莫迦な」

そうリボルトは言つたが、ふとプレティを思い出した。半月とちよつと前、湖で偶然出会つたプレティ。共に此処へ来た時は、彼女を食おうと追いかけていた時とは打つて変わって、結局彼女の言いなりになつていて。若しもプレティに凄まれたら、リボルトもまた出任せを言つかもしれない。

「ともかく、その時の小母さんが上手く辿り着くとは思わなかつたんだけど、後日旅鳥が俺のところに来てね。そりゃ驚いた。だって、あの小母さん、『言われた通りに進んだら着いた。有難う』って伝言寄越したんだからね。それで物凄く気になつて、旅鳥に何処から來たか訊いてみたらさ、平原の遙か先の熱帯草原から來たんだと」

「熱帯草原?」

「ああ、ここから西へずっと行つたらいつか着く場所だ。其処にはハイエナの王国があつてな女王を中心に中々面白いルールを布いて生きているらしい。そういうや、獅子もいるつて話だな。なかなか興味深い場所だから、いつか行つてみたいんだよな」

「へえ、そう」

リボルトが関心なく合いの手を入れると、ダステイはやや不服そうにリボルトを覗きこんで、言つた。

「他人事じやねえだろ。野性と心はその熱帯草原にあつたという話なんだから」

「うん、やうなんだけど……」

マークとやらは、野性と心を其処で見つけたのだ。どうこう事なのだろう。どんな場所なのだろう。そう疑問に思わない訳ではない。出来ればその熱帯草原とやらへと足を運びたいのだが、この感じ。なんだかダステイがついてくると言い出しあつて怖い。

「なあ、野性と心を知りたいんだつたらさ……」

「ねえ、さつきから何の話してんの？」

ダステイが言いかけた時、キイが訊ねてきた。ダステイは慌てて口籠り、軽く舌を噛んでしまった。キイはそんなダステイを不思議そうに見やり、リボルトをちらりと見やる。

リボルトは苦笑し、キイに答えた。

「しようもないことさ。気にするな」

キイは納得していないようだが、リボルトはそれ以上言わなかつた。

既望の輝く夜。その夜も明けようとしている。段々と消え行く月と、代わりに現れていく太陽の光とが、既望奥の麓を見下ろしていた。

野性と心の行き先。

熱帯草原。

リボルトは顎を地面につつけ、静かに頭の中で繰り返した。

四章 大平原（一）

四章

大平原（一）

リボルト達の群れは、月が昇る中はずっと田を覚まし、昼頃になると眠りに就く完全な夜型生活だった。水以外の物を特に求める必要もなければ、獲物や縄張りを巡っての争いも起きないここリポスでは、彼らでも眠りに就くことが出来る。昼という時間は、完全なる眠りの時間でもあった。

穏やかな風が吹き、その眠りを誘うかの様に、狼達を包み込んでいく昼のリポス。

ショイドとブレイズは、真逆の輝きを放つ体毛をそよがし、寄り添いあって眠っている。

群れの中で父と母にも似た位置に当たる彼らは、リボルト達とは少し離れた場所で、二頭だけで眠るのだった。

リボルトは少しだけ目を開け、その様子を窺つた。

彼らは禿山の岩の上にて日の光を十二分に浴びて眠っている。ちよつとやそつとじや目を覚まさないだろうけれども、やはり狼である彼ら。物音でも立てよつものなら、すぐに目を覚まして行き先を問うだらう。

何と答えるべきか。

用足しに行くとでも言えれば納得するだらうか。否、それでは禿山を降りる意味もあるまい。不審がられるだけだ。ならば、水を飲みに行くではどうだらう。

リボルトは考え、やはり首を振つた。

水は禿山にある。それも、リボルト達が眠るすぐ近くにあるの

だ。シェイドやブレイズの眠る場所からは、其処が良く見えるそうだ。水を飲みに行くと言つて、リボルトが山を下れば、怪しいばかりだ。

それでは、何と言えばいいのだ？

「大丈夫、起きないさ」

不意に囁く声がして、リボルトはびくんとした。

すぐ傍に眠るジュナイが起きていたのだ。彼女は小さく目を開き、リボルトを覗き込むように顔を近づけてきた。

「山を降りる近道を知ってるぜ？」

「何のことだ？」

そう言つたリボルトはだが、動搖を隠せていない事に気付いた。軽く咳払いをして、ジュナイから顔を逸らす。ジュナイは意地悪く目を細め、リボルトの背をそっと叩いた。

「行くんだろ？ ダステイの言つてた場所

「聞いてたのか？」

「キイに聞いたんだよ。一人で何やら面白い話をしていたってね」

「あいつ。やはり聞いてたのか

「んで？ 行くんだろ、其処へ」

ジュナイが窺う様に問うと、リボルトは「まさか」と笑つた。

「そんな遠くまで行くわけないだろ？ 僕はただ、眠れなかつただけさ」

そう言つリボルトの鼻を、ジュナイは「ほつら」と軽く舐めた。リボルトは赤面した。ジュナイはいつも少年の様な眼でリボルトを見つめているのに、何故か一瞬だけ、違う匂いがした。

「キイの言つ通りだ。あんた、喰えない男だねえ」

ジュナイがくすくすと笑うと、同じようにくすくすと笑う声が上がつた。ダステイ。キイ。二頭とも起きていたのだ。

キイがけらけら笑い転げながら、リボルトを見上げた。

「ばればれの嘘だね、リボルト」

押し殺しつつもキイは笑いながら言つた。

「その尻尾、さつきからバタバタ五月蠅いぞ？ 一人でいくつもりだつたんだろ？」

キイが前足でリボルトの尾を指した。リボルトはふと、振り返った。成程、確かにばたばた五月蠅い。この馬鹿正直な尻尾、どうにかして欲しいものだ。

ダステイがリボルトの胸を軽く押して言った。

「お前が野性と心について話を聞いてきた時に、ジュナイに聞いたのを思い出しちゃね。お前ら、あの洞穴の先で、リンクスを見たんだつてな？」

ダステイの言葉にリボルトは愕然とした。

ジュナイは話していたのだ。ダステイに。この様子だと、キイにも。そうか。別にシェイドに伝わらなければ、ダステイやキイに漏れたつて別に良いわけだ。リボルトの何十倍も群れを熟知しているジュナイならば、ダステイやキイがどのような者なのかを見分ける等、容易いのかもしね。それとも軽率に喋ってしまったのかは謎だが。

兎も角、リボルトは大きく溜め息を吐いた。

「喰えないのはお前たちじゃないか……」

「どつちもどつちつてわけだ」とダステイは苦笑し、ちらりとシェイドやブレイズの眠る岩を窺つた。ジュナイやキイもちらりとそちらを見やる。

「ぐつすり寝てるね」

キイが言った。

「これならあの道から抜けても氣付かれないと済むかも」

「だといいけどねえ」

ダステイは大きく尾を揺らし、立ち上がった。ジュナイやキイも立ち上がる。リボルトは呆気に取られた。そんなリボルトを呆れたように見つめ、ジュナイが軽く背中を噛んだ。

「ほら、起きる。何、ぼさつとしてんのぞ」

一瞬怯みつつリボルトは起き上がる。

どういうつもりだろ？

「まさか、一緒に行くとか言つんじゃ……」

「ここの状況見て、そうじやない訳ないだろ？」

ジュナイが薄らと笑みを浮かべた。そして、軽く尾を振つて歩きだした。

「一人じや抜けられもしないくせに」

「そうだそうだ」とキイも笑みながら、ジュナイに続いた。茫然とするリボルトの前をダステイが横切り、横目でリボルトを促した。

「置いてくぞ」

短く言われ、リボルトは慌てて立ち上がり、彼らに続いた。

そう言えばジュナイが、近道を知つてていると言つていたが、どういう事だろう。リボルト達が眠るのは、シェイドやブレイズの眠る岩の真正面。若しも物音などで彼らが目を覚ましたら、真っ先に目に入るだろう。何処を如何行けばいいのだ。そう思つていると、ジユナイは真っ直ぐシェイドやブレイズ達の方向へと歩きだした。

リボルトは怯んだ。

自ら真っ直ぐそちらに行くとは思わなかつた。

だが、ジュナイ達は忍び足でシェイドとブレイズの元へと寄り、彼らの眠る岩の真下へと張り付いた。リボルトはうろたえつつも、取り残される前にダステイと共に、ジュナイ達の元へと歩いた。

リボルトがあまりにびくびくしていた為か、ジュナイはくすりと笑い、真上に寝ているはずのシェイドとブレイズを確認するようにな上を見つめ、無言のまま動きだした。岩を添つ様にぐるりと回り、その裏の坂へと向かう。キイもダステイも素早くそれに続いた。リボルトは、兎に角物音を立てまいと抜き足で歩き、どうにかそれに続いた。

成程、確かに、彼らの真下だつたらすぐには見つからないだろう。彼らの位置からはリボルト達の寝床の先しか見えない。いつも奥にて丸まつている彼らの姿が見えずとも、不審がりはしないだろう。寧ろ、見えない方が不審がらない程だ。

そうリボルトが思つてゐると、小石の転がる音がした。

心臓が飛び跳ねそうな思いで前を見つめると、ジュナイが斜面を滑つていた。続いてキイも、ダステイも。

リボルトはびくびくと上を見やつたが、ショイドとブレイズが気付いているのかすらも分からぬ。仕方無しに彼も、ジュナイ達に続いた。

「うわ……」

リボルトは思わず小さな声を漏らした。ジュナイ達が滑つた斜面は、意外と急で、滑るとスピードもあつた。先の三頭が上手く着地したのが信じられない程、リボルトはやや不格好に着地してしまい、キイに忍び笑いをされた。

様にならないな……。

そう思つていると、ダステイが顎で示した。

リボルトは前を見やつた。

その先には、平原へと続く木々に囲まれた一本道が広がつていた。

縁の木々の間に見える、大小四頭の狼の影。勢いよく駆けて行く彼らは、真っ直ぐ大平原へと駆けて行く。

ブレイズは薄らと目を開け、その影を見つめていた。

ゆつくりと起き上がり、伸びをする。ふさふさとした白い尾を軽く巻き、隣にて薄目を開ける伴侶を見やつた。
くすりと笑いながらブレイズは言つた。

「四人も行っちゃうなんてね、ショイド」

ショイドは暫し、小さくなつていいく四頭の影をやや微笑ましく、やや切なげに、見つめている。黒い尾を伸ばし、黒い耳を倒し、彼は小さく溜め息を吐いた。

ブレイズは彼の耳を軽く噛み、囁いた。

「どうするの？」

「どうするもないだろ」

ショイドはぼそりと言った。

そして、立ち上がり、森林の向こうに広がる大平原を見やつた。
白と黒の狼を包み込むような青い空。その青い空と同じくらい広く見える大平原。

ブレイズとショイドはそれを見つめた。

「寂しくなるわね」

ブレイズが零すように言い、再び寝そべつた。

ショイドは大平原を見つめたまま、ふつと笑んだ。

「全くだ」

木々の間に見えていた狼の影は、もう見えなくなっていた。

四章 大平原（一）

大平原（一）

初めて此処を訪れたその日よりも、平原を照らす太陽は眩しかつた。少しだけ暑いその縁の中を、ただひたすらに西へと駆けていくダステイ達を追つて、リボルトは走り続けた。風の様に走る狼達を乗せて、縁の大地は仄かに揺れている。

リボルトは走りながら、空を見上げた。

きっと虹が導いてくれる。

そのダステイの言葉を信じて進んだ雌のマーラ。彼女は何処をどうやって進んで西の熱帯草原に辿り着いたのだろうか。

虹なんて出でていないしな。

「おおい、リボルト！ 遅れんなよー。」

ジュナイの声が上がった。

リボルトは慌てて前へと向き直つた。ダステイ達との間に少し距離が出来ている。リボルトは走る方に集中する事にした。

「なあに、ぼやつとしてんのさ！ 早く来いよー！」

ジュナイに急かされて、リボルトは走つた。見れば、待つているのはジュナイだけで、ダステイとキイは、振り返りつつも更に先へと進んでいる。

「酷いな。ちょっとぐらい待つてくれたつていいじゃないか」

ジュナイの追い付いたリボルトが溜め息混じりに言つと、ジュナイは呆れたように一瞥をくれた。

「あんなに遅れといって厚かましい事言うんじゃないよ」

さらりとそう告げて、ジュナイは走りだしてしまつた。

リボルトは大きく息を吐き、ジュナイを追つた。

縁の大地は広く、広く、広すぎて、幾ら進んだのかリボルトには

さっぱりだった。しかも、此処へ来てすぐに禿山に定住していたリボルトにとって、この大平原は未知の中の未知なのだ。正直、ここまで迷わずに進めるダステイが怪しくて仕方がない。

きっと抜けがけしてきたんだろうな。

リボルトは苦笑いをしつつ、また空を見上げた。

何かが飛んで行つた気がする。

「おい！ ぼやつとすんなつて言つたろ！」

ジュナイの声が響き、リボルトは慌てて空から目を逸らし、前を見つめた。灰色と黄色の狼が、立ち止まって振り返っている。やつと待つてくれる気になつたらしい。

リボルトはやつと追いついた。

「ここらで休憩するか？」

ダステイの問いにリボルトは首を振つたが、空かさずキイが声を上げた。

「しよう！ 僕、喉渴いてぞ」

「この辺りに水飲み場なんてあるの？」

ジュナイが首を傾げると、ダステイは得意げに笑み、森林の方角へと目を向けた。リボルト達も目を向けたが、此処からは深い色の木々以外は何も見えない。だが、ダステイは囁くように言った。
「ここいらは山猿と猪達の住処でね。丁度彼らの縄張りがぶつかり合つ辺りに、綺麗な小川が流れているんだ」

森林の小川。

若しかしたら、リボルト達が住んでいる場所の水とその付近の湖の水の味が違う様に、其処の水も違う味がするのだろうか。

リボルトは考えながら、ダステイの話をぼんやりと聞いていた。
「其処だつたら美味しい水が飲めるぜ？」

ダステイが軽く笑むのを、ジュナイとキイは不安げに見つめていた。リボルトは二人が何でそんな顔をするのか暫し考え、やつと思いついた。

何時だつたか、山猿と猪達の噂を、小鳥達がしていたのを覚えてい

る。禿山から然程離れていない森林に住む山猿と猪達が、どうもぎくしゃくしているらしい。長年同居した結果、互いに遠慮が欠けていたのが原因らしく、ちょっとした事で小競り合いを起こしては和解を結び直しているという。それが、猿と猪間だけならばいいのだが、関係ない他の獣たちまでも巻き込まれる事がしばしばある。いつので、暫くはその森に行かない方がいい、というのが、小鳥達の話だった。

巻き込まれては堪らない。

だが、キイの言うとおり、リボルトもまた、喉が渴いていた。食欲の起こらないニコリポスでの唯一とも言える辛さは、渴きだ。喉の渴きだけは外界と同じように襲つてくる。

水は欲しい。

「猿や猪に怒られたりしないかな？」

キイが不安げに言うと、ダステイはくつくつと笑い、強く尾を振り払つた。このように激しく尾を動かす事が出来るのも、群れのリーダー格のシェイドが傍にいないからだろう。いくらダステイが結束力にかけるコヨーテ一族だとしても、勝手に尾を振り上げることは、激怒されかねない程の無礼にあたる事は同じ筈だろ。

リボルトがそう思つていると、ダステイは笑いを殺すように、キイに言った。

「猿や猪が怖いのか？ 大丈夫、奴等にやばれねえよ」

あつさりと森林へ向かつて歩き出すダステイに、リボルト達はぎよつとした。まだ心の準備が出来ていない。出来ていなければ、ダステイは待つてくれない。三頭が困つていると、ジュナイが大きく溜め息を吐いた。

「行こう。ダステイ一人で行かせるわけにもいかないだろ」

そう言つてジュナイも歩きだした為、リボルトとキイはぎこちなく頷いてダステイを追いはじめた。

森林の入口はリボルト達のすぐ傍で開いている。

リボルト達が森林に沿つて平原を進んでいたので当たり前なのだが

が、此処まで近いと、まるで森林がリボルト達を飲み込もうとしているようにも見えてしまう。更に、件の山猿や猪達の匂いが風に乗つてくるので、霧囲気は最悪だった。

早いとこ、水を飲んでおさらばしないとね。

リボルトは舌を引つ込んで、森林へと入り込むダステイに続いた。途端に、揺らぐ感覚がしたが、あのビアレスと共に居るときの感覚よりはささやかなもので、然程気にならなかつた。ダステイやキイ、ジュナイが全く気にしている様子を見せない所からすると、此処に居る内に何ともないように思つていくのだろう。

「小川は何処にあるんだい？」

ジュナイがダステイに訊ねた。

「もう見えてくるはずだ。ほら」

ダステイが言つた時、リボルトの目に光が映り込んだ。小川の反射する太陽の光だ。平原からそつ離れていない位置にあつたらしい。リボルトは少し安堵した。

「見つかりたくないければ、あまり騒がずにさっさと飲む事だぜ？」

ダステイは小さく笑んで、小川へと歩いて行つた。キイはだが、喉の渴きを我慢できなかつたのか、走つてダステイを追い越した。ジュナイは呆れ氣味にそれを見つめながらも、静かに進んでいく。リボルトも彼らに続いて水を飲もうとしたのだが、ふと、太陽の光が微妙な変化を遂げたのに気付き、空を見上げた。

「何だ？」

光の色が増えた気がする。

リボルトは空を見渡した。

あれは？

そう言えばさつき平原に居た時も、この様な気配を感じた。何かが飛んで行くような、鳥の影の様な気配。鳥であれば、こうもりリボルトが気にする事もないのだが、鳥ではないらしい。もっと現実味のない、何か……。

リボルトは息を飲んだ。

残光が微かに見えた。七色のそれ。何時だつただろう。見た事がある様な気がする。確か、あれは、禿山のこと。

「リボルト？」

ジュナイの声に、リボルトは我に返つた。残光は消えた。空は変わりなく広がつてゐる。

何なんだろう、あれは。

「リボルト」

ジュナイが再度声をかけてきた。彼女は立ち止まり、リボルトの様子を不思議そうに窺つていた。

「如何したんだい？ 疲れたの？」

「いや……違う」

もう一度見上げる先。光等、影も形もない。

「何でもないんだ」

リボルトは呟くように言い、前へと向き直る。ジュナイは暫しボルトの様子を訝しんでいたが、気を取り直し、小川へと歩いて行つた。リボルトもそれを追つた。

小川では、既にダステイとキイが水を飲み始めていた。さりせらりと光を放ちながら流れる小川からは、涼しげな空気が漂つてくる。湖とはまた違う、爽やかな美しさが其処にはある。リボルトはさつそく水を飲んでみた。

やつぱり。

味が違う。禿山ともその麓の湖とも。予想した通りだつたが、味が違つた。湖の水よりも少しょっぱい味がし、禿山の水に比べれば少し渋い味がする。だが、決して不味くなく、渴いた喉には驚くほど沁み渡つていつた。

「美味しい」

思わず言葉を漏らすと、ダステイがくすりと笑んだ。

「どうい？ 山猿も猪も自慢するという小川らしいしね」

「その通り」

全く違う声が聞こえ、リボルト達は怯んだ。慌てて声のした方向

を見やると、小川の傍の茂みの向こうに、雄猿が一匹佇んでいた。余り思わしくない顔をしている。猿は一步小川へと近づき、リボルト達を見据えた。

「禿山の狼だな？」家出したといつ

リボルト達が戸惑っている中、猿はにこりともせずに小川の水を口に含み、目線だけをリボルト達にやつた。

「誰の許可も無しに此処の水を飲むとは無礼極まりない奴らだ」

水を呑みこんだ猿が無粋に言つた為、リボルト達は皆、不服に眉を顰めた。ジユナイが軽く鼻で息を吐き、猿をぎろりと見やつた。

「へえ。許可制かい？ それはそれは悪かつたねえ。で、どの猿に聞けばよかつたんだい、え？ 聞いたところで、あたしらにや猿の区別なんてつきやしないけどね」

嫌味たっぷりに言つジユナイを見つめ、猿もまた眉を顰めた。

「雌狼め。偉そうに。勝手に入つて来ただけでも罪作りだと言つのに、我々山猿を愚弄する気か？ 禿山を放浪するだけしか能のない狼共めが！」

この言葉にキイが唸り声を上げた。

「何だと、老いぼれ猿め！ 猪とつまらない事で喧嘩し合つしか能がない奴に言われたくないわっ！」

「え、何だつて？ 声が小さくて聞こえないよ」

猿がけらけらと嗤いながら、キイを見やつた。

「にしても、小さい狼だな。そんなに小さいと、狐にでも間違われて狼に喰われちまうんじゃないか？ おつと此処はリボスだつた。所詮、狼共の使いツバシリつて所だらう？」

キイが更に唸つた。

リボルトは暴言を吐き続ける猿と、それに対して怒りを顯わにするジユナイとキイとを見比べ、そつとダステイに囁いた。

「おい、放つておいて帰つた方がいいんじゃないか？」

「ああ、その通りだね」

ダステイはだが、面白そうにそれを見つめていた。止める気が無

いらしい。リボルトは仕方なく、猿に声をかけた。

「悪かった」

キイとジュナイがリボルトを振り返った。リボルトは構わずに、猿へと声を掛け続ける。

「勝手に入つて済まない。直ぐに立ち去るから、勘弁してくれ」

「ちょっと！」「おい、リボルト！」

キイとジュナイが同時に批難の声を上げたが、リボルトは首を振つて彼らの言葉を跳ね退け、ダステイへと目をやつた。ダステイは暫し傍観を装つたが、やがて觀念し、猿へと声をかけた。

「まあ、そう言つ事だ。仲間の暴言は忘れてくれ。それじゃ、俺達はこれで」

怒りの治まらないジュナイとキイを宥めながら、ダステイとリボルトはそそくさと元来た道を戻りはじめた。だがしかし、後ろから猿の咆哮が響き渡り、直後に怒声が浴びせられた。

「待て。そんな都合のいい事が罷り通ると思つてているのか？」

「やばい。逃げろ」

ダステイがさらりと言つた。

あれだけ猿へと威嚇していたジュナイもキイも、猿の咆哮にたじろぎ、慌ててダステイの言葉に従つた。リボルトも勿論、ダステイの言葉通り、平原へと走り出した。

あの猿の咆哮はきっと、仲間を呼ぶ声だ。彼の声を聞きつけて、一体どの位で猿たちは駆けつけるのだろう。此処から平原までは其処まで離れていないが、何処に猿が潜んでいるかが分からぬ。

今もなお、猿の怒声が耳に入る。

「ほうら、お前らが刺激するから」

ダステイは飽く迄も暢気にジュナイやキイをからかつた。ジュナイとキイはそれどころではないといった感じに、ダステイのからかいを無視して走り続けていた。リボルトはそのやり取りを見つめながらも、頻りに後ろを確認した。

猿の声はするが、姿は見えない。

だが、安心は出来ない。相手は猿なのだ。木に登っているかもしないし、いきなり進行方向に飛びおりてくるかもしない。

「お前らビビり過ぎ。相手は猿だぜ？」

ダステイは呆れたように言つたが、リボルトも出来れば乱闘を避けたかった。無駄に争つて傷を作るのも馬鹿げている。そのような不合理的な事は、野性では在り得ない事なのだ。直接生きる事に関わらないのに戦うなど、如何して出来ようか。狼だって、無敵ではない。虎でさえも、獲物一匹取るのに細心の注意を払うと言つのに、リボルト達のような少數の狼が、選りに選つて何かと厄介な猿と、如何して好んで戦えようか。

「俺なら喧嘩上等つてもんだ」

ダステイは笑いながら、大きく吠えた。

「へへっ、追いついて見やがれ猿ども」

「止めてよ、ダステイ！」

キイが本気で起こつたため、ダステイは「へいへい」と言いながら吠えるのを止めた。だが、声は確實に聞こえた筈だ。

「これは捕まつたらただじやおかれないぞ……。

リボルトが溜め息を吐いた時、救いの光が差し込んできた。

平原が見える。

ジュナイが歓喜の声を上げた。

「よしつ。あと少しだつ！　まさか平原まで奴等は来ねえだろ」

飛び込むように、リボルト達は平原へと抜けだし、ある程度森林と距離を置いた。息を切らしながら森林の様子を振り返ると、ジュナイの読み通り、集まつた猿達は森林と平原の狭間に顔を見せつつも、それ以上リボルト達を追う兆しを見せなかつた。皆白い歯を剥きだし、その場に留まつて威嚇していた。

「一度と来んなよ、糞狼共つ！」

ジュナイやキイと言い争つていた雄猿の声が響いた。

リボルト達が茫然と見つめる中で、猿達は背を見せ始める。その背を静かに見つめ、リボルトはどうと疲れを感じた。

同じように我に返つたのか、ジュナイが一歩踏み出し、去っていく猿達の背に吠えた。

「五月蠅えええ！ こんな不味い小川、こっちから願い下げだあああッ！」

猿達が完全に森林の向こうへと消えても、ジュナイの吠え声は平原中に木靈していった。

四章 大平原（三）

大平原（三）

ジュナイは不味いと言つたけれども、実際の小川の水は最高だった。

勿論、ジュナイ自身もそう本心ではそう思つてゐるはずだ。ただ、あの猿に對しての負け惜しみからついやんな事を言つてしまつたという所だろう。キイとジュナイがくどく文句を言つ気持ちも分からぬでもない。偉そうに追い払つたあの猿にムツときたのはリボルトも同じだつた。

しかし、それも一日、二日と續けば、「いい加減に忘れろ」と言いたくなる。

「だつて、あいつらこのリポスで繩張りを独占してゐるんだぜ？あたしら他の獸はどんな好い所もちゃんと共有するのにさ」「もうずつひとつ遠くの話なんだからさ、そろそろ機嫌直せよ」リボルトが呆れ氣味に言つと、キイは顔を顰めた。
「だつて、苛々するんだもん。仕方無いじゃない」
「そうさ。こんな苛々したのは久々だよ」

ジュナイは気持ちを落ち着かせるように溜め息を吐いた。
「まあ、落ち着け。折角潤つた喉がまた渴いちまう」

ダステイが苦笑交じりにジュナイとキイに言い聞かせると、ジュナイもキイも口籠つた。尤もな事だつた。この広大な平原。いつまた水が飲めるかは分からぬ。妙に熱くなつて、後で喉が渴いてはどうしようもない。

「忘れるこつたね。時間の無駄さ」

ダステイはそう言い、歩きながら軽く伸びをした。

「それよりも、空を見ろよ。同じリポスでも、あの禿山とは一味違

うんだなあ」

ダステイに言われるままに、リボルトは空を見上げ、そして、瞬いた。

あれだ。

今度は、リボルト以外の者にも確實に見えている。

七色の鳥の影。舞うように空を流れ、一方向へと次々に消えていく光の群れ。ダステイに言われるまで気付かなかつたその光景に、リボルトは睡然とした。

「玉虫流れじゃないか。へえ、ここって通り道なんだねえ」

ついさっきまであんなに怒っていたジユナイが、穏やかな口調で言った。その口調表情に驚きの色は一切含まれていない。余裕たっぷりの感想だった。

「玉虫流れ？」

リボルトが訊ねると、ダステイがふと空から目線を下ろした。そして、「ああ」と何かを納得すると、座り込んで尾を軽く揺らした。「そうか、禿山では滅多に通らないからねえ。もしかして、見るのも初めて？」

「あれがどうかは分からぬけど、あれに似たのは見かけた事があるよ」

リボルトがそう答えると、ジユナイが目を丸くした。

「へえ。あんた、かなり運のいい奴じゃないか！」

「そうなのか？」

リボルトが首を傾げると、ダステイは頷いた。

「まず、玉虫流れと似た奴なんてない。見たつて言つそれは、玉虫流れその物だらうね。あんな七色の光が流れ星のように消えていつたんだろう？」

「いや」とリボルトは訂正した。「鳥のように見えた」

「見え方は人それぞれさ」

ダステイは頭を搔くと、再び立ち上がった。

「ともかく、ああやつて七色の光が空を滑る事がリポスではたまに

あつてね。それを玉虫流れというんだ。群れて飛んでいたり、たつた独りで飛んでいたり様々だが、ああやつて群れで飛ぶ空を、通り道と言うんだ

「禿山には通り道はないのかい？」

リボルトが訊くと、ダステイは首肯し、再び歩き始めた。

「それにしてもまあ、俺の適当に言つた事がどうやら本当だつたらしいな。あの流れの先に、熱帯草原があるんだ」

静かな驚きを感じながら、リボルトは光を見上げた。空を滑りながら、遙か先に広がる世界へと光は消えていく。ただ真っ直ぐ、広がつているだけの大地。なのに、その先は特に何も見えない。ただ、時折木々が寂しく立つていてるだけ。

「ずっと進むとな」

ダステイが言った。

「巨大な岩柱が見えてくる。まるで、外界の人間が作るへんてこなオブジエみたいなやつらしい。聞いた話なんだけどね。其処には雄チーターの三兄弟が住んでいるとかで、そいつらが見えたら熱帯平原に入ったと思つていいらしい」

「聞いた話だろ？　いまいち不安だな」

キイが率直に言つたが、ジュナイが肩を竦めた。

「まあ、進む以外選択肢はないしね。文句言つてたら喉が渴くよ」さつきまで一緒になつて不満を言つていたジュナイが、急に大人びた事を言い出したのが不安だったのか、キイは渋々頷いた。リボルトはダステイに訊ねた。

「その岩柱はどの位で着くと思う？」

だが、ダステイは首を振り、「ここからざつと見て」と前方を伸びして覗く。果てしない平原に、辟易してしまった。

「全く岩柱が見えないってことは、まだかなり時間がかかるだろうな」

「そんなこたねえよ」

空かさずの否定に、ダステイは荒々しく振り返つた。リボルトは

キイを見た。キイの声に似ていたからだ。だが、キイは激しく首を振つた。リボルトも考え直した。そう言えば、キイの声よりも若干低かつたかもしれない。

「幾ら地を這うお前たちでもね」「声は空から聞こえる。

空？

リボルトは傍に立つ枯れ木を田に止めた。上へと田を逸らし、そして、納得する。其處には、一羽の禿鷹がいた。少し荒れ氣味の羽根を揃えながら、禿鷹はリボルト達を見下ろしている。

「遠くに見えるが意外と近いもんだ。走れば分かる」

禿鷹は普通に言葉を続けた。

ジユナイが首を傾げた。

「そんな事言つてもさ、見えないじゃないか。本当に近いの？」

「見えないのは田の所為さ。本当はすぐ近くにあるのに、お前さん達の目が誤解しているだけだ。現に、もうここ等は熱帯草原の入口にあたる。さつきお前さん達が言つてたチーター兄弟の住処が門なら、此処は門に続く階段つてとこかな？」

「そうなの？」

キイが安心したように禿鷹に言つと、禿鷹は軽く笑んで羽根を広げた。

「まあ、ともかく進んでみるこつた。ようこそ、熱帯草原へ」

禿鷹は一声鳴くと、そのまま飛び去つていった。

ダスティの言つた、石柱の方向へと。

リボルトはその姿を、じつと田に焼き付けた。

次第に搖らいでいくその背を、じつと田に焼き付けた。

玉虫色の光とともに流されていくその鳥を。

五章 鬃犬の王国（一）

五章

鬃犬の王国（一）

禿鷹の言つたことはいまいち信じられなかつたが、本当にしかつた。

走つて三十分もしないうちに、岩柱を曰にしたからだ。リボルト達が驚きつつも、その岩柱へと進んでいくと、同じように付いてくる影が三つ、見え隠れし始めた。

「ほうら、早速のお出ました」

ダステイの言葉に周囲をよく見てみると、三つの影が次第にはつきりしていった。リボルトは納得した。そうか。この影は彼らか。影はリボルト達と同じような速さで付いて来て、ぐるりとリボルト達を囲んだ。ほつそりとした猫の様な姿。

「チーター兄弟ってのは、あんた達かい？」

ジユナイが訊ねると、猫の様な彼らは互いに見合わせて、立ち止まつた。リボルト達も慌てて立ち止まる。猫の様な彼らは、四頭の狼をまじまじと見据え、口を開いた。

「ああ、そうだ。ここいら辺にチーターは俺たちぐらいしかいないから、そう呼ばれている」

リボルトはチーターと言う種族の者を初めて目とした。足が妙に長く、体はほつそりとしていて、顔が妙に小さい。猫の様なのが、爪は出しつぱなし。尾は太くて長かった。多くの山猫に見られるよう、黄色い毛皮に黒い斑点がある。

兄弟はとても似ていて、リボルトにはとても見分けがつかなかつた。

「此処から先に」と、ダステイがチーター兄弟に訊ねた。「ハイエナ族の王国があるって聞いたんだが、間違いないかい？」

すると、チーター兄弟は互いに顔を見合させ、リボルト達四頭の狼をじっと見据えた。

「君達、ヒエナ女王にお会いするのかい？」

その言葉にダステイがほつと胸をなでおろした。此処で間違いない。間違ひなく、熱帯草原に入っている。

「いや、そういうわけじゃない。ただ、少しこの辺りを見せてもらおうと思つて」

ダステイが言つと、チーター兄弟はまた顔を見合せた。

「見せてもらひつて言つと？」

「此処には見せてやれるような場所なんて、そうないけれど」

不思議そうなチーター兄弟に、リボルトが訊ねた。

「此処には、野性と心があるつて聞いたんだが、……」

すると、チーター兄弟は目を丸くした。

「なんだい、君達、狼の癖にはるばる野性と心を求めて來たつて言うのかい？」

「狼の癖について？」

ジユナイが眉を顰めて訊き返すと、チーターの一頭があつさりと頷いた。

「そうだよ。わざわざヒエナ女王に謁見するまでもなく、狼ならすでに知つていろつて思つてたんだけどなあ」

「ヒエナ女王に謁見しないと、野性と心は見つからないのかい？」

ジユナイが訊ねると、チーターは即答した。

「その方が早いだろうね。何人かいる偉大な方の中でも、ヒエナ女王はよく心得ていらっしゃるだろ？よ」

そのチーターは如何にも残念そうに首を振ると、他の二頭もちらりと目配せしてからリボルト達に続けて言つた。

「とにかく行きたい場所は分かつた。確かに此処から先、真っ直ぐ行けばハイエナの国がある。だがねえ、まさか君達全員で行くつて

のかい？」

「そのつもりだが……何か問題でも？」

ダステイが訊ねると、チーター達三頭は困惑したように互いに見合せた。

「うーん、そつちのお嬢さんはいいんだがねえ……」

「あたしが？」

チーター達は頷きかけてそのまま考え込んでしまった。その意味有り気な目線に、ダステイがやや苛立つた様子で再度訊ねた。

「だから、何か問題でも？」

「ああ、行つてみると良くな分かること思つけれどね、何にも知らないのかい？」

「知つてたら訊いてないだろ？」「

ダステイが面倒臭そうに相槌を打つたが、チーターは普通に「そ
うか」と咳き、姿勢を正して、言った。

「所詮他人の話だ。此処より先は、今までとは違う意識で臨むと良い。此処はリポス。だが、リポスでないリポスだ。進めば進むほど、その事が痛いほど分かるだろう。食べ合いはないが、他のリポスとは明らかに違う事がある。それを踏まえたうえで訊くと良いさ」

チーターの一頭はもつたいたいぶつた様子でそう言つと、ひと息を吐いてリボルト達を見据えた。そして、口を開いた。

「そちらのお嬢さん以外、ハイエナの国にはいかない方がいい。お嬢さんもお嬢さんだ。今の群れに愛着が少しでもあるならば、ハイエナの国には近づかない事だ」

「でも」と、キイが言いかけたのを、ダステイが制し、チーター達に質問をした。

「参考にしよう。でも、何故だ？ 理由は？ まさか、ハーレムな
のかい？」

ダステイが半分不真面目に質問したが、飽く迄もチーター達はそ
れぞれ冷静に答えた。

「男が入れない訳じやない。ただ、お勧めしないだけだ」

「まあ、どうしても行くんなら行つてみると良いけれどね」「見ればすぐにわかるさ」

チーター達は言い終えると、走り去つていった。

リボルト達は、暫し、氣不味い沈黙の中で静止していた。今、チーター達が言つたことを反芻しながら、先の事を考える。リボルトも考えた。男が行くのがお勧めできない？ならば、どうすべきだろ？まさか、ジュナ一人で行かせるのだろうか？

リボルトは首を振つた。

それは、自分が此処に来た意味がないように思えた。だいたい、ヒーナ女王ならば、野性と心を心得ていると言つていた。会わないでどうするのだ。

「ねえ、ダステイ」

キイが堪らずに口を開いた所で、皆に掛かっていた氷の呪縛が解かれた。

「行つてみるか」

溜め息混じりにダステイが言つた。

「行ける所まで近づいてみよ？ぜ」

四頭の中に、反論を囁く者はない。

五章 麽犬の王国（一）

鼴犬の王国（一）

ハイエナの国。それが何処から何処までの範囲なのか、リボルト達には分からなかつた。ただ、時折出会う者達により、それがこの近くで間違いない事は分かつた。だが、肝心のハイエナらしき者は会えず、その事が、本当にこの辺りに国があるのかを疑わせるのだ。

ダステイは、辺りをじつと見渡し、大きく息を吐いた。

「こんな事なら、さつきの子猫ちゃん達にもついて来てもらえればよかつたかな？」

「別の子猫ちゃんならいるみたいだけど？」

ジユナイが指示しながら言つた。そちらには、確かに猫族の生き物がいた。茂みに身を纏め、こちらをじつと見ていく。さつきのチーターよりもやや小柄で、耳が異様に大きかつた。

「あれはライオン？」

キイの質問に、ダステイは軽く笑いながら首を振つた。

「いいや、ライオンはもつともつと大きい奴さ。あれは、うーん、なんだろうなあ」

ダステイが濁した時、ジユナイがその猫の様な生き物に訊ねた。

「おおい、其処に居るのは分かつてんだ。出て来てくれないかい？」

「ジユナイ」

リボルトは嗜めるように言つたが、ジユナイは無視してじつと猫の様な生き物の反応を待つた。リボルトはその猫が逃げ出してしまうのではないかと心配したのだが、思ったよりもすんなりとその生き物は茂みから這い出し、リボルト達を改めてまじまじと見つめた。

「ここの辺りに住んでんのかい？」

ジユナイが訊ねると、猫の目がにっこり細められた。少し太めの尾

がゆらりと揺れ、異常に長い耳の先が、ぴくりと動いた。

「そうだよ」

涼しげな少女の声だった。

リボルトは一瞬、ビアレスを思い出した。同じ種族ではないようだが、この少女はビアレスに少し似ている気がした。

「あんた達、旅人でしよう?」

少女の方が訊ねてきた。

「ハイエナ陛下に会いにきた」

「そりなんだけど」と、ジュナイは少女から目を逸らしつつ肯定した。リボルトには、些か、ジュナイがこの少女の事が好きになれないさそうに見えたのだが、ジュナイはそれを悟られないようにしてい るらしかった。

「肝心のハイエナの国が分からぬのよ」

「そりだらうと思つた」

くすくすと笑いながら言つ少女に、今度はあからさまに顔を顰めて見せたジュナイが、質問した。

「どうして?」

「どうしてつて、だつて、あんた達、あたしに話しかけてきたから」リボルト達の怪訝そうな顔を見て、少女は猫のひげをぴんと伸ばし、尾を軽く振つた。

「もうここ、ハイエナの国なの。ハイエナだけじゃなくて、ライオンの国もあるし、シマウマやガゼルやヌーなんかの共同食堂でもあるし、チーターの庭もあるわね。あと、鳥たちの休息所でもあるし、鼠達の外出場所もある。そして、あたし達の住処もあるわ」

「君はなんていう生き物なの?」

キイが不思議そうに訊ねると、少女は嬉しそうに笑んだ。

「あたし、フエリ。他の人はあたしのこと、カラカルの若娘つてい うわ」

「カラカル?」

「聞いた事もない」

ジユナイトイキイが互いに見つめ合つて言った。

「この辺りのカラカルって、あたしとあたしの友達しかいないの。あんた達の来た所にカラカルつていないの？」

フェリがやや期待を込めた目で見つめてきたため、リボルトは少し気まずく思いながら首を振つた。しかしフェリは、「あらそう」と思ったほど残念がらず返事をし、もう一度狼達を見渡した。

「で？ あたしに訊きたいのはそれだけ？ ヒエナ陛下に会えなくて困つてるの？」

「困つてるけど……あなたはヒエナ女王を知つているの？」

ジユナイトが疑わしい目で訊ねると、フェリは平然と頷いた。

「勿論、だつてあたし、ヒエナ陛下のお友達だもの」

これにはキイもジユナイト同じような目でフェリを見つめた。しかし、フェリは全く気にしないといつた様子で、リボルト達を見た。「ヒエナ陛下は滅多に姿を見せないの。いつもは巣穴でのんびりとしているのよ。会えるとしたら夕方から夜にかけてかしら。太陽がお嫌いなの」

リボルトは空を見上げた。

太陽がじりじりと照りつけている。まだやつと暁を過ぎた頃、どうか。

「夕方になれば、女王にあるんだね？」

ジユナイトが確認すると、フェリはうんと頷いた。

「そうだよ。でも、会うのはあんただけの方がいいよ」

フェリがジユナイトを指した。リボルトは訊ねた。

「さつき、チーター兄弟にも言われた。だが、何故だ？ 何故、ジ

ユナイだけはよくて、俺達は駄目なんだ？」

「あんた達、男だもん」

「男は会えないのかい？」

ダステイの問いに、フェリは首を振つた。

「違うよ。でも、会わない方がいいよ」

「だが、野性と心を知りたいんだ」

リボルトが言うと、フェリは急に口を閉じた。尾を軽く振り、首を傾げ、リボルトをじっと見据えた。

「野性と心？　あんた達、本当に知りたいの？」

「ああ」

「どうして？　どうして知りたいの？」

ジュナイがちらりとリボルトを見つめた。リボルトはビアレスの事を想つた。彼女に会つてから、胸に残るこの気持ち。野性と心。強く何かを語りかけてくるその事柄。その気持ちを、上手く言葉に表すことなど出来ない。

「どうしても」

リボルトは溜め息混じりに言った。

フェリは不思議そうにリボルトと、他の狼達を見つめ、長い耳をぴくりと動かした。

「狼つて変わつてんだ」

何か納得するように言い、フェリは座り込んだ。

「そうだね。ヒエナ陛下なら野性も心も知つてるよ。知つてる上で、大人しくされてるの。あたしも知つてるよ。熱帯平原に住む人なら、大抵が知つてる。……知つてると言うより、覚えているの。あんた達だつて、知つてたはず。でも、忘れたの。忘れた方がいいから」

「どういう意味だ？」

「分からない。でも、本当なの」

フェリは一息吐くと、立ち上がり、リボルト達に背を向けた。

「あたし行かなきゃ。ヒエナ陛下に会つなら、また会えると思つよ。またね」

そう言つて、フェリは走り去つていった。

五章 鬼犬の王国（II）

鬼犬の国（II）

一時間後、リボルト達は今までの一連の動物たちの言葉が、信じられないほど正しかった事を知ることとなつた。それは、數十年前、草原を駆けていたリボルト達が、一匹のハイエナの女の出くわしたのが切っ掛けだつた。ここでとばかりにヒエナ女王陛下への謁見を求めたリボルト達を、始終不審そうな目で見ていたそのハイエナは、すぐに仲間達を連れて来てくれた。だが、そこからが予想外の出来事だつた。否、今考えると、今までずっとリボルト達に忠告をくれていた者達の言葉を深く理解すれば、こんな事にはならなかつたのだといボルトは後悔した。

リボルト達は、今、ハイエナの国の獄中に居た。
如何頑張つても抜けられない落とし穴。それが、ハイエナの国の牢獄だ。落とし穴の中は真っ暗で、垂直に長く落ちており、登ることはほぼ不可能と見える。もし登れたとしても、上から被せられた倒木により、出る事も困難となつてゐる。

その中に、リボルト、ダステイ、キイは落とされてしまった。
だが、ジュナイは落とされなかつた。当初、ジュナイだけ別の穴に落とされるのだとthoughtっていたリボルト達だが、そう言つ訳でもないらしい。

「ジュナイだけ何処かに連れていかれたみたい
キイが言った。

リボルト達は途方に暮れた。何をされるか分からぬ中で、ジュナイだけが何処かに連れて行かれた。とても不安な事だつた。ジュナイは何処に連れて行かれたのだろうか。何も見えないため、これ以上は何も分からぬ。

ただ、時間を浪費するだけの時を、リボルト達は過ごした。

「いや、やつぱりジユナイも女だつたねえ」

藪から棒にダステイが一人言ちた。

「こんな狭い部屋に、こう男ばっかじやむさ苦しくて仕方ねえな」「何を言い出すかと思えば」

キイが呆れたように言い、欠伸を一つした。

「それよか、これからどうなっちゃうんだろうね。ジユナイもビツかに連れてかれちゃつたし。このまま出られないのかな？ ノド渴いたよ」

「それを言つなよ

ダステイがうんざりしたように言い、溜め息を一つ吐いた。

思えば、熱帯草原に辿り着いてから、水を飲んでいない。この牢獄に居る以上、水なんて手に入るとは思えない。生き地獄だ。リボスでは飢餓は起こらない。だが、必ず渴きは来るのだ。渴きが満たされない場合の行く末は何なのか、リボルトは知らない。

脱水による死だろうか。

それとも、それさえも乗り越えてしまう生だろうか。

リボルトには分からなかつた。

そんな時だつた。大きな音がして、リボルト達の頭に木の屑が降つてきた。その不快感と驚きに仰いでみると、牢獄の穴を塞ぐ倒木が、ごろりと動いたのだ。唖然としているリボルト達を、見降ろしてくる者がいる。

「ジユナイ？」

キイが訊ねた。だが、ジユナイではなかつた。それは、ハイエナの女の一人だつた。否、一人ではなく、数人いる。皆、眼をぎらぎらと輝かせてリボルト達を見下ろしていた。

「お前達、上がれるか？」

ハイエナの一人が声を低めて言った。

リボルト達は顔を見合わせ、静かに頷いた。穴から這い出すのは、覚悟していたほどは難しくなく、リボルト達はあっさりとハイエナ

達の元へと戻つて来られた。ハイエナ達はリボルト達を穴に落とした時とてんで変わらない目付きで、たつた今穴より這い出してきたリボルト達を見つめていた。

やがて、このままどうすればいいのか内心困惑していたリボルト達の前に、一人のハイエナの女が、群れを割つて現れた。この女が此処を仕切つているらしい。男っぽくも見えるが、狼のリボルト達にとって、そもそもハイエナの性差を見分けるのが難しい。

「ヒエナ陛下の命で、お前達を解放してやろう」

少年の様な声だった。

「謁見も認められたそうだ。光栄に思うがいい」

偉そうにそう言ったハイエナの男っぽい女は、軽く首を動かしてリボルト達を促した。

「ついて來い。お前達の仲間は既にヒエナ陛下のお言葉を聞いている。ここより先は、女の聖地。下手な真似は慎むようだ」

女は低くそう言つと、眉間にしわを寄せた。

「いいな？」

リボルトは何となく、ダステイを見やつた。キイも全く同じ事をしていた。ダステイはといふと、偉そうなその女から目を逸らさずに、何かを考えていた。やがて、軽く目を閉じ、濁すように笑つた。

「ああ、分かったよ」

ダステイの一つ返事で、女は踵を返した。ダステイの笑みに何の返答もせず、女はそのまま数歩進み、くるりとリボルト達を振り返つた。

「何をしている。早くついて來い」

その言葉にリボルト達が付いて行くと、周りを囲んでいたハイエナ達も一緒に歩きだした。ハイエナに囲まれて、リボルトはやや竦んだ。だが、ハイエナ達はリボルト達にまるで無関心といった様子で進んでいた為、徐々にリボルトの不安は薄らいでいった。

やがて、リボルト達は、蟻塚がそのまま巨大化したかのような赤茶色の丘へと通された。出入口がリボルト達から見える範囲でも

七つはある巨大な丘だつた。どうやら、ここがハイエナ達の城らしい。中に入ると、それらの行先はすべて大広間とも呼べる空間へと繋がつており、其処の地面にはさらに沢山の穴が掘られていた。天井は時折開けており、光が差し込んでくる。

「あの場所だ」

見渡しているリボルト達に、女が指差した。其処は、数ある抜け穴の中でも、一番上方にある所だつた。周りには足場があるのだが、其処に辿り着くのはやや難しそうで、子どもや年寄りには辛い場所だろうと思われた。

「あの先にお前達の仲間もいる。彼女に感謝する事だ。お前達の身柄を証明したのだからね」

女が目を細めた。さつきは男とも見えたといつのに、その表情はやけに色っぽかつた。

「さあ、行くがいい。ここより先は、お前達だけだ。道なりに真っ直ぐ進め。余計な穴には入るな。陛下は奥の奥で御待ちだ」

言い終えた女は座り込み、未だに動かずに呆然としているリボルト達を軽く睨んだ。

「行け！」

一喝が響き渡つた。

リボルト達は背中を押されたかのように動き出し、そのヒエナ女王の部屋へと通ずるという抜け穴を田指して、地を蹴つた。足場は思つていたよりも不安定で、リボルトはこの時だけ、ネコ科の身軽さを妬んだが、そう時間もかからずに、どうにか一番でその場所へと着地出来た。ほほ送れずにダステイが辿り着いた。

リボルトは、下方を覗いた。

「キイ、来れるか？」

「莫迦にしないでよ」

キイはむつとした顔をして、田的の場所へと着地しようと、大きく足場を蹴つた。体の小さな彼には、リボルトやダステイよりも距離が長い。大きく蹴つたとは言つても、キイの体は届かなかつた。

「うわあああ

「おつと」

ダステイのナイスキャッチに、リボルトまでが安心した。首根っこを咥えられたキイは、むすつとした表情で引き上げられた。そして、「ありがと」と、ぶつきり棒に言つて、さつと走り出してしまつた。

「可愛くない奴」

ダステイが苦笑しながら言つた。

六章 銀髪の女王（一）

六章

銀髪の女王（一）

「ジユナイ？」

抜け穴に入つてすぐ、リボルトは呟いた。行き先から微かだが、ジユナイの匂いがする。疑つたわけではないが、確かにヒエナ女王の元にいるらしい。

「行くぞ」

「待て」

走り出そうとしたリボルトを、ダステイは声を殺して咎めた。怪訝に振り返るリボルトを宥めるように、ダステイは言った。

「あまりずかずかとは行くな。此処はゆっくりと行くべきだ」

「そうだよ。リボルトのせっかち」

キイの生意気な口調に腹が立つたものの、ダステイの言つ事も尤もだと感じ、リボルトは素直に従つた。

余計な穴には入るなと言わただけあって、一本道の周りには沢山穴が開いており、それだから風が通つて来ていた。リボルトはぐつと好奇心を押さえ込み、道端で穴に囚われかけるキイを引っ張りつつ、ダステイの言いつけ通り堂々と歩んでいく。

一番前を歩くダステイは、慎重に匂いを嗅ぎながら、歩みを進めた。

「ふうん、ここより先はジユナイとハイエナの一人の匂いしかしないようだ。そのハイエナがきっとヒエナ陛下だらうな」「側近とか近くに置かないの？」

キイの質問に、ダステイは苦笑して振り返った。

「そりや、女王陛下に聞いてみな」

そんな会話をしている間に、いよいよ匂いが強まってきた。进る緊張に唾を飲み込みながら、ダステイはぐつと足を踏み込む。通路がいきなり開け、かなり明るくなつた。

リボルトはダステイに続いてその中に入り込むなり、思わず声を上げた。

「ジュナイ」

その声に、ジュナイは振り返った。一瞬だけ目を輝かせたジュナイは、すぐに笑みを消し、尾を垂らす。何があつたのだろう。ジュナイはとても悲しそうだった。

リボルトはすぐに走り寄ろうと思ったが、ダステイの様子に気付き、前方を見上げた。積み重なる岩の上に、誰かが身体を横たえている。ハイエナだ。その姿は、かの大山猫ビアレスの姿にそっくりだった。

「そなた達が遠路遙々旅してきた男達……か」

静かに通るその声は、耳触りのとてもいい柔らかな声だった。

「成程、そなた達のような狼を見るのは久しぶりだ」

「貴女がヒエナ陛下？」

キイが口を開いた。

リボルトの体に、奇妙な緊張が走った。頬むから、変な事言うなよ、と命の危機すら感じつつ、リボルトは黙つたまま岩の上に寝そべる一匹のハイエナを見た。そのハイエナは黒い目をふつと細め、銀に輝く鬚を軽く揺さぶると身を起こしてリボルト達をじっと見据えた。

「そう言つむ前はジャッカルだね。名前はキイだろ？」「

突然名前を当てられて、キイは驚いたように耳を伏せた。

「どうして、名前を……？」

うなづかれるキイを微笑みながら見つめ、ハイエナは告げた。

「さよう。私がこの地を治めるヒエナだ。手荒な歓迎を許せ。この地の撻なのだよ」

「撻？」

リボルトの問いに、ヒエナ女王は笑みを崩さずに答えた。

「ハイエナ族の風習だ。素性の知れぬ輩はたとえこのリポスでも生かしておけないというね。ジュナイに礼を言つがいい。ハイエナは女の言う事しか信用しない」

何故、と問い合わせて、リボルトは口を噤んだ。そういう風習なのだ。それが唯一の答えでしかない。

「さて、ジュナイに聞いたところによれば、お前達はこの私に訊きたい事があるということだが……」

ヒエナ女王の言葉に、ダステイの顔が上がった。

「あるようだな？」

ダステイの顔を見て、ヒエナ女王の目が細められた。ダステイは深く頷き、平伏して告げた。

「我々はあるものを探し求めてこの地までやつてきた。そのものは見えぬもの。この熱帯平原の者なら誰でも知っていると聞く」

ヒエナ女王の耳がやや伏せられた。

「ほう、そのあるものとは？」

ダステイはじつとヒエナ女王を見上げ、そして深くくぐもつた声で、告げた。

「心、そして野性です」

「心と野生」

ヒエナ女王は呟くと、ちらりとジュナイを見やつた。そして、もう一度ダステイを見据えると、大きく溜め息を吐いた。

「では、どうしても聞きたいのだな？」

リボルトは、そのヒエナ女王の重たい声、そして、ジュナイの様子が少し気になつた。思えば、フエリは何と言つていただろう。野性と心を知りたいと言つたリボルト達に対して、何と言つていただろう。

全てを思い返しながらも、リボルトはヒエナ女王をまつすぐと見た。

きっとダステイも同じだ。キイも同じだ。

彼ら考えて も自分達は覚えて いない事柄。それを知つて いる
覚えて いる者達が何と 言おうと、リボルトは一心に思つて いた。
自分達は、それらのことを 知らなければ ならない。否、思い出さ
なければならない。

六章 銀髪の女王（一）

銀髪の女王（一）

ヒエナ女王は作り物のような眼をすっと細めると、リボルト達を一人一人見つめ、やがて、落ち着いた声で語りだした。

「お前達の知つていい通り、ここはリポスと呼ばれる場所だ。ここは、永遠の楽園と呼ばれ、選ばれた者だけが足を踏み入れられる地として知られている。そこに行つたものは、もう生まれた世界に変えらうなどとは思わず、永遠の命を燃やしながら、幸せに暮らすと言われている」

その通りだとリボルトは思った。此処はリポス。生まれ故郷でも聞いた事のある、伝説の地。そこでは追う者も、追われる者も、永遠の幸せを掴むことができると言われている。

「そう、此処は楽園だ。楽園のリポスだ。そして、リポスがリポスたらしめる為に、ここではいくつかの則がある」

ヒエナ女王の声が深くなつた。

「此処に足を踏み入れた者は、まず、食事という概念を忘れる。地の草を食んでいた者も、他者を捕らえて食らつていた者も、等しくその欲を忘れてしまう。思考のメカニズムが変化してしまつのだ。樂園に食べ合ひがあれば、そこは樂園とは呼べない。よつて、一つ目の則は、食べ合わない事」

食べ合わない事。

リボルトの胸に深く压し掛かる言葉だつた。

食べ合わない事。食べ合つとは何だつただろう。どうして食べ合つていたのだろうか。そうだ。リボスの外では、食べ合つていたのだ。この地へ共にきたプレティのような者を食べて、生き長らえていた。

そもそも、此処へ来たきっかけは何だつただろうか。

覚えていた筈なのに、忘れかけた感覚がある。

「リポスの中において、何人も他の命を食べる事が出来ない。しないのではなく、出来ない。しようと思う事が出来ない。これが、リポスに仕組まれた則の一つだ」

ヒエナ女王は、何故か、じつとリボルトを見つめた。

「一つ目は、弑さぬこと。食べ合いはもちろん、ただ、弑さぬ」とだ。争わないことはできないだろう。だが、無闇にいわいじわを招くような者は、リポスに留まる資格を失いかねない。因つて、一つ目の則は、無闇に争わぬことともいわれる」

争わぬこと。

これは少しひつかかつた。

争わぬこと。

此処へ来る途中、やや争わなかつただろうか。そうでなくとも、ハイエナ達のリボルト達への仕打ちは、争いに入らないのだろうか。少なくともこれは、先の食べ合いの時のように、思考を弄られてはいないうちにリボルトは思った。自と他のぶつかりは、リポスですらも制御できないということだろうか。

ヒエナ女王はリボルトの心情を見越したように、付け加えた。
「一つ目の則は、一つ目と異なり、破る事も出来る。もとより血の氣の多い者はリポスに踏み込みにくい。だが、時折踏み込んでしまうこともある。今、動向が気になる者は数名いる。南の雀蜂、東の猿、西の鷄たちだ。中でも、猿達の動きは過激過ぎる。リポス自身にとつぐに目を付けられていてもおかしくない」

ヒエナ女王の不穏な表情に、ダステイが首を傾げた。

「もしも破つたらどうなるのですか？ リポス自身つて？」

ダステイの問いに、ヒエナ女王の目が微かに光った。その眼光を見たリボルト達は、即座に緊張した。一気にその場の雰囲気が重くなる。聞いていいものなのか、不安にさせる雰囲気。リボルトの心臓が、ばくばくと大きな音をたてた。

ヒエナ女王は田を細め、静かな声で答えた。

「私達は監視されているのだよ、ゴヨーテ」

明らかに緊張の含まれる、張りつめた声だった。

「破ること自体は罪じゃない。もしさうでなければ、我々ハイエナは暮らしていけないだろう。我々は我々の信条により、余所の男の侵入を許してはならない。よって、男を捕らえ、追いだす必要がある。このこと自体を咎められることはない。我々は命を奪つたりはないからね。だが、物事には限度というものがあるのだよ。かの猿達の様に、余所者を捕らえ、傷めつけ、哀れな魂を抜き取るまで弄り続ければ、さすがのリポスも黙つてはいらないだろ?」

ヒーナ女王の言葉に、リボルトは、はつとした。

東の猿達の過激な行動。東の猿。自分達がはるばる旅してきた方角だ。威嚇的な猿。確かにいた。追いだされ、不満を以て負け犬の遠吠えをかました、あの相手だ。あの猿達が、まさか、そんなことを。

リボルトは俄かには信じられなかつたが、ダステイは全く意外そ
うな表情を見せずに、訊ねた。

「もしも猿達が改心しなければどうなるのです？　もし、今まで通り、そんな事を繰り返せば、彼らはどうなるのですか？」

ヒエナ女王はじつとダステイの目を見た。

作り物にそのまま魂を宿したような瞳が、じつとダスティの姿を映し出していた。

その独特な間は、ヒエナ女王がこの世の生き物ではなく、違う世界に住む何者かなのではないかと疑うような、神秘的な雰囲気を作り出していた。

彼女ならば、全て答えられる筈だ。

そんな期待までが、生まれてくる。

ヒエナ女王は表情を変えず、不敵に目だけを細めた。

「我々は絶えず監視されている。監視され、管理されているのだよ。

そして、リポス自身が作り出す箱庭で、理想というものの中で繋がれ、閉じ込められ、不要になるまで見つめられ続けるのだよ

「見つめる？ 誰が？」

キイが訊ねた。

「誰かが監視をしているんですか？ 誰かが僕らを監視して、操作しているって言うんですか？」

「そう」

キイは、違う、と言われるのを予想していたのだろう。

ヒエナ女王の即答に、訊ねたキイ自身が、戸惑っていた。

「我々は操られている。大きな力に操られて、リポスの思うままに動かされている。もしも、我々がリポスの意に反することばかりを続け、リポスが我々をいらないといえば……その時は、簡単に、存在を抹消される」

「抹消……」

誰もが絶句した。

抹消。つまり、殺されるというのだろうか。否、違う。存在を抹消される。どうこう事だらうか。殺されるとは言わなかつた。抹消。抹消されるとはどういう事なのだろうか。

皆の問いに答えるかのように、ヒエナ女王は言った。

「存在を消されれば、誰もがその者を忘れる。リポスの者ばかりではなく、故郷でもいなかつた事にされてしまう。なかつたことにされてしまうのだ。皆、抹消された者との関わりの記憶は消され、何もかも、いなかつたという事が前提の世界へと変わってしまう。そうやつて、リポスは自分の描く理想へと、軌道を修正する。全ては、リポスの思い通りというわけだ」

ヒエナ女王は一気に言い終えると、すっと表情を固めた。

ちらりと周囲を田で追い、そして、再びリボルト達を注意深く見つめた。

リボルトは、ヒエナ女王の言った事を理解することで忙しかった。情報が大きすぎて、すぐには飲み込めない。

だが、聞かなければよかつた真実を聞いたような気分になつたのは確かだつた。

六章 銀髪の女王（III）

銀髪の女王（III）

ヒエナ女王は口を開いたまま、何も言わなかつた。

しんと静まり返った空氣の中で、リボルトは今しがたヒエナ女王が言った話を少しずつ読み解くのに専念していた。彼女の話は、あまりに飛躍しすぎていて、リボルトにとっては理解に苦しむものだつたのだ。少しづつ見えてきてはいるが、まだ、納得までにはいかない。なぜ、そうであるのか。なぜ、こうなるのか。リボルトは口を開きながら考へ続けた。

「それが本当ならば……」

ダステイが考へを反芻するよつとひそかくつと語つた。

「……どうして貴女は知つてゐる？ 操られてこることに眞付いた貴女を、リポスが放つておいているのはなぜ？」

ヒエナ女王の目が細められた。彼女の笑みは深く、物静かで、どこか寂しげな心が含まれているようだつた。

「撃を破らないからだ。ココーネ」

ヒエナ女王は小さく答えた。

「少なくとも、リポスの許容範囲内ではね。それにこゝ熱帯草原は特別な場所なのさ」

彼女はそう言つとふと表情を変え、立ち上がつた。

「特別な場所？」

キイが呟いた。

ヒエナ女王はちらりとキイを見つめたが、ため息をつき、尾を払つた。

「野性と心……それは、お前たちが無意識のつむじにリポスに抑制されてゐる性質そのもののことだ。熱帯草原の者ならば覚えてこる……

…覚えているからこそ、たまに辛くなる。ここでは忘れたほうが多い事柄だ。だが、私の話を聞いた以上、お前たちも次第に思い出していいだろう。少しづつではあるけれどね……」

ヒエナ女王はもう一度溜め息をつくと、大声で言った。

「私の話せることはそれだけだ。もう帰るがいい」

そう言つたきり、眠り込んでしまった。

リボルト達はどうしたらいいのか分からず、暫くその場に留まっていた。

しかし、しばらくすると、ヒエナ女王の声を聞きつけた使いの者が現れ、リボルト達を外まで案内してくれた。外は妙に明るかった。リボルト達の周りには、ハイエナ達の城以外に目立つものは軒々と生える木々ぐらいなもので、誰が何処にいるなど、ひと目で分かるぐらい、すつきりとしていた。今は、ガゼルの群れと、カラカルが一匹、面白そうにこちらを見ているだけだった。

「フェリ？」

リボルトは思わず呟いた。

こちらを見ているカラカルは、確かにあのカラカルの少女、フェリだつた。猫の目を狐目のように細くして、長い耳をぴくりと動かしている。リボルト達全員が気付いたのを確認すると、フェリはやつと口を開いた。

「あんた達、やつぱし聞いたのね」

尾をぱたぱたさせて、生欠伸をしながら、いきさかだらしない様子だつた。

「ああ、聞いたとも」

ダステイが一步踏み出して、フェリに返事した。

「だが、いまいち納得できんし、実感もわかない」

ダステイの意見に同感だつた。ハイエナの城を抜けた今になつても、リボルトの中には、ヒエナ女王の言つた話が現実だという実感がわからなかつた。だから、話は怖いと思つたのだが、実際に自分がそのような目に遭つているとは思えなかつた。

「そりゃ そうだと。あんた達は今聞いたばっかしだからね
フェリはくすりと笑いながら言つた。

「でもね、すぐに分かるさ。だんだんと分かつてくる。全部分かつた日に、あんた達がどうするのか、ちょっと気になるかもね」
フェリはそれだけ言つて、また駆けていつてしまつた。

リボルト達はしばしフェリの後姿を見つめていたが、やがて、ダステイの無言の促しで、歩き始めた。何処へ向かうつもりかは分からなかつたが、ダステイの行く方向へ、皆、従つた。方角的には、住処へと戻るわけではないらしい。思つままに進んでいる可能性もあるが、それでも皆、何も言わなかつた。

熱帯平原を歩く複数の狼というのも、それなりに目立つた。

熱帯平原に住む生き物のいくつかは、とぼとぼと連れだつて歩くリボルト達について來たし、意味ありげな視線を投げかける者もいた。だが、皆、野性と心を知つてゐるためか、リボルト達に話しかけようとする者はいなかつた。リボルト達についてくるのも、大人ばかりで、子どもの住人がリボルト達に興味を持つて近づこうとすると、別の人気がそれを必ず咎めていた。それを見ると、問答無用で害とされているような気がして、とても不快に思つたのだが、ダステイが歩き続けるので、リボルトはそのわだかまりを自分の中で有耶無耶にして、ダステイの後を追つた。

ダステイはといふと、ついてくる皆のことなど氣にも留めずに、ただひたすらに自分達の來た方角とは反対方向へと向かい続けていた。

「ねえ、何処行くんだよ」

破りにくい空氣をどうにか打ち破つたのは、ジュナイだつた。

「あたしら、ずっとついて来てんだよ？」

ジュナイの苛立つた声に、ダステイはゆっくりと振り返つた。だが、その表情はつづりで、あまり、リボルト達のことを意識していないという様子だつた。ダステイは、ジュナイをさらに苛立たせそうな生返事をすると、大きくため息を吐いた。

「どうしたんだよ、急に」

ジユナイが怒り出す前に、キイが口を開いた。

「なんか変だよ？」

キイの問いに、ダステイはもう一度生返事をした後、やつと我に返つて、さつきよりはまともに応じた。

「いやね、頭と胸の奥から、何かが呼びかけてくるんだよ……」

そう言つて、彼は空を見上げた。

「思い出せそうで、思い出せない、あの感じだ……」

彼の頭の中に住みついた者。

リボルトはそのことについて考えた。

彼がヒエナ女王の話によつて惑わされ始めたのは明らかだつた。だが、分からなかつた。ヒエナ女王の話の何処に、惑わされているのだろうか。彼女の話は確かに恐ろしかつたけれども、根拠も何もないものだつたし、何よりも実感がわかない。そのことをフェリに言つていたのは、ほかでもないダステイではなかつたか。

いまのダステイの様子は、とても不気味だった。

リボルト達は顔を見合させつつも、これ以上、ダステイには何も言えなくなつた。今の彼には、何を話しかけても無意味なのではないかと感じ始めたのだ。なので、その日、そのままずるずると夜が来てしまつても、誰も何も発言できぬままに、各自のタイミングで、就寝した。就寝するまでもリボルトは、ヒエナ女王の話と、ダステイの不気味な変化について、考えた。考えたものの、何も答えらしきものは浮かばなかつた。

その日、いつの間にか眠りに就いていたリボルトは、夢を見た。

沢山の《赤狼》たちと野山を駆け回る夢だつた。なぜ、駆けているのは、最初、リボルトには思い出せなかつた。やがて、風景が変わっていき、木々が消え、茂みも消え、一頭の若い牡鹿が現れた時、それを思い出した。牡鹿はこちらを見つめると、すぐに駆けていった。リボルト達もすぐに追つた。軽々と大地を飛び跳ねるその牡鹿を、見逃さないように、見逃さないように、追いかけていった。

突然、リボルトは目を覚ましてしまった。

揺さ振られた気がしたのだ。そして、それは、当たっていた。キイがリボルトの背にこつんと頭をぶつけたのだ。

「どうしたんだ？」

寝ぼけ頭でそう応えてみて、リボルトは改めて、言葉を放つたのが少しばかり久し振りだと気付いた。それは、キイも同じらしく、彼はほんの少し掠れ声でリボルトに言った。

「ダスティがいない……ジユナイもどつかに行つたみたいなんだ……」

リボルトの眠気が吹っ飛んだ。

慌てて立ちあがつて辺りを見渡してみると、辺りには満天の星空に包まれる平原のほか、リボルトとキイしかおらず、他の住人でさえも見当たらなかつた。キイと取り残されたことを知つて、いきなり不安になつたものの、リボルトは冷静さをどうにか保つて、キイに言つた。

「ふむ、ちょっと出でているだけかもしれない。朝まで待つてみようか」

キイは不安げにリボルトを見たが、小さく頷くと、リボルトのすぐ傍に背をくつつけるようにして、再び眠りに就いた。リボルトも、こつそりキイの存在に感謝しながら、眠りに就いた。

しかし、朝になつても、昼になつても、ダスティとジユナイは戻つてこなかつた。

七章 田覚めし者（一）

七章

田覚めし者（一）

リボルトとキイは、熱帯草原の中をひたすら歩いた。

不可思議かつ不気味なことに、ダステイの匂いも、ジュナイの匂いも、もう残つていなかつた。リボルトとキイは、ダステイの向かつていた方角を見つめた。住んでいる場所とは反対側のその方角は、西。つまり、進んでいけば、乱暴な鰐達が暮らしているヒエナ女王に言われた地に着く。あの田のダステイは、何故、そちらへ進んだのだろうか。そして、ジュナイは何処へ消えたのだろうか。

「本当に、本当に、追いかけなくて、いいの？」

キイが訊ねてきて、リボルトはちらりと振り返つた。

「そっちに行つたというのが確実ではない。確実ではない限り、こことはいつたん引いたほうがいいと思うんだ。ジュナイもダステイも、戻つてくるかもしれない」

リボルトは低く、力ない声で言つた。

そう、二匹はシェイドとブレイズの待つ、住処へと戻るところだつた。確かに手掛かりがない以上、そして、ジュナイとダステイの匂いが残つていない以上、危険な道へ進むわけにはいかなかつた。

「だから、戻る。猿に気をつけながら……」

「わかった」

キイは素直に従つた。

リボルトが前を走り、キイがちょこちょことそれを追う。二匹は、そんな日々を一日続けていた。サバンナの出口はもう少し。もう少しで、チーター三兄弟の住処が見えるだろうとリボルトは気合を入れ

れて走った。

「待つて。リボルト、早い！」

そんな声がする度に、リボルトは、しまった、と走りを止めた。キイの小さな体と、リボルトの体では、一歩ごとの幅が違う。リボルトが振り返ると、キイの息はすっかりあがっていた。

「すまない、キイ。少し休もう」

「そうしてくれるとありがたいよ……」

キイはぜえぜえ言いながら、尾をぱたぱたと振った。

一匹は暫く言葉を交わさなかつた。リボルトはぼんやりと一角を見つめていた。揺らめく陽炎の向こうに、微かにだが、遺跡が見えたような気がした。そういえば、とリボルトは考えた。なぜ、あの自然に出来たとは思えない。リポスだから、外界とは根本的に違うのかもしれないが、ダステイが前に言ったように、あの岩柱は、外にとつて、玉虫流れと同じくらい不思議なことだった。なぜなら、自然界から見放された人間たちが、このリポスへと踏み込むことは、非常に稀なことだと野の獣たちの間では言われていたからだ。その稀な人間たちが集まつて、あんな岩柱を築いたのだとしたら、彼らは何処にいるのだろうか。

リボルトはその疑問をキイに問おうと振り返つた。その時、キイの後ろに、見知った顔が見えた。

「フエリ

キイが驚いて振り返る。

フエリは、草むらからこつそりこちらを覗いていた。見つかると分かると、元から笑つてゐるようなその顔に、さらに笑みを浮かべた。その顔は、山猫であるのに、まるで、狐のような顔だった。

「コヨーテと狼犬のお嬢さんが覺醒したんだね。あのおっさんはあんたらよりも長く生きているし、女はもともと纖細なもんさ

フエリはそう言って、ひょっこりと顔を上げた。

「ジャッカルはまだ若いし、ドールは来たばかり。これじゃいつになるんだかつて感じ」

「どういうこと? 何がいつになるっていうの?」

キイの質問に、フェリは細めた目を広げた。

「ねえ、あんた達、東に帰るんでしょう?」

応えずに質問を返したフェリだったが、キイは戸惑いつつも頷いた。

「そうだよ。そこに仲間が残っているんだ。もしかしたら、いなくなつたダステイやジユナイも戻つてくるかもしないし……」「戻つてくるかは分からないうが、探す当てもないからね」

リボルトも口を挟んだ。

フェリはじつと一匹の顔を見比べ、すっと立ち上がった。

「あたしも連れてってよ」

一匹にとっては、意表を突く言葉だった。

「なぜだい?」

リボルトは訊ねた。

フェリは尾を軽く振り、草むらから這い出して、一匹に近づいていった。

「東の地にあたしも行かなきやならないの。どうしてもね」
リボルトとキイは顔を見合せた。別に東に帰る動きに、カラカラの娘が一匹ついてくるぐらい、どうつてことなかつた。況してや、知らない者ではなく、何度も喋つたことのあるフェリだったら、不気味でもない。

「連れていく理由なんてないが……断る理由なんてないな」

リボルトは正直に言つた。キイもそれに同意する。

フェリはちょっと安心したようだつた。

「じゃあ、勝手について行く。いなくなつた二人は、焦らずともすぐに戻つてくれるさ」

フェリの言葉には確証なんてなかつたが、それでも一匹が妙に信じてしまうような力があつた。他でもない熱帯草原に住む者の言葉

だからかもしぬないが、リボルトには、別の理由もあるよつた気がしていた。

何にせよ、東へと帰る連れ合いが、一匹から二匹になつたのは、少し心強かつた。フェリは一回も熱帯草原から出たことがないと言つたが、それでも勘が強いのか、ちょっと逸れても迷うこともなく、その後は普通に合流することができた。

フェリによれば、リポスに長くいると、独特的の土地勘といつものがつくるらしい。

「長くいるつてどのくらいいるの？」

キイに訊ねられたフェリは、あのいつもの小さな笑みを浮かべ、答えた。

「あたし、ここに来てから、満月をずっと数えてた。でも、一千回ぐらいを越してからは、もう何度も満月なんか分からなくなっちゃつた」

満月を一千回。あるいは、それ以上。

リボルトにとつても、キイにとつても、果てしない数だった。

「その間に、誰かが死んだりするの？」

キイが訊ねた。

だが、フェリは首を振つた。

「分からない。誰も死んでいないのか、忘れてしまつたのか……」

ヒエナ女王が、存在が消される、と言つていたのをリボルトは思ひ出していた。存在が消されると云ふことは、このリポスにおいて、死と同等なかもしぬない。だが、不思議だつた。一体何が、リポスに反するものの存在を消し、此処リポスを管理しているのだろうか。リボルトには想像もつかなかつた。

神のみぞ知る。或いは、神そのものか。

リボルトは綺麗に欠けた月を見つめた。下弦奥。もはや懐かしいあの山ではそう言っていた。シェイドとブレイズは、下弦奥の場所で寛いでいるのだろうか。そもそも、前の下弦奥では、何をしていただろう。

リボルトはすぐには思い出せなかつた。

下弦奥の場所。前、寛いだその場所は、確か、鹿達が寛ぐ湖だつた。そこには一緒にこの地に迷い込んだ雌鹿のプレティがいた。そこまで思い出していくと、段々と記憶が繋がつて出てきた。寛いでいると、ジユナイが話しかけてきた。そう、抜け駆けの強力だつた。そして何処に行つたのだつただろうか。

「フェリ……」

リボルトはぽつりと口を開いた。

「東の地には、どうして行きたいんだい？」

フェリはじつとリボルトの顔を見つめたが、すぐにふいつと顔をそらした。

「どうしても、行かなきゃいけないの」

そう言つと、寝てしまつた。

七章 田覚めし者（一）

田覚めし者（一）

「あの微かに見える山が狼のねぐらかい？」

フェリが静かに言った。

リボルトとキイはそう言われてから、やつと自分達の辺りが近づいてきたことに気付いた。

「ああ、そうだが、なんで分かつたんだ？」

リボルトの呴きを無視する形で、フェリは先を急いだ。ここは、猿の縄張り付近。猿と猪が争っているという森林のすぐそばだった。キイがちらりと森林を見つめた。猿と猪の争いの下になつていると

いうもの。新鮮な小川。きれいな水。水。

「ああ、喉が渴いた……」

キイが心底うんざりした様子で呴いた。

そういうえば、暫く水を飲んでいい。唯一の食事だといふのに。リボルトは無言でフェリを見やつた。フェリはキイの呴きに振り返り、澄ました目を猿達の森林へと向けた。

「ふうん、あの森が噂の森だつたかな？ 猿どもが猪と水を巡つて争つているとかいう

「ああ、そうだ。俺達も来る時、水を失敬して猿達を怒らせてしまつた」

リボルトの返答に、フェリはくすりと笑い、森林へと完全に向き直つた。

「ひとつ行つてみるかい？ どうせリボスでは争い事は禁忌だ。襲われて最終的に罰を受けるのは向こうのみでしかないからね。まあ、この先にも水を補給できる場所があるなんならいいんだけども……」
リボルトとキイは思い出してみた。熱帯平原へと向かう道すがら。

このけちな猿達の森に来るまでに、どのくらい水を飲める時間があつたか。そして一分にも満たない間に、一匹とも、同じ結論に至つた。

「ここで飲もう。水が湧いているのは随分と先だ」

言葉にするのは、リボルトのほうが早かつた。

「そうかい。じゃあ、極力猿に会わないように気をつけながら行こうじゃないか」

フェリは言い終わるなり早速飛び出し、真っ先に森林へと駆けて行つた。リボルトとキイは、一拍遅れで、その長い尻尾に続いていつた。

間もなく森林に踏み込むと、リボルトは急に寒気を感じた。平原と森林とで温度差が激しいようだ。この間はそんなことはなかつたのだが、これは何なのだろうか。寒気を感じているのは、リボルトだけではなく、キイも、フェリも、同様にぶるつと身震いした。

「おかしいね。リポスのこの方角でこんなに寒気がするなんて」

フェリが囁いた。

森林は妙に静かだつた。たまに聞こえるのは、鳥達の声。リボルト達には分からぬ、鳥達だけの言葉。それは、他所の鳥達の可愛らしい歌声ではなく、他種族を怯えさせる、陰鬱でおどろしい旋律の歌だつた。

言語が分からないのが、特に、不気味だつた。

リボルト達は極力喋らずに、小川へと進んだ。

猿達に会わないようにといつた警戒心から、といつよりは、この不気味な雰囲気による圧力から、といつたほうが正しかつた。

だから、進んでいつて、がさがさと音がする度に、三四は心臓が跳ね上がるほど驚いた。

そうして小川にたどり着いたのが、三十分後。しかし、この三十分は、普段の十倍以上は長く感じた。

「ついた……」

キイが掠れ声で囁いた時、リボルトは声というものを久々に聞い

たような感覚に浸つた。得体の知れない緊張と静けさで、時間感覚がおかしくなつてゐるかのようだつた。早く水を飲んでここを去りたい。リボルトは真つ先にそう思つた。

何も言わずに小川に近づき、水を飲む。冷たくきつい刺激が走る。しかし、喉は渴いていたらしく、リボルトの舌はどんどんと水を身体に流し込んでいく。キイも、フェリも、いつの間にカリボルトと同じく水を飲んでいた。

耳に聞こえるのは、遠くからの鳥の声。そして、虫の声。後は雜音。三匹が水を飲む音、小川の流れる音、誰かが草を踏む音、誰かが気の枝を折つた音。

リボルトの耳が、すばやく反応した。

誰かがこっちに来る。

猿だろうか。

いや、それよりも、大きな何かの音。

「おやおや、狼とは珍しいものだ」

老婆の声だつた。

キイもフヨリも素早くそちらを見やる。小川の向こう側からこちらを見る者がいる。それは、猪だつた。白い毛の混じつた、老猪。濁つた色の目を細めて、こちらをじっと觀察している。

「山猫と狼の組み合わせかえ……面白いもんだ」

リボルト達はじつと老猪を見つめた。岩のような胴体に、どつしりとした足、頑丈そうな蹄。濁つた色の目で、こちらを見据えている。

「踏み込んでもない。すぐに去るよ」

リボルトはそう言つて、踵を返そうとした。

その途端、老猪はくつくつと笑んでみせた。

「きっと、おまいさんは前に猿と会つたんだね？ そうじやなきや、リポスに来たばかりなのかえ？ 心配せずともこの水は私のものじゃない。沢山飲んでいくがいいさ」

リボルトもキイも呆気にとられた。何しろ、前に来た時の猿の対

応があれだ。その猿とぶつかり合ひてゐる猪といふと、同じように戦ふべきだ。他所者を嫌い、小川を守るのだとthoughtっていた。

「婆さんはあたし達を追い出したりしないんだね」

フヨリが思つたままに訊ねた。

「他の猪たちも同じなのかい？」

「大体は同じだろうねえ、山猫のお嬢さん」

老猪は答え、鼻を少しだけ動かした。

「猿と争つていたのは、猿が傲慢だつたからねえ。だが、今はもう平和さ。猿どもがいなくなつたからね」

老猪はそう言つと、水を飲み始めた。

猿がいなくなつた。その言葉を遅れて理解し始めたリボルト達は、はつと老猪に訊ねた。

「猿がいなくなつた？」

リボルトが真つ先に口を開いた。

「いつたい何処に？」

老猪は水を飲むことを中断し、ちらりとリボルト達を見上げた。

「消えた」

ぼつりとそう告げ、また飲み始める。

消えた。

ただそれだけの情報。ただそれだけの情報だつたが、リボルトは色々と思案を巡らせた。リポスの禁忌を犯した猿達。それが、消えた。何が、どう起こつて、そうなつたのだろうか。消えるとはどういう事なのだろう。

存在が、消える？

リボルトは考えた。

リポスの禁忌を犯して争いを起こした猿達。彼らはどうなつたのだろうか。罰として、残らず消えてしまつたのだろうか。どうやつて、消えてしまったのだろうか。彼らの身に、何が起こつたのだろうか。

その間に老猪は水を飲み終え、ゆっくりと顔を上げた。

「消えたってどういう事だ？」

リボルトの問いに、老猪は表情を変えずに答えた。

「そのままの意味さ」

「猿達に何が起こったの？」

キイが問い直した。

「酷い夜だった」

老猪は語り始めた。

老猪はちらりとキイの目を見つめると、小さく溜め息を吐いた。
月の無い夜、猿達の悲鳴が響き渡つて、森林の生き物たちは騒然とした。

あの猿達が、何者かに襲われている。

猪だらうかと殆どの生き物は思つたものの、そうではないと知つてゐる猪たちの恐れと驚愕は計り知れなかつた。すぐに幾らかの生き物たちは悲鳴の下へと駆けつけ、猿達の身に何が起こつてゐるかを確認した。

そして、見に行つた者の殆どが、そのことを後悔した。

「私も見に行つた一人さ」

老猪は静かに語る。

その濁つた目では殆ど何も見えなかつたものの、鼻と耳が目を力バーし、何が起こつてゐるのかを彼女に把握させた。

全ての者が、見つけることしか出来なかつたという。

それは、綺麗な姿だつたという。老猪の目にも、淡い光として見えたらしい。空の虹をそのまま地上に降ろしたかのような、綺麗な存在だつたらしい。輪郭はあやふやで、捉えどころのない姿。生き物というよりも、自然現象という雰囲気。死んでもいないし、生きてもいない、美しくて不気味な存在。

目玉の無い空洞の目が、笑つていたらしい。

全ての者が、見つけることしか出来なかつた。その得体の知れない者が、泣き叫ぶ猿達の身体を少しづつ擦つて、消していくという光景。

「止められなかつた

老猪は低く唸る。

「止めてはいけないと誰かが私達に言つたんだ」

「止めてはいけない？」

リボルトに、老猪は頷いた。

「確かに聞こえた。あの日から、もうあの荒っぽい猿はいない。だから、平和になった。それだけさ」

そっぽそりと言い、老猪は踵を返す。一步彼女が踏み出そうとした時、急にフェリがはつと顔を上げ、老猪に声をかけた。

「ねえ、待つて」

老猪はそのまま制止する。

「猿はみんな消えてしまつたのかい？」

フェリの質問が妙に響き渡つた。まるで、その言葉に深い意味が込められているかのようだつた。そう、リボルトには感じられた。

老猪は振り向きもせず、小さく尾を振つた。

「一人……以外はね

「その一人つて、誰？　何処にいるの？」

「ガリ」

老猪は短く言った。

「何処にいるかは、自分達で探すがいいわ」

そうして、ゆっくりと去つていつた。

七章 田覚めし者（II）

田覚めし者（II）

ガリに会つてもいいかと言いだしたのは、フェリだつた。リボルトにもキイにも彼女に反対する理由もなかつたので、二人ともついていく事にした。ガリという名前だけが手掛けりだなんて乏しそうる、そうキイは文句を言つたけれども、森を探索するのは少し楽しそうだつた。

だが、リボルトには憤慨する余裕すらなかつた。生き残つた猿、ガリはこの森の何処か。そして、それを阻む者はいない。

確かに森は広大だが、歩きまわればそのうち会えるだらうと呑気に構えられる。

否、リボルトが不穏に思つてゐるのはその事ではなく、先程の老猪の話だつた。

猿が消えた？

そしてその光景を田の辺たりにした者たちが聞いたといつ、「止めてはいけない」という声。

消えた、消えた……。

否、消された？

リポスの掟を破つてはいけないという話を思い出した。破る事の可能な掟を破つてはいけないと、いう話だ。でないと、抹消される。存在を。

そうだ、と、リボルトは眉間にしわを寄せた。

ヒエナ女王が言つていたのだ。野性と心についてを知つていると、いうあの女王が、リポスに逆らつ者は抹消されると言つていたのだ。つまり、そういう事。

猿達は掟を破つた。

リポスの精神を穢した。

破つてはいけない、争い事をしてはいけないという掟を穢した。食べ合わないの次にあげられるというその掟を、穢してしまったのだ。

だから、抹消された。ただ一人を残して。

「フェリ……」

リボルトは黙つて歩くフェリを見つめた。

急に呼ばれて、フェリは若干驚いたようだったが、すぐに目を細め、いつものあの山猫の微笑を浮かべた。

リボルトは無表情にそれを見つめ、訊ねた。

「フェリ、君は熱帯草原の者なら、野性と心は知っていると言つていたね」

その問いかけに、フェリは何かを察したのだろうか、笑みは崩さなかつたものの、リボルトには、その奥に秘める雰囲気が少しだけ変わった気がした。

彼女は小さな口を小さく開き、呟く。

「言つたよ」

「なら聞きたいのだけど、今……」

リボルトは言いかけたのだが、口を噤んでしまった。

こちらを見つめるフェリの瞳に気付いたからだ。

猫の瞳。森の薄暗さで丸く爛々と輝くそれには、見る者に沈黙を押しつける魔力のようなものが秘められていた。少なくとも、リボルトはそう思った。

相手が自分の魔力に囚われたと分かったのか、フェリはやや己の緊張を解し、狐の笑みにも似た表情を作つた。

そして、また、小さな口から、小さな声。

「あたしは何も言わない、何も言えない、何も言いたくない」

拒絶だった。絶対的な拒否。笑みとは裏腹に、その言葉は強かつた。

何も把握出来ずにいるキイまでもがうるたえるほど、強く否定の意志。

なぜ、どうして、という質問を一切受け付けないような力だった。思つてもみなかつた局面に、リボルトもキイも戸惑つてはいるが、フェリがそれまでの妖艶な笑みを解し、くすりと違う笑みを見せた。「行こう、ガリに会えば少しさ分かるよ」

ガリに会えば少しさ分かる。

フェリがそう言つ事が、妙に引っかかった。

どうして彼女が言う事が出来ないのだろうか。

どうして彼女は言う事を拒否するのだろうか。

それが分からないと、ガリに会わなくてはいけないと言われても、しつくりこない。

でも、フェリの拒否は絶対的だった。

話す気になれないから話したくないという程度ではない。少し意地悪をしたいから話さないという程度ではない。それは、もっと強い意志によるもの。しない、したくないという単純な理由ではなく、出来ないという複雑な理由。

リボルトには細かいところはよくは分からなかつた。

だが、その中にすかすかと踏み込んでいいものではないという事はよく分かつた。

リボルトにとって、狼は、特に、リボルトのいた《赤狼》^{ドール}の中では、集団で生きつゝも、野里の犬よりも個人を捨てない生き方を大事にしているものだつた。その集団と個人の狭間で、リボルトは《赤狼》^{ドール}並みに悩み、《赤狼》^{ドール}並みにもがいていたものだつた。でも、それはリボルトだけではなく、他の《赤狼》^{ドール}も同じ。

集団で過ごしつつも、自分自身との擦れを感じた時に、皆、悩み、もがき、そして解決するという事を繰り返しながら時を過ごしてはしたものだつた。

集団だけを考えるのが狼ではないのだ。

誰もが、他人には不可侵の自分の領域を持っている。

そして、その中には、どんなに親しく、どんなに心を許した相手であっても、容易く侵入して欲しくないと感じてしまい、いつの間にか反撃して、自分の世界を守ろうとする。

その自分の領域を守る傾向はきっと、猫達のほうが数倍強いだろうともリボルトは感じていた。

だが、個人主義の猫でも、集団の中で悩む事はあるという話を、フェリから聞いたばかりだつた。

猫は他人とのことで悩む事なんてないだろうとリボルトは勝手に思っていたけれど、そうでもないらしい。フェリも悩み、でも、自分の世界も大事にしながら、うまく渡り歩くこつを学んでいくらしい。

勿論、その方法は猫科専用なので、狼であるリボルトが真似しちゃ上手くはいかないだろう。

でも、リボルトはそれを聞いて、フェリをもつと理解出来るようになつた気がした。

つまり、狼も、猫も、違いはあれども、個々はそう変わらないという事かも知れない。

だから、深入りしない。

フェリが拒否するのなら深入りはしない。
それが礼儀だと思った。

「しかし、ガリはこの広い森の何処かなんでしょう？ 一体何処にいるんだろうねえ？ もうくたくただよ」

ため息交じりにキイが言った。

キイの身体は小さいのだから、リボルトやフェリよりも先に疲れてしまうだろう。

フェリだって、狼と猫という身体の差はある。素早さ命の猫は、狼ほどの持久力がない。だから、あまり無闇に歩いても、体力を浪費するだけだつた。

「ううん、誰かに会えればなあ」

リボルトが溜め息を吐いて、空を見上げた時、ふとこちらを見下

ろしている目に気付いた。丸い目。闇の中で光り輝く目。『さうじと反転し、リボルト達を見つめ、細められる。

その余りの不気味さに、リボルトはぎょっと身を竦ませた。

そのリボルトの様子から、フエリもキイもそれに気付く。キイはリボルトと同じくびくと身を竦ませ、いつもは垂らしている尾をびんと上げた。

だが、フエリは、それを見つめ、「ああ」と目を細め、その目を見上げて微笑みかけた。

「忍び鼻じゃないか。噂にや聞いていたが、本当に全く気付かなかつたわ」

「忍び鼻？」

リボルトの問いに、フエリは答えず、くすくすと笑むばかりだつた。

その忍び鼻とやらも、フエリが笑むのに合わせて、ほー、ほー、と笑っていた。笑っていると辛うじて分かったのは、その表情からだ。

「狼と猫という珍しい面子の旅人つちゅうのはおまえ達か」
年の全く分からぬ男の声。忍び鼻は目を細め、ほうほうと笑う。
「見たところ、猫と狼と言った方がよさそうだな。目覚めた順はその通りだらう?」

忍び鼻に合わせて、フエリもくすくすと笑つた。

「その通り。さすがは忍び鼻さんだよ。噂は本当のようだねえ。こいつらはまだ離。^{ひよい}やつとりポスの与えた殻を破つて孵つたばかりの離さ」

「ほほう、つまりは目覚めたばかりの狼、というわけか。……覚醒した狼の瞳の奥には炎が宿る。だが、なるほど、そいつらのはまだ、生まれたばかりのぬるい炎だ。しかし、ぬるい炎はいつか、大火になり、すべてを焼き尽くすだらう」

「大昔の話ね。やれやれ、年寄りの話を聞かされると、耳に胼胝が出来るよ」

フェリが呆れたように言つた。

リボルトには彼らの話がさっぱり分からなかつたが、どうやらこの忍び梟とやらは、フェリよりもずっと長く生きているらしい事は分かつた。

「……それより」

フェリが話を切り出した。

「この森の裏主と言われておる貴方にお聞きしたいのだけれど

「ほほう、なんだね？」

忍び梟は首をぐるりと回す。

リボルトは大して驚かなかつたが、キイはかなり驚いたらしく、びくりと身震いした。フェリは相変わらずくすくすと笑い、その姿を見上げる。リボルトから見ると、フェリと忍び梟は何年振りかに再会した友人同士のようだつた。そうではないというの、フェリの言葉の端々から、リボルトにも分かつたのだけれども、妙にそれが気になつた。

フェリは一頻り笑うと、忍び梟をまっすぐ見つめ、訊ねた。

「ガリといふ猿を探しているんだが、知らないかね？」

「……ガリ、それはまたなんでだね？」

ガリという言葉を耳にし、忍び梟は表情を変えた。

澄ました笑いに隠されているのは、敵意ではなかつたけれど、警戒か、嘲笑かのどちらかが含まれていた。どちらにせよ、リボルト達がガリといふ猿に出会う事に、この忍び梟はあまりよい感情を抱いていないのがリボルトとキイには分かつた。

それは勿論、フェリも同じだつた。

「それは、あたしの都合さ。知つてゐるんだろ？？」

「ううむ、知つてゐるには知つてゐるんだが……」

「じゃあ、何処にいるか教えてくれないかい？」

フェリは笑つていたけれど、その言葉には脅迫的なものがあつた。忍び梟はフェリの様子を見て、ただ、ほつほつと鳴いた。その声からは、どんな気持ちが含まれていたのか、リボルトには分からなか

つた。

「猫は猫でも山猫だねえ」

忍び鼻は呟くと、羽根を広げ、木から下りてきた。

「さてと、ガリを見たのはちょっと前だったかな。会いたいのなら急ごうか」

そう言って、飛び立つ。

リボルト達が唖然としている中、フエリがその後を追つた。そして、一、二、三歩進んで、リボルト達がついて来ないのに気付き、はつと振り返る。

「何してんだい、置いてかれるよ」

その時になつて、やつと、リボルトは状況を把握した。

八章

森の賢者（一）

同じ森の中のはずなのに、際立つて雰囲気の違う場所というのは何処にでも存在する。リボルトが生まれ育った場所だつてそうだつたし、リポスに来てから過ごしているあの山だつて、その付近の森だつてそうだつた。同じような風土で育つた木々、同じよい空気が流れ込んでいるはずなのに、その場所だけ、何故か異質。

忍び梟に誘われてたどり着いた場所も、まさにそんな場所だつた。精霊の住処とでもいうのだろうか。プレティ達、鹿が集まつていた湖に漂つっていた雰囲気にも少し似ている。とにかく、この場所が特別な場所である事はすぐに分かつた。この場所に、ガリは潜んでいるという。まさに、只者でない者が潜んでいそうな場所であつた。だが、もはや最後の一頭となつてしまつた猿。

そこは、たつた一頭で暮らすには、とても寂しい場所だつた。

忍び梟が突如、ほう、ほう、と鳴きだした。何と言つてゐるかは分からぬ。独自の呼びかけのようだつた。それに答えるように、ほう、ほう、と声がする。返答は梟ではない。梟の声をまねた何かの声。それが何か、考へるまでもなかつた。

木々が揺れて、鬱蒼と茂る葉の間からどさりと落ちてきたのは、とても大きな猿だつた。キイやフエリよりは勿論、リボルトすらも小さく見える程の山猿。否、ただの山猿ではないだろ。尾は長く、黄色い長毛がぶらりと揺れている。顔は細長く、少し灰色がかつてゐる。何らかの変種だと分かつたけれど、リボルトにはこれが何と言つ種族なのか分からなかつた。ガリの目はぎらりと光る茶色。そ

の鋭い眼光に、キイがびくと震えたのを、リボルトは見逃さなかつた。

「ほほう、狼とな。つい最近話には聞いたけれど、久々に見たな」
そう言って、目をフェリに向ける。

「サバンナのお嬢さんもな。よつこそ、ジャングルへ」
フェリはくすりと笑み、小さく頭を下げる。リボルトとキイはどうしたらいいか全く分からなかつたが、慌ててフェリに倣つて頭を下げた。

「それで、忍び暑めが俺の場所を軽々と案内したからには、それなりのものをかぎ取つての事だらうて。お嬢さんはええが、若狼一人の話を聞かせてくれるかな？」

急に話題を振られ、リボルトもキイも口籠つた。話すといわれても、何を話せというのだろうか。あまりにも見当がつかないので、リボルトは恐る恐る口を開いた。

「話……というと？」

すると、ガリは少しも動じずに、静かに答えた。

「今までの事だよ。思つままに話をしておくれ

当然のように言われ、リボルトは困り果てた。

「ここまで自由な質問となると、何を話し、何を話さないか考えるだけでも大変だ。

一方、キイはといふと、今の説明だけで何かを納得したらしい。キイだけは自分と同じく困るだらうと思つていたので、リボルトはいよいよ心細くなつた。

「わかつた。今までの事、話すよ」

キイの言葉に、リボルトは無言でその場を譲つた。

「俺はこのリポスに来る前、とんでもない落ちこぼれだつたんだ」
リボルトには唐突すぎる告白だつたが、フェリやガリの反応を見ていると、この場に見当違いの話題ではないらしい。ますますリボルトには分からなかつた。それにしても、キイが此処に来る前の話を詳しく聞くなんて、初めてのことかもしれなかつたことに、リボ

ルトは今になつて気付いた。

「他のジャッカルの家族は木の実を採つたり、落ちている肉とかを拾つて食べたりでよかつたんだけど、俺の家族は代々続く名ハンターの家柄で、新鮮な肉ばかり食べたがるような奴らでね。母さんには父さん、そして、乳兄弟の他に、年の違う兄や姉に囮まれて、何度も何度も狩りの練習をさせられたよ。他の乳兄弟は優秀だったけど、俺だけは別だつた。落ちこぼれさ。俺なんか残していたつて特にはならない。だから、せめてケンカだけは強くなろうと思って、ケンカばっかりしてた。けれどね……」

キイはそこでとても寂しそうな顔をした。群れ社会に生きる者なら何となく分かる気持ち。リボルトには、キイの気持ちが、少しだけ理解できそうだった。

「暮らしには、ケンカよりも食べ物の確保が大切なんだ。そう俺に教えてくれたのは、姉だつたよ。兄と姉は一人ずついて、二人とも父さんと母さんのヘルパーをしていたんだ。毎年新しい大人のうちの一人が残つて、父さんと母さんのヘルパーをするつていう決まりだつたんだ。そして、いつか父さんと母さんが死んだ時は、ヘルパー達は分かれ、それぞれが群れを継いでいくつていう事になつてた。俺達のいい遊び相手にもなつたし、いざという時は守つてくれたし、すごく頼もしい存在だつたんだ。出来れば俺も二人みたいないヘルパーになりたいつて思つていたんだけど、姉が教えてくれたのは、その夢を閉ざす事だつた。ケンカが強いつていうのは、他の家族だつたら此処に残れる利点だつただろうけれど、此処は優秀なハンターの暮らす場所。だから、俺にはヘルパーにはなれないだろ……つてさ。それに、ケンカしなくても、もう新しいヘルパー候補は決まっていて、それは俺じやなかつた」

そこまで言つて、キイは目を細めた。

「つまりさ。俺はいくら頑張つてもヘルパーにはなれないつてわけ。勿論、俺だけじゃない。俺以外にも、ヘルパーになれずにしていく奴なんてわんさかいた。けれど、皆、俺とは違つて、輝いているん

だ。木の実や肉を拾い集めるだけじゃなくて、俺よりもずっと上手く狩りが出来るんだから、一人立ちへの不安なんて殆どないようにも見えた」

そこで、リボルトははつとなつた。リポスに来てから思い出しもしなかつた、リポスに来る以前 つまり、生まれ育つた群れの想い出が蘇ってきたからだ。

母親やお守り役に護られて遊び回った子ども時代。そのうち大人として扱われるようになり、若い男手として、狩りを手伝わされるようになつた青年時代。足に自信のない者たちのやつている木の実や肉を拾い集める係りを横目に、ひたすら獲物を追いかけていたあの時代。誰もが群れに残るのに必死だつた。使えなければ、いつかは追い出されてしまう。彼が生まれ育つたのは、そういう群れだつた。やがて対抗していた付近の二つの群れと和解し、複合した結果、急に人数が多くなつてから、さらにその色は強くなつた。

「俺は不安だつた。ものすごく不安だつた。生きていけるのか、木の実や肉を拾い集めるだけで生きていけるのか、ものすごく不安だつた。そして、残つてヘルパーをやっていける兄弟が憎かつた。すぐ憎かつたんだ」

リボルトも思い出す。

憎かつた。残つて子どもを産み育てる場を設けられている姉や妹が憎かつた。群れの者たちに特別期待されて優遇されている兄が憎かつた。ケンカの強さと子どもの扱いのうまさをかわれてお守り役として残る事が決まつた兄弟がとても憎かつた。そして、悲しかつた。自分なんて、食糧確保として頼れなくなつたら群れを追い出されれるのではないかと思うと、とても悲しかつた。とても辛かつた。

「皆を憎みながら、もうあと少しで一人立ちの日になるというある夜、子ども時代の幸せだった頃を思い出すと堪らなくなつて、一人で家を飛び出して走り回つたんだ。ありつたけの声で鳴いて、鳴いて、鳴きまくつて、走れるだけ走つた。そう、走る事しか頭になくなるぐらい、走り続けたんだ」

フヨリもガリも真剣にキイの話を聞いていた。その目には、何もかも見通した上で理解しているような、異様な寛大さがある。その表情は、彼らがリボルト達とは比べ物にならないほど生きているのだという事を思い知らせるものだつた。もちろん、ガリがリボスに来てどのくらい経つのかなんて知らない。けれど、あの表情を見れば分かる。その年数が、どれだけ古いものなのか。

キイは長いこと、思考にふけつっていた。

きっと、此処に来る前の想い出を、噛み締めているのだろう。ずいぶんと長い間考え、想い出を味わうと、やがて、小さく溜め息を吐き、下を向いた。見間違いではないだろう、白い滴がぽたりと地面に落ちた。その涙を見て、リボルトの中の想い出が、変化した。そうだ。どうして、この時まで、リボスに来る前の事を思い出していくなかつたのだろうか。どうして、この時まで、あの時の気持ちを忘れてしまっていたのだろう。辛く、憎く、苦しく、大変で、それでも美しく、希望に溢れた生まれ故郷の事。生きる事だけを考え、生きる事だけに固執し、生きる事だけをただひたすら目指した、ある種の美。力強く、一生懸命、生きていくという美しさ。

どうして忘れていたのだろう。

たしかに、嫌だった。出来る事なら、樂をして生きていたかった。
「不安のない世界にあこがれていた」

キイは言う。

「闘わず、獲らないで済む世界に憧れていた。そしたら、道に迷つて、いつの間にか、リボスの平原にたどり着いていたんだ」

それは、突然来た幸福への機会。獲物を狩るという概念は完全に捨て去られ、飲む事だけを考えて、後はゆっくりと過ごすことの出来る世界。今まで獲物だった者たちが友人となり、それぞれの仲間のもとで幸せに静かな時を過ごす、理想の世界。

「幸せだった。とても、幸せだった」

キイは段々と声を荒くした。

リボルトの心もまた、激しく揺れ動いていた。

食べる事を心配しなくていいこの世界。入った群れの決まり事がなくなつた時、
え守つていればいい世界。ここでは群れを追われるなんて心配しな
くてもいいのだ。

「……そして、生きていくうえでの全ての心配事がなくなつた時、
俺の頭から、野性が奪われていったんだ」

野性。

生きる事。

生きるために、食べるものを一生懸命集める事。
そして、その事に対する、誇り。

そうだ。どうして、忘れていたんだろう。辛く、苦しい野性の生
活。それでもリボルトには誇りがあった。自分の役目に誇りを持つ
ていた。懸命に生き、いつかは死んでいくこの身体と精神に、誇り
を持っていた。

「思い出した」

キイは身震いをした。

「いいえ、思い出させてもらつた！ あなたに！」

キイが田を丸くして見つめる先。ガリの表情は、少しも変わらな
かった。

森の賢者（一）

ガリ。この雄猿は不可思議な存在だった。キイが興奮気味に騒ぎ、リボルトもまた、冷静でいられない状況になつてきたというのに、ガリは全く動じない。

考えてみれば、それもそうだ。このガリが、自分達の中に眠つてしまつた野性を引き出したのだから。野性が引き出されたことによつて、静かな死へと向かつていた心もまた新しく目覚めた今、自分達がすべきことは何なのだろう。

リボルトは高まる心を懸命に沈め、じつとガリを見つめた。

ガリもリボルト達をじつと見つめる。その目は猿の目であるはざなのに、フェリと同じ目をしていた。否、同じものを宿していたという方が正しいだろう。この輝きは、何も彼ら特有のものではない。熱帯草原特有のものではない。かつて、リボルトは、これを当たり前に感じていた。実際、自分の目にもこの当たり前の輝きがあつたのを覚えている。

そう、これこそが野性と心。

野を生きる全ての生き物が、この目を持つていた。

「光が見えるのかな」

ガリが言った。

今まで気付かなかつた事が不思議なくらい、ガリとフェリの目は輝いている。そして今や、キイの目も、そして、リボルト自身の目も輝いている。気付けた者にしか分からぬこの確かに輝き。それは、莊厳なものだとリボルトは感じていた。

「この光。当り前の生き物が当たり前に生まれ持つ光でな。だが、リポスに反する光もある。この光を持って生活を許される者は、

規律を守る者のみ

ガリの表情が渋くなる。

「この森の他の猿達のことを思い出しているのだろう。そうリボルトは感じていた。きっとこここの猿達も何らかの形で輝きを思い出した。

「此處の猿達は、光のもたらす本能に抗わず、周囲との諍いを始めたんだ。その激しさは日に日に増していき、ついにはリポス全体に目をつけられるまでとなつたというわけだ」

そして、その結果がこの有り様。存在を消されるという事態。ただガリだけが許され、こつしてリボルト達にも輝きを取り戻せることに至つた。

「俺が消されずに済んだ理由は、俺にも分からない」

ガリはリボルト達の意を察したように言った。

「ただ、俺は皆とは違う存在でなあ。少しづつ確実に血の気を増していく群れをあまりよく思つていなかつた。だから、俺の心はもう群れから離れていたんだろうな。そして、ついに群れから離反しようとした夜、あの事件が起つた」

離反しようとする者。猿達を消したという美しく残酷な魔物たちが、明確な意思を受けていたとすれば、このガリをどう捉えただろうか。

リボルトは考え、そして、納得に至つた。

「だから貴方は魔物に襲われなかつた」

「魔物か……」

ガリはその言葉だけを繰り返した。その黄色く光る目の奥に、何処かの光景が映し出されている。リボルトはそれを、单なる反射ではなく、きっと例の夜にガリが見た光景だろうと思った。直感だつた。

「あの魔物は何者だつたのだろう」

ガリが呟く。

「あれ程美しく、残酷な生き物は見たことがなかつた」

ガリの嘆きにも似た咳きに、フェリがちらりと視線を送った。

「あれは、リポスの使い。そう言われているよ」

フェリの言葉に、ガリもすぐに注意を向けた。

「サバンナでは知られている者なのかね？」

ガリの言葉に、フェリは頷く。

「実際に見たことがある。随分昔、真昼間にイナゴが全滅したという事があつてねえ。そのイナゴ、やつぱり目覚めてしまつてからは凶暴になつて、大暴走しては周囲の草花達を痛めつけていたんだ。その時、その魔物が出てきたというわけさ。もつと昔にも、出来た事があつたらしい。誰よりも長くリポスにいると言われているサバンナのサイの話だ」

フェリの表情が険しくなる。

「リポスの使いつてのは、とても美しい化け物だ。リポスが最終手段として、自分の身体を清潔にするために送り出すと言われているやつで、標的にされた者は容赦なく削られ、存在そのものを消されてしまう。その標的の事を知つていた奴も、やがては皆の記憶から薄れていき、思い出されることなくなつていく。ただ、目覚めている者だけが、忘れないでいられるらしいんだ」

フェリの言葉に、ガリは目線を落とした。

「つまり、俺の昔の仲間達はこの森のほとんどの者達から忘れ去られしていくだろうな。恐らく俺だけが、そして、お前達だけが、この出来事を思い出す事が出来る。そういうわけだね？」

フェリは小さく頷き、リボルト達を見た。

「だから、熱帯草原の者たちは規律をしつかり守るんだ。ハイエナの国やライオンの帝国だって、衝突しないようにしている。規律の範囲でそれぞれの生活を守つているんだ」

リボルト達を捕まえたハイエナの国でさえも、規律の範囲だつたのだろう。だとすると、猿達はもっと酷い破り方をしてしまつたという事になる。果たして、それはどんな破り方だったのだろうか。そして、それが、少しづつ削られて存在を消されるに値するほどの

事だったというのだろうか。

「ふむ、つまり、彼らを襲つたのはリポスの使い。標的になつた者は例外なく排除されるというわけか」

ガリが静かに言った。その声は何処か冷たく、余所余所しくも感じられた。フェリも頷き、軽く目を閉じる。

「消えてしまつた猿達は氣の毒だが、リポスの使いの行動は止めてはいけない。邪魔したものも敵とみなすからだ」

つまり、標的の存在そのものが罪となる。このリポスにおいては、の話だ。

フェリはその後も、リポスの使いについての話をガリとリボルト達に向けて話した。邪魔さえしなければ、彼らは襲つてこないといふ。言葉はあまり通じず、勿論、命乞いもほとんど通じない。誰も彼らを止めることなどできないという。

ガリのほうはフェリの話を聞きながら、度々何かを口籠りつつ、思案にふけり始めてしまつた。

リボルト達も、何も言葉を発せられなくなつてしまつた。

この場所に、そんな魔物がいたなんて。そんな驚愕が大きかつた。それも、リポスという場所の規律に大きく関わつてゐるなんて。話を聞けば聞くほど、リボルトの目には、この世界が今までとは違う雰囲気に満たされてゐるように見え始め、何処となく気持ちが落ち着かなくなつていくのを、リボルトは感じ始めた。

世界そのものが、おかしく見え始める。

リポスの外と比べて、何者かの手が世界全体に加わつてゐる気がするという疑惑。

それらがどうと押し寄せてきた。

八章 森の賢者（II）

森の賢者（II）

ガリの話を聞けば聞くほど、リボルトとキイは奇妙な気持ちを抱くようになっていた。

この世界、このリポスという箱庭には、全てを制する何者がが存在しているのではないかという疑問。そして、その何者か、このリポスにおいて、神ともいうべき者は、慈愛あふれる神というわけでは決してないということ。

フヨリがくすりと笑み、ガリもにやりと笑う。

まるで「臣とも、リボルト達がこの奇妙な感覚に浸り続けている事を面白がっているかのようだ、とリボルトは感じていた。

「リポスはかのような場所」

フヨリがひつそりとした声で言った。

「それを知る者は、沈黙を守り、このおかしな世界と向き合って、何回も、何回も、時を重ねていく」

そう、フヨリがいつか言ったこと。

リボルトやキイの手が届かないほどに重ね上げられた、フヨリの

年齢。

「まるで異種の木の葉を繋ぎ合せたような世界ではあるけれど、それに歯向かうのは、とても賢いとは言えない。

田覚めし者は、田覚めぬ者を勝手に起こしてはならない。田覚めたくない者を無理に起こすことになれば、それもリポスの意に反すること。

『リポスを拒絶するからとて、死を望むわけではなかつて』

そう言つた賢者も居たものよ

フヨリはまるで歌うようにそう告げた。

「お分かり？」

ガリとフェリ。先に目覚めた者たちが、リボルトにはまるで悪魔のように見えた。

「あたし達は知つていながら、知つていいかのよう振る舞わなくてはならない。それでも、歯向かい、全ての柵から抜け出したいこの欲求。この欲求に完全に負けてしまった時、その時が、死と同等であるつていうこと、あなた達ももう分かるよね？」

リポスを楽園だとだけ思つていた時とは全く違う感覚。

リボルトは今や、ずっと監視されているかのような錯覚に囚われていた。ひょっとするとこれは、単なる錯覚ではないのかもしねいという考えが、リボルトの思考を蝕んでいく。全てから自由になりたい。この窮屈感から、抜け出してやりたい。

無限だと思っていた世界が、狭い箱庭でしかないと氣付いた今、リボルトは、自分を囲っている柵の外へと抜け出したい気持ちで一杯だった。

きつとキイも同じだろ？、トリボルトは感じていた。

キイだけでない。先に目覚めたダステイも、ジュナイも同じ。さらには、ここに居るガリも、フェリも、例外ではないはずだ。

「俺達は、耐えねばならんのだよ」

ガリが言つた。

「このリポスに辿りつき、安息を手に入れた以上、死、あるいはその同等を拒絶する以上、俺達は耐えるべきだ」

ガリは空を見上げた。その表情には、リボルトから見れば、虚無より先の何かが見えた。無よりも先にある何か。だが、今のリボルトには、それが何なのかが分からなかつた。

「お前たちが何処へ行くかは知らない。が、この先、何処へ行つたとしても、何を見たとしても、これだけは覚えておくとええな。耐えろ。リポスに逆らうな。悲惨な消され方をしたくないのなら」

ガリの警告ともいえるその言葉は、リボルトにとつても、キイにとつても、非常に嫌な気持ちになるものだつた。

厳密にいえば、嫌というよりも、不気味さが拭えなくて不快といふことになるだろう。

ともかく、リボルトはガリのこの言葉によつて、非常に奇妙な気持ちになつた。そして、いつまでも払拭できないこの気持ちがさらに不気味に思えてきて、ついに、口にした。

「その言葉は覚えておく。それだけ聞ければ俺は満足だ。もう先へ進ませて貰うよ」

自分から訊ねてきておいて無礼なとも思つたが、リボルトはどうしてもそうすることしか出来なかつた。

「俺も、リボルトと一緒に行かなきや」

キイも慌てて賛同する。リボルトと同じ気持ちなのだ。

ガリがそれを見越したかは分からなかつたが、不意にくすりと笑んで見せたフェリには悟られていたかもしれない、とリボルトは感じていた。

「そろそろ先に進むのかい？ 走り疲れも忘れて、さらに走りつつていうの？」

フェリが幾らかからかつても、リボルトはここに留まる気にはなれなかつた。

「ああ、出来るだけ早くシェイド達の所へ帰りたいんだ」
きつとそこにいれば、ダステイもジユナイも帰つてくるに違ない。

「そう信じるしかなかつた。

「無限ともいえるこのリボスにて」
ガリが口を開いた。

「『急ぐ』という事もまた嗜みのひとつ」
遠くを見つめる形で、ガリは独り言のようつていう。
「嗜みをなくすことは、精神の死をも促す」
ガリの言葉は何処までも低く、何処か寂しげだった。
「行くがいい。お前たちの場所へ」

九章 分裂した世界（一）

九章

分裂した世界（一）

「世界が壊れる」という表現は、まさにこの光景が相応しいだろう。

そうリボルトは思った。無論、世界が壊れるなどと、今まで思つたこともなかつた。だが、今、目の前にて広がつてゐるそれこそが、その表現を生み出したのだ。

人間が作ったモノは、人間が使わなくなると朽ちてリボルト達が使う状態へと適応していくが、これはまさに逆のことだつた。

否、もしかしたら、人間でさえも不便かもしれない。

不便どころか、脅威を覚え、何かを唱え始めるかもしぬないとさえリボルトが思つた。

問題は、彼らがそれに直面した場所。

動搖していなかつたのは、フェリだけだつた。

リボルトもキイも、それを見た瞬間に啞然とした。

どうしてこんなことに、とほぼ同時に呴いた。

キイが言うには、一度、野を炎という悪魔が焼き払つたという事件に巻き込まれた事があるらしいのだが、この恐怖はその炎とやらを目の当たりにした時以来だといふ。

リボルト達の前に広がる世界は、それほどまでに異様だつた。

そこは、自然的でもなければ、人間達の世界とも何か違う。そもそも、生き物が住むという事が出来ないようになつてしまつた。あらゆる所に線が引かれたようになつており、その線を境に空間が歪んでゐる場所なんて、誰が住めるだろつか。木も、草原すらも、居なくなつてゐる。雲も、否、空自体が、別の何かに変わつ

ている。色は、灰色、赤、青、白、黒、緑などがめちゃくちゃに散りばめられているようで、リボルトが普段見ることのない色までも当たり前のように浮かんでいた。

ずっと田にしていると、何処か身体が悪くなつたような氣になつた。

しかし、フェリの驚きは薄く、呆れたようにこの場を見やり、ため息交じりに言つた。

「分離したのか」

何か知つてゐるかのような口ぶりに、思わずリボルトは声を荒げてフェリに訊ねた。

「何か知つてゐるのか？」

フェリは目を細め、その場を見つめる。

「まだ分からぬ。とにかく、この先に行かないと

「この先に行くのッ？」

キイが慌てて問い合わせた。

リボルトもわが耳を疑つた。

どう見ても、危ない場所にしか見えない。これより先に言つてはいけないと、彼の中に巢食う勘が訴えてくるようだつた。

しかし、フェリは何故一匹が驚くのか分からぬといつた様子で頷いた。

「行かないと分からぬし、あたし、元々この先に行くためにいつてきたんだもの」

そう言って、何のためらいもなく、そのまま聞へと飛び込んでいつてしまつた。

リボルトとキイは暫く惚けてフェリの姿を田で追つた。

フェリは、当たり前の空間から、ひと越えで氣味の悪い空間へと入りこんでいつてしまふ。心配していたわけではないのだが、フェリの姿は変わつたりしなかつた。フェリはフェリの今まで、謎の空間をちょこちょこと彷徨つてゐる。

リボルトはちらりとキイを見た。

キイもリボルトを見上げ、恐る恐る口を開いた。

「行く？」

「行こうか？」

リボルトは素直に怖いと思つていた。

怖いという感覚は無視できない。怖いという感覚がなくなつてしまつたら、生きていけるわけがないのだ。長生きできない者は、いずれも怖いという感性を失つてしまつた者達。狩りの間でさえ、怖いという気持ちは大事になつてくるのだ。

フェリはそんな大切な気持ちすらも忘れてしまつたのだろうか。しかし、リボルトは、長くこのリボスにいるのなら、それも仕方ないという気もしていた。

キイと声を掛け合つて、同時に氣味の悪い空間へ足を踏み入れてみると、耳の中を刺激するような弾力のある音が聞こえた。自然にしていて絶対に耳にしないような音だ。真似鳥などが聞くと、一気に流行りそくなくらい、馴染みのない音だつた。その音は数秒程度リボルト達の耳にまとわりついて、すつと溶けるように消えていった。

「なんだもう、今のは」

キイの問いに答えられるわけもなく、リボルトは無言で周囲を見渡した。フェリはもう随分離れた所から、こちらを見つめていた。

「早くおいでよ」

あんなに遠くにいよいよ見えてゐるのに、フェリの声は随分近くに聞こえた。

リボルトとキイはほぼ同時に走りだした。この空間を独りきりで走れるほど、怖さを感じる能力が鈍つていなかつたからだ。やつとフェリに追いつくと、フェリはくすくすと笑いを噛み殺して、小さな声で言つた。

「やつぱり、あんた達は若いね」

リボルト達の反応を待たずに、またフェリは先に行く。まるで、行くべき場所を最初から心得てゐるかのようだつた。

リボルト達は止むを得ずまたフェリに続いた。彼らには、ここが何処なのかはっきりとしなかつたからだ。狼達の住まう山は何処か、その下に広がる森は何処か、湖は何処か、月は何処か、全く分からなくなっていたからだ。

この得体の知れない空間の中で、キイがぽつりと呟いた。

「ショイドとブレイズ、どうなちゃつたんだろう……」

此處に待っていたはずの一匹、そして、その他、ここに暮らしていたはずの者たちは、気配すら残っていない。消えてしまったのか、何処かへ逃げたのか、逃げたとしたら、何処へ逃げたのか、様々な疑問が、リボルトの頭を巡った。

再びフェリに追いつくと、フェリは真っ直ぐ前を見つめ、強張つた表情を作っていた。

「ここがどうしてこうなったか、分かる？」

フェリの急な質問に、リボルトとキイは何も言わずに首を振る。

寧ろ、一番知つていそなのはフェリだ。と、リボルトは思つていた。

「誰かが禁忌を侵したんだ。それも、この地域一帯を巻き込む形で、フェリはぽつりと呟くと、じつと一点を凝視した。

「あたしが会いたい人は、まだここにいる」

その言葉に、リボルトは思わず口を開いた。

「此處にいた者達はまだいるのか？」

いないとしたらどうなつてしまつたのだろう。そんな疑問を仕舞いこんで、リボルトはフェリの反応を待つた。フェリは、じつと眼を細め、さらに小さく呟いた。

「あたしには分からない。でも、存在が消されたりしてはいいない！」

…

フェリは振り返り、リボルトとキイを順番に見つめた。

「《あの人》に会えば、もっとはっきりとするとと思う

そう言って、再び走りだした。

九章 分裂した世界（一）

分裂した世界（一）

進んでいるのか、いないのか、フェリを追いかけるリボルト達には見当もつかない。そもそも、フェリはどうなのだろうか。フェリは分かつていて走り続いているのだろうか。そして、フェリが会いたいという人は、本当にここにいるのだろうか。

走れば走る程、それらはかなり疑わしいこととなつた。

生き物の気配もなく、風が流れるという気配もなく、時が流れているという感覚すらもないこの世界で、じつと留まるような者がいるのだろうか。

リボルトは疑わしく思い始めた。しかし、ここでフェリに置いていかれてしまうのは、とんでもないことだ。誰もいないこの世界。かつては緑溢れ、リボルトの生まれ育った場所と大して変わらない住みやすい場所だったのに、どうしてこんな事になってしまったのか。この場所が、自分の身体にどう影響してくるのか。リボルトの本能は、これを危機と受け取っていた。

「フェリ……」

リボルトは走りながら、声をかけた。本当は立ち止まりたかったが、立ち止まつたところでフェリに置いて行かれるだけだと分かっていた。

「何処へ行くんだ？」

「言つたでしよう？」

フェリは前を見つめたまま、返事をする。さほど大きな声も出していないのに、フェリの声はよく響いていた。

「『あの人』のところだつて……」

フェリの返答は予想通りで、期待はずれのものだった。何処へ行

くことになるのか、これからどうなつてしまつのが、何も分からない。そんな状況でただ走り続けるなんて、気になつて仕方がない。

「いいからついてよ。そのうち分かるんだから」

今のフェリはリボルト達に構つている暇も惜しい程、進まなければならぬという気持ちに支配されていた。それほど、《あの人》とやらに会わなくてはいけないのだろうか。そんなに重要な人物なのだろうか。

ともかく、これ以上訊ねても答へなさそなフェリに、質問したつて仕方ない。それどころか、追いかけ続ける体力を無駄に消費してしまうだけだ。

ふとその時、黙つて走っていたキイが、目を見開き、吠えるようにフェリに呼びかけた。

「待つて！ 何かいる！ 何かいるよ！」

フェリが急に立ち止った。

辺りを見渡し、ちらりとキイを振り返る。リボルトも周囲を窺つた。しかし、キイの言つ《何か》は、確認出来なかつた。

キイは一点を見つめたまま、固まつてしまつたかのように立ち止まつてゐる。

「あつち、ほら、こつちを見てる、ねえ、見えないの？」

キイの見つめる場所に目を合わせても、リボルトには何も見えなかつた。どうしようもなく、首を傾げ、フェリの方を向いて訊ねたが、フェリも首を振つた。

「あたしには見えない」

「でも……」

「キイの様子から、嘘をついているよつには見えない。見えない感じない。キイの言つてゐる場所に何かあるよつにはとても思えないと」

「でも、本当に……」

「あたしは、居ない、とは言つていない」

フェリは目を細め、じつとキイの見つめる方向を見つめた。目と

は裏腹に、口元からはやや牙が覗く。

「今日はキイの番……」

フェリの呟きに、キイが小さな悲鳴を上げた。リボルトから見て、今のキイは、威圧と恐怖で雁字搦めにされる小動物のようだつた。

「どうしよう、俺、どうしたら……」

キイの尾が忙しく動く。尋常でない慌てぶりに、いよいよボルトも焦りを感じてきた。自分には全く見えないし感じないけれども、何者かがキイを狙っているらしい。それだけは把握できる。あとは、フェリを頼るしかなかつた。

「あたしが行きたいのはあっち」

フェリは頭を使って方向を示し、表情を抑えた顔でキイを見た。「で、あんたが見えている奴らがいるのはどっちだけ?」

「あっち。ずっと俺を見てる」

両者の示す方向は、ややすれていった。しかし、大別的にとれば、方向は同じ。フェリやリボルトに見えない分、これ以上進むのは危険でしかない。しかし、フェリの表情には、退くという文字が窺えなかつた。

「一体、何がいるんだ?」

リボルトはフェリを質した。フェリが何でも知っているとは限らない事は重々承知だ。けれど、この件に関しては、フェリも何かしら心当たりがあるようだという雰囲気は読みとれた。

「まさか、あの猿達を消したという者たちが……?」

まっさきに思ったのはそれだつた。『存在』を消すという恐ろしい役割を担う者。それが、ここにいることぐらい予想できた。しかし、それならばどうしてそれらはキイだけを狙い、フェリやリボルトには見ることすらも出来ないのだろうか。

「違う。そいつらじやない。それだけは確か」

フェリははつきりとそう言つた。そして、キイにそつと小声で告げた。

「恐いと思つ。けれど、あたしとリボルトの間で、とにかく走るん

だ。あいつらが動いたら、あいつらに捕まらないように動いて欲しい。《あの人》のはすぐ近くにいるんだ。そこまで辿り着けば、あいつらも追つてこないはず……

「本当に？」

フヨリの言葉は、キイにとって多大な安心感へと繋がつたらしい。キイはじっとその何者かがいる方向を見つめ、しつかりと頷いた。

「分かった。走るよ」

フヨリは小さく頷き、リボルトとキイの両方を見た。

「よし、行こうか」

九章 分裂した世界（三）

分裂した世界（三）

今のリボルトとキイには、フェリの感覚だけが頼りだった。

言葉に出来ない不安が、キイの周囲に漂っている。リボルトにとつてもそれは、大きな恐怖だつた。何故、どうして、キイが狙われているのかは分からぬし、キイに何が見えているのかも見当もつかない。だが、フェリの感覚にあわせて走り続けても、キイの不安そうな鳴き声は、漏れるばかりだった。

「どうしよう、どうしよう、あいつら追つてくるよ。ねえ、リボルト、フェリ、見えないの？ 君たちにはどうして見えないの？」

まるで子ども。キイの心はまだ大人になつていない。実際生きている期間はリボルトよりも長いかもしぬいけれども、それでも、キイのこの様子は、まだ親離れもしないうちに親をなくしてしまった子どものようだった。

「落ちつきな。叫んではいるよ、遅れてちまうよ！」

フェリが牙を剥きながら忠告する。持久力を考えれば、種族の違うフェリが一番劣るはずなのだが、それでも今は、キイの方が明らかに憔悴していた。不安と焦りが、その小さな身体を蝕んでいる。

「キイ、今はフェリを信じて走ることだけ考えよう」

リボルトはキイに告げた。

きっと、キイの見ているものは、自分が考えているよりもずっと恐ろしくて、得体の知れない何かなのだろう。しかし、リボルトはあえてその事を踏まえずに、キイを励まし続けた。とにかく今考へるべきは、フェリの言つている場所まで、疾走し続けること。

キイは半ば泣きながら、必死に、フェリとリボルトに足並みをそろえていた。

「吠えた。あいつらが吠えてる。仲間を集めるんだ。なんの、あいつら、何者なの？」

「フェリッ！」

リボルトは堪らず、前だけを見続けるフェリに咆哮した。フェリはリボルトの方向にも動じずに、依然として前だけを見続けている。「あどどのくらいなんだ？　《あの方》とやらは一体何処にいるんだ？」

フェリが眉間にしわを寄せた。彼女が何か告げようとしたその時、キイがまた悲鳴を上げた。

「来た。来たよ！ 助けて、すぐ速いよ！ 大きい奴が！ 大きい奴が先頭にいるんだ！ 真っ直ぐ走つてくる。追いつかれてしまうよ！」

キイの声も表情も、まさに異常だった。彼の恐怖は本物で、リボルトには自分が見えていないのが不思議なくらい、この事態の異様さを感じ取れた。キイは一生懸命走っていた。息を切らしながら、自身の力を根源まで出しきる様に、走り続けていた。

「フェリッ！」

リボルトはまた、フェリを急かした。

フェリは猫族独特的の唸り声をあげて、大声で返答した。

「分からぬよ！」

フェリの声はこだまして、この不自然な空間を反響し続ける。

「ただ、《あの方》は確かにこの先にいるんだ。いいから黙つてついてこいよ！」

フェリも焦つていた。彼女にもキイが見ているものは見えないと言つていたが、そのことがやはり、彼女にも不安を与えていたのだろう。そして、そのキイにしか見えないモノについて知つているような素振り。リボルトは小さく唸りつつ、これ以上彼女には口を開かなかつた。

キイは震えながら、呟いた。

「もういやだ……」

息を切らしながら、どんな獲物を追う狼よりも必死に走りながら、

キイは叫んだ。

「もういやだよッ！」

その直後、キイの姿は消えた。まるで、積もった塵が風によって飛ばされるように、キイの姿は、リボルトとフェリの間で、突然消えてしまった。フェリも、リボルトも、すぐに足を止め、キイの消えたその地点を凝視した。何がいるわけでもない。ただ、キイが消えたという事実以外、何も分からぬ。

この分裂した世界には、もはや、リボルトとフェリ以外はいなかつた。

「キイ……？」

リボルトの問いは、このめちゃくちゃな世界の奥へと吸い込まれていく。フェリはじつとキイの消えた地点を見つめ続け、あがつていた尾をゆづくつと下げた。

「リボルト……」

落ちつき払った声には、空虚ばかりが漂っていた。

フェリの視線が静かに、前方へと移る。

「そこだ」

目の前にあるのは、洞窟。めちゃくちゃに散りばめられた線と色の間に、その洞窟だけ、やけにくつきりと存在していた。

「その中に、『あの方』がいる」

フェリはそう言ひと、走りだしてしまった。

十章 理想の屍（一）

十章

理想の屍（一）

フェリの言う『あの方』は、洞窟の奥に寝そべっていた。リボルトはその者を見て、はつとした。

きりつと伸びた耳に、ぴんと張つたひげ。白く美しい毛並みをもつたその者は、リボルトとフェリと交互に見つめ、微かに笑んだ。まるで、最初からリボルト達が来ることが分かつていたかのようだつた。いや、それだけでなく、今まであつたこと全てを見通しているかのようなその表情に、リボルトはつい身構えた。

そう、そこに居た白い大山猫、ビアレスは、余裕たっぷりの表情でリボルトを見ていた。

「久しぶりね、カラカルのフェリ」

ビアレスが小さく口を開けて喋つた。フェリは深くお辞儀をしてそれに答え、まっすぐビアレスの姿を見つめた。ビアレスは微かに目を細めてそれに応えると、すぐにリボルトへと目線を移した。

「そして、『赤狼^{ドール}』の若者……リボルト」

ビアレスの声にリボルトは動搖した。外はあんなにも異常なことになつているのに、どうしてここにビアレスは無事なのだろうか。そればかりが気になつて仕方ない。そもそも、この場所を離れてリボスの目に着くようなことをしてしまつたのは、このビアレスという存在に触れたからだとリボルトは思つていた。結果、意味も分からぬうちに仲間を失い、今もその不確かな恐怖をじわじわと感じている状態で、このビアレスという山猫と対話するのは途轍もなく不安なことだつた。

しかし、ビアレスはそんなリボルトの気持ちを知つてか知らずか、話を続けた。

「外で何があつたか。貴方達に何が起つているか。私には分かる。私がよくないと忠告したものに触れて、全てを思い出してしまったのね」

ビアレスが何のことと言つているのか、リボルトには分かつた。野性と心を探る。ビアレスに会わなければ思いもしなかつたことだ。リボルトはその顔を反論したかった。だが、反論できなかつた。ビアレスの視線が、それを制していたからだ。

「この周辺は全てリセットされました」

ビアレスが言つた。

「貴方達もいすれ捕まつて、全てを書きかえられてしまふでしょう」「どういう意味ですか？」

リボルトにはビアレスの言つている意味が全く分からなかつた。試しにフェリの表情を見てみると、分かつてゐるのか分かつていいのか判断のつかない顔で、ビアレスを真つ直ぐ見つめているばかりだつた。リボルトがビアレスに視線を戻すと、ビアレスはゆっくりと答え始めた。

「この辺りは生き物」と、生まれ変わるので。今、全ての生き物が捕われ、中身を書き変えられようとしている。それは、消失ではなくて、生まれ変わり。今までのその者を捨てて、新しいその者へと変わるので

「ここに住んでいた皆が？」

フーリが口を挟んだ。信じられないという表情で、ビアレスに視線を送つてゐる。ビアレスは静かに頷いた。

「私にはどうしようもない事。これは、ここを管理する者たちが決めたことなのよ。この土地の書き替えはもう始まつてゐる。捕まつた生き物たちもいすれ、書きかえられてしまつでしよう。そうすれば、ここは全く新しい土地になるのです」

「俺達も、その、書き変えられる？」

リボルトの問いに、ビアレスは頷いた。ゆっくりとした動作が不気味で、それがさらにリボルトの不安を搔き立てた。

「ここを管理する者に捕まれば、貴方達も書き変えられるでしょう。フェリも例外ではないわ。この土地に踏み込んだ以上、書き変えなければならないと判断された」

「ここを管理する者というのは、何者ですか？」

フェリが訊ねた。

「奴らは消去人じゃなかつた。あたしも知らないような姿をした奇妙な者たち。彼らは何者なのですか？」

フェリの問いに、ビアレスは軽く溜め息をついた。

「それには答えられない。ただ、管理する者、とだけ。消去人ではない、とだけ。貴方達は許されない土地で血を流すという最大の禁忌までを侵してはいない。それはとても重要なことだから、消されることはない。ただ、書き変えられる。それだけです」

「それだけ、が嫌なのです」

リボルトはふと声を漏らした。ビアレスの耳が微かに動く。

「俺は俺でいたいんです。他の皆も皆でいてほしい。それは許されないのでですか？」

リボルトの問いは自然に出てきたものだつた。口に出してから、リボルトは段々と頭で理解していく。そう、書き変えられるという事の恐怖。キイは捕まつてしまつた。そのうちに、キイはキイでなくなつてしまつたのだろうか。そんなこと、リボルトは許せなかつた。

ビアレスはしばし黙した。リボルトには何かを考えているようにも見えたし、返答を拒んでいるだけのようにも見えた。しかし、やがて小さく息を吐いて、口を開いた。

「やはり、貴方は少し変わつていて」

無機質な声だった。

「でも、予想どおりの言葉だったわ」

ビアレスは再び微笑みを浮かべ、顎を前脚の上にのせ、静かに語

りだした。

「捕まつた者たちはこの辺りの消された空間の何処かに閉じ込められている。けれど、貴方の望む者がそこにいるかは分からぬ。書き変えられるのが嫌なのね。それならば、抵抗するといい。けれど、これだけは覚えていなさい」

そう言って、ビアレスは尾を微かに振つた。

「血を流すような争いは行つてはいけない」

その言葉だけが、妙に浮き出でているようだった。

フェリはその言葉に深く頭を下げていた。リボルトはただ、ビアレスの姿を見つめたまま、ぼんやりとその言葉を頭に刻んだ。

血を流すような争いは行つてはいけない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3850g/>

永遠ノ園

2011年2月1日02時40分発行